

2015 年度

アイヌ語動詞の結合価と項構造

千葉大学大学院
人文社会科学研究科
博士後期課程
小林美紀

目次

第一章 本論文の目的と方法	1
1.1. 本論文の目的	1
1.2. 研究方法	2
1.3. 本論文の構成	5
第二章 アイヌ語動詞の基本的構造と結合価	7
2.1. アイヌ語動詞の基本的構造	7
2.2. 結合価による動詞区分	8
2.3. 結合価からみた接頭辞の分類	9
2.3.1. 増価接頭辞	9
2.3.2. 減価接頭辞	10
2.3.3. 結合価を変更しない接頭辞	10
2.3.3.1. 所属形的接頭辞	10
2.3.3.2. 副詞的接頭辞	11
2.4. 結合価からみた接尾辞の分類	11
2.4.1. 増価接尾辞	12
2.4.2. 減価接尾辞	12
2.4.3. 結合価を変更しない接尾辞	12
第三章 アイヌ語の動詞基本形とその項の意味役割	15
3.1. 一項動詞	15
3.1.1. 動作主主語	15
3.1.2. 対象主語	15
3.1.3. 空間主語	15
3.1.4. 複数の意味役割をとる一項動詞	16
3.1.4.1. 動作主と対象をとる動詞	16
3.1.4.2. 対象と空間・場所をとる動詞	16
3.1.5. 一項動詞の分類	18
3.2. 二項動詞	19
3.2.1. 動作主主語・対象目的語	20
3.2.2. 動作主主語・空間目的語	20
3.2.3. 対象主語・空間目的語	20
3.2.4. 複数の意味役割をとる二項動詞	20

3.2.4.1. 主語が動作主あるいは対象で空間・場所を目的語とする動詞	20
3.2.4.2. 三通りの項の組み合わせをとる動詞	21
3.2.5. 二項動詞の分類	22
3.3. 三項動詞	23
3.4. 小括	23
第四章 有対動詞	25
4.1. 有対動詞とは	25
4.2. 使役接尾辞と動詞形成接尾辞	25
4.2.1. 金田一(1960)	25
4.2.2. 金田一・知里(1936)	29
4.2.3. 知里(1942)	30
4.2.4. 福田(1956)	31
4.2.5. 田村(1988)	32
4.2.6. 先行研究での言及	33
4.2.7. 使役接尾辞と動詞形成接尾辞の区分	33
4.3. 有対動詞の派生タイプ	35
4.4. 本論文で扱う有対動詞の範囲	35
4.5. 有対動詞のタイプ	37
4.5.1. $\sqrt{\cdot}$ ke と $\sqrt{\cdot}$ V の対	37
4.5.2. $\sqrt{\cdot}$ と $\sqrt{\cdot}$ V の対	38
4.5.3. $\sqrt{\cdot}$ と $\sqrt{\cdot}$ ke の対	39
4.5.4. $\sqrt{\cdot}$ n と $\sqrt{\cdot}$ n·ke の対	40
4.5.5. 一項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke と二項動詞 $\sqrt{\cdot}$ V または $\sqrt{\cdot}$ ke	41
4.5.5.1. 鷓川方言における同一語根から派生した一項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke と二項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke	41
4.5.5.2. 沙流方言における同一語根から派生した一項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke と二項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke	42
4.5.6. 一項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke と二項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke	44
4.5.6.1. 浦河方言の一項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke と二項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke	44
4.5.6.2. 沙流方言の一項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke と二項動詞 $\sqrt{\cdot}$ ke	45
4.5.7. 有対動詞の分類	45
4.6. $\sqrt{\cdot}$ ke の L タイプ	45
4.6.1. 語根 rew からの派生	46
4.6.2. 語根 mak と語根 noy からの派生	47
4.6.3. L タイプの成立過程	48

第五章 項構造と語彙概念構造	51
5.1. 語彙概念構造	51
5.2. 項構造	53
5.3. 語彙概念構造と項構造の関係	56
5.4. 本論文で項構造を用いる理由	57
5.5. 反使役化	57
第六章 一項動詞と対象目的語動詞の項構造	61
6.1. 有対動詞の基本的な項構造	61
6.2. 無対一項動詞の項構造	62
6.2.1. 非能格動詞	62
6.2.2. 非対格動詞	62
6.3. 二種類の使役形	62
6.3.1. 動作主と対象を主語とする一項動詞	63
6.3.1.1. as 「立つ」	63
6.3.1.2. \sqrt{n} と \sqrt{p}	66
6.3.2. 意味的特徴	68
6.4. 使役化と反使役化	68
6.5. 項構造における項の表示	70
6.6. 空間主語	71
6.7. 対象目的語動詞の項構造	72
6.8. 小括	73
第七章 三項動詞と空間目的語動詞の項構造	75
7.1. 空間目的語動詞の意味構造に関する先行研究での指摘	75
7.1.1. 中川(2003)	75
7.1.2. 佐藤(2005)	76
7.2. 二項動詞と三項動詞の有対動詞	76
7.2.1. 三項動詞の項構造	77
7.2.2. 三項動詞と対になる二項動詞の項構造	77
7.2.2.1. us	77
7.2.2.2. un	82
7.2.2.3. kot	84
7.2.2.4. o	85
7.2.3. 有対空間目的語動詞の項構造	89

7.3. 無対の空間目的語動詞の項構造	91
7.3.1. oma	92
7.3.2. osma	94
7.3.3. kus	96
7.3.4. kamu /kampa	97
7.3.5. otke	100
7.3.6. seske	102
7.3.7. kik	103
7.3.8. kuta	106
7.3.9. pici	108
7.3.10.kere	111
7.4. 小括	113

第八章 動詞結合価の揺れと自他同形動詞	115
8.1. 動詞結合価の揺れに関する先行研究	115
8.1.1. 切替(1988)	116
8.1.2. 柳下(1989)	117
8.2. 動詞結合価に揺れがみられる動詞	117
8.2.1. √-ke	117
8.2.2. 方言間で結合価の揺れがみられる語—浦河方言の事例—	118
8.3. 自他同形動詞の二つのタイプ	119
8.4. 一項動詞と二項動詞の揺れ—項の意味役割による分析—	120
8.4.1. 使役交替	120
8.4.2. 対象付加	121
8.5. 二項動詞と三項の同形動詞—項の意味役割による分析—	121
8.6. 0項動詞にみられる結合価の揺れ	122
8.6.1. 5つの可能性の検討	126
8.6.1.1. sir が所属形 siri である可能性	126
8.6.1.2. 0項動詞の前に来る名詞が副詞節のマーカ―として機能している可能性	127
8.6.1.3. 0項動詞の前に来る動詞がトピックである可能性	128
8.6.1.4. sir の接頭している一項動詞が二項動詞としても機能する可能性	129
8.6.1.5. sir が副詞的要素になっている可能性	132
8.6.2. 0項動詞の結合価の揺れと項の意味役割	133
8.7. 小括	134

第九章 所属形的接頭辞 e-/o-による派生	135
9.1. e-/o-に関する先行研究	135
9.1.1. 金田一(1960)	135
9.1.2. 田村(1973)	135
9.1.3. 切替(1989)	136
9.1.4. 奥田(1999)	137
9.1.5. 佐藤(2005)	137
9.1.6. 先行研究での記述	137
9.2. 一項動詞	137
9.3. 二項動詞	139
9.3.1. 対象目的語動詞	139
9.3.2. 空間目的語動詞	139
9.4. 三項動詞	140
9.5. 小括	143
第十章 結論	145
略号一覧	146
参考文献	146

第一章 本論文の目的と方法

1.1. 本論文の目的

アイヌ語は日本列島北部の系統関係不明の言語である。類型論にみると基本的に主要部表示型の言語であり、動詞は複雑な構造を持つ。そのため、動詞の構造の分析がアイヌ語の構造を理解する上では非常に重要である。

本論文はアイヌ語の動詞基本形の意味的な特徴を明らかにすることを目的としている。そのためにアイヌ語動詞の基本形を結合価と項の意味役割から分類し、その構造を項構造によって表示する。アイヌ語動詞は派生や重複、抱合などにより、複雑な構造を持ち得るが、その構造には一定の規則性がある。その規則性は動詞基本形の意味的特徴により生じている。アイヌ語動詞の構造を理解するには、動詞基本形の意味的な特徴を把握することが重要である。

筆者はこれまで動詞の形態と意味には相関関係があるという視点からアイヌ語動詞の構造を分析してきた。そして、その過程において、動詞の形態と意味の間には強い相関関係があることが明らかになる一方で、動詞の形態上にはその区分がはっきりと現れない、ある一定の意味的特徴を持った動詞類があることもわかった。それは本論文で「空間目的語動詞」と呼ぶ動詞類である。

アイヌ語には名詞が文法的に「場所」であるか否かの区別があることが知られており、文法的な「場所」を目的語とする動詞は「場所目的語動詞」と呼ばれている。この場所目的語動詞は単に動詞の形態を見ただけでは判別できないが、目的語である名詞が文法的な「場所」であるか否かで判別が可能である。場所目的語動詞とされるものには、二項動詞と三項動詞がある。場所目的語動詞である二項動詞は、項の一つが「場所」であるため、対象を目的語とするプロトタイプの他動詞とは異なる性質を持つ。一般的に一項動詞(自動詞)には非対格自動詞と非能格自動詞の二種類があることが知られている。本論文でも言及するが、場所目的語動詞の派生上の特徴や場所以外の項の意味役割は、二項動詞でありながら、むしろ非対格自動詞と共通する部分がある。

本論文では場所目的語動詞とされていないものの中にも、場所目的語動詞同様の特徴を持つ動詞があることに着目する。本論文で取り上げる空間目的語動詞は、必ずしも文法的な場所を目的語しない。いずれも意味的な空間・場所を目的語とするものである。場所目的語動詞は空間目的語動詞の中に含まれるが、空間目的語動詞の方が、より広い範囲を指している。

本論文では、まず結合価に着目し、動詞基本形の分類を行う。そして、その上でその項の意味役割から、より細かく分類を行い、各分類の意味的な特徴を項構造を用いて表示する。

1.2. 研究方法

本論文ではアイヌ語動詞の用例を収集し、結合価およびその項の意味役割から分類を行った。そして、その動詞の特徴を項構造を用いて示した。

用例の収集はアイヌ語沙流方言を中心に行った¹。沙流方言を中心的に扱ったのは、アイヌ語研究において調査が数多く行われてきたのは沙流川沿いの地域であり、公開されている資料も他方言と比較して数が多いためである。本論文で提示した沙流方言の用例は公刊されたテキスト、あるいはウェブ上で音声公開されている口承文芸資料から収集したものである。用例収集に使用した口承文芸資料には筆者自身はその整理作業に関わったものもある。国立大学法人千葉大学(2015)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第二年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』中の口承文芸資料公開にあたって、一部の音声資料の文字化に筆者自身も参加している。

沙流方言の資料が最も多いとは言っても、やはり現状では参照できるものには限りがあるため、公刊されている千歳方言、静内方言、幌別方言、虻田方言のテキストも必要に応じて参照し、併せて利用した。参照した主なテキスト、音声は次のとおりである。

沙流方言

- アイヌ民族博物館(1997)『上田トシのウエペケレ』アイヌ民族博物館
アイヌ民族博物館(2015a)『上田トシの民話』1. アイヌ民族博物館
アイヌ民族博物館(2015b)『上田トシの民話』2. アイヌ民族博物館
アイヌ民族博物館(2015c)『上田トシの民話』3. アイヌ民族博物館
萱野茂(1998a)『萱野茂のアイヌ神話集成』1. 平凡社
萱野茂(1998b)『萱野茂のアイヌ神話集成』4. 平凡社
萱野茂(1998c)『萱野茂のアイヌ神話集成』5. 平凡社
萱野茂・須藤功(1976)『チセ・ア・カラ』未来社
金田一京助(1931)『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東洋文庫
久保寺逸彦(1977)『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店
国立大学法人千葉大学(2015a)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』1. 千葉大学
国立大学法人千葉大学(2015b)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』2. 千葉大学

¹ 表記はローマ字表記で母音は a,i,u,e,o の5文字、子音は p,t,k,m,n,s,clt[,h,r,y,w の11文字を用いた。引用に当たり、表記は引用者が修正、統一した。また、日本語訳は出典を参考に引用者が付けたものであるただし、用例ではなく、先行研究での言及として引用する際は先行研究で用いられている表記をそのまま引用した。

国立大学法人千葉大学(2015c)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』3. 千葉大学

田村すゞ子編(1984)『アイヌ語音声資料』1. 早稲田語学教育研究所

田村すゞ子編(1985)『アイヌ語音声資料』2. 早稲田語学教育研究所

田村すゞ子編(1986)『アイヌ語音声資料』3. 早稲田語学教育研究所

田村すゞ子編(1989)『アイヌ語音声資料』6. 早稲田語学教育研究所

田村すゞ子編(1997)『アイヌ語音声資料』10. 早稲田語学教育研究所

田村すゞ子編(1998)『アイヌ語音声資料』11. 早稲田語学教育研究所

田村すゞ子編(2001)『アイヌ語沙流方言の音声資料1ー近藤鏡次郎の録音テープに遺されたワテケさんの神話』(「環太平洋の言語」成果報告書 A2-008)大阪学院大学情報学部

平石清隆(2003)「沙流地方のウエペケレ:上田としの伝承」アイヌ文化振興・研究推進機構編(2004)『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』アイヌ文化振興・研究推進機構. 555-742.

本田優子(2001)「川上まつ子アイヌ語文例集」『アイヌ民族博物館研究報告』7.9-76.

Nakagawa, Hiroshi and Anna Bugaeva (2012) A web-accessible corpus of folktales of the Saru dialect of Ainu by Mrs. Kimi Kimura (1900-1988). ELDP, SOAS, University of London. <http://lah.soas.ac.uk/projects/ainu/>(音声のみ)

千歳方言

中川裕(2001a)「トゥムンチ ペンチャイ, オコッコ ペンチャイーアイヌ語千歳方言 叙事詩テキスト」三浦佑之(編)『叙事詩の学際的研究』千葉大学.91-146

胆振方言

知里真志保(1937)『アイヌ民譚集』郷土研究社。(『知里真志保著作集』1, 平凡社, 1973年所収)

金成まつ・金田一京助(1963)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』3. 三省堂

静内方言

静内町郷土史研究会編(1992)『静内地方の伝承』2. 静内町郷土史研究会.

静内町郷土史研究会編(1994)『静内地方の伝承』4. 静内町郷土史研究会.

虻田方言

銀の滴講読会編(2010)『遠島タネランケ氏の伝承 アイヌ語虻田方言資料』銀の滴講読会

この他に鵜川方言、浦河方言についても本論文では言及している。本論文でのアイヌ語鵜川方言とは、北海道勇払郡鵜川町(現むかわ町)在住の故新井田セイノ氏、吉村冬子氏のアイヌ語を指している。本論文で用いた鵜川方言の資料は、故片山龍峯氏が1996年～2002年に行った、新井田氏、吉村氏、北海道沙流郡門別町(現日高町)富川町の故鍋沢強巳氏の三氏からの聞き取り調査の録音テープである。テープは全部で66本、約150時間あり、基本的に片山氏が日本語の単語を挙げ、それに対応するアイヌ語を三氏から聞き取る形で進行している。2011年度から2013年度まで千葉大学の中川裕先生が研究代表者である科学研究費補助金基盤研究(B)「アイヌ語鵜川方言の音声資料による記述的研究」でこのテープの整理を行い、筆者もこの整理作業に参加した。このプロジェクトの成果は千葉大学人文社会科学研究所地域研究センターのホームページ上で「アイヌ語鵜川方言日本語ーアイヌ語辞典」として公開されている。また、吉村氏からは直接鵜川方言についてご教示いただいた。浦河方言については浦河町在住の遠山サキ氏よりご教示いただいた。

本論文で用いた公刊テキストは大半が口承文芸の資料である。アイヌの口承文芸には大きく三つのジャンルがある。英雄叙事詩、神謡、散文説話である。英雄叙事詩と神謡は韻文であり、散文説話は散文で語られる。英雄叙事詩と神謡は、内容面でも異なるが、形式的な部分では神謡の方が「折り返し」と呼ばれる短い決まった言葉を挟みながら語られるという特徴がある。

公刊されたテキストのデータには限りがあるため、口承文芸資料から用例を収集する際に、ジャンルを限定することはしなかった。ただし、第八章「動詞結合価の揺れと自他同形動詞」において0項動詞にみられる結合価の揺れを扱う際には、音節数を整えるために行われる虚辞的な要素の挿入などの可能性を避けるために、ジャンルを散文説話に限定して用例を収集した²。

用例の表記はローマ字表記で母音はa,i,u,e,oの5文字、子音はp,t,k,m,n,s,c[tʃ],h,r,y,wの11文字を用いた。引用に当たり、表記は引用者が修正、統一した。また、日本語訳は出典を参考に引用者が付けたものである。ただし、用例ではなく、先行研究での言及として引用する際は先行研究で用いられている表記をそのまま引用した。

アイヌ語の音節構造はCVCまたはCVである。語頭のhあるいはyの脱落が起こったり、次のような音韻交替が起こる場合がある。このような箇所は、変化する部分の直後に「_(アンダーバー)」を置くことでそれを表示した。以下の音韻交替の説明部分のみ便宜上カタカナ表記を合わせて示す。

rt	→tt	例	or ta	オ _o タ	→or_ ta	オ _o ッタ	「～のところに」
rc	→tc	例	oar cinihi	オア _o ラ チニヒ	→oar_ cinihi	オア _o ッチニヒ	「片足」
rr	→nr	例	kikir rek	キキ _o リ レク	→kikir_ rek	キキ _o ンレク	「虫が鳴く」

² 韻文においては、虚辞的な要素と結合価の増減に関わる接頭辞との判別が難しいケースがある。

rn	→nn	例	utar ne	ウタラ ネ	→utar_ne	ウタンネ	「仲間である」
ns	→ys	例	pon saranip	ポン サラニプ°	→pon_saranip	ポイスアラニプ°	「小さい背負い袋」
nw	→nm	例	an wa	アン ワ	→an_w_a	アンマ	「(〜が)いて」
ny	→yy	例	pon yuk	ポン ユク	→pon_yuk	ポイクク	「小さなシカ」
mw	→mm	例	isam wa	イサム ワ	→isam_w_a	イサムマ	「(〜が)いなくなつて」

1.3. 本論文の構成

本論文では第二章「アイヌ語動詞の基本的構造と動詞結合価」において、アイヌ語動詞の基本的構造について概観し、結合価による動詞区分と、接頭辞、接尾辞の分類を示す。

第三章「アイヌ語の動詞基本形とその項の意味役割」において、基本形の一項動詞、二項動詞、三項動詞が、それぞれがどのような意味役割を項としてとるのかをみていき、それにより動詞を5つのタイプに分類する。

第四章「有対動詞」では、使役接尾辞と動詞形成接尾辞についての先行研究の記述を踏まえた上で、本論文で有対動詞として扱う範囲を定める。そして、沙流方言の有対動詞を形態的観点から分類し、鶴川方言、浦河方言のデータも参照しながら、沙流方言において自他同形型があることを指摘する。

第五章「項構造と語彙概念構造」では概念構造と項構造について影山(1993,1996,1999)を取り上げ、これまでの研究での記述を確認した上で、本論文で項構造を用いる理由を述べる。

第六章「一項動詞と対象目的語動詞の項構造」では、第三章及び第四章での言及に基づき、一項動詞と対象目的語動詞の項構造を示す。

第七章「三項動詞と空間目的語動詞の項構造」では、第三章及び第四章での言及に基づき、三項動詞と空間目的語動詞の項構造を示す。そして、空間目的語動詞は非対格動詞的な性質を持ち得ること、複数の項構造をとることを述べる。

第八章「動詞結合価の揺れと自他同形動詞」では、結合価に揺れがみられる動詞と自他同形動詞を取り上げる。そして、その揺れや項の意味役割の関係は使役交替、対象付加、空間付加の三種類に分けられることを指摘する。

第九章「所属形的接頭辞 e-/o-による派生」では、e-「〜の頭」、o-「〜の尻」という接頭辞に着目し、その所属先の名詞句の文法機能、意味役割は何であるのかを考える。そして e-/o-が接頭する動詞の意味的特徴を項構造によって示す。

第十章「結論」では、第二章から第九章まで述べたことを総括する。

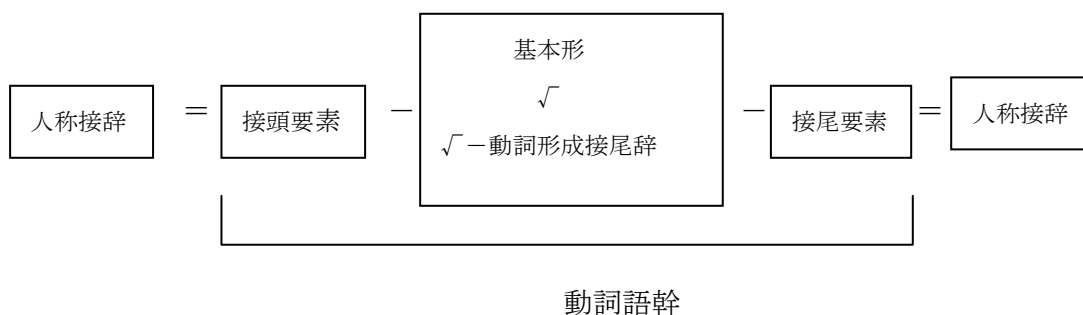
第二章 アイヌ語動詞の基本的構造と結合価

アイヌ語動詞の構造については先行研究の福田(1956)などで詳しく述べられている。本論文でも簡潔にアイヌ語動詞の構造について概観する。その上で結合価による動詞区分と接頭辞、接尾辞の分類を示す。

2.1. アイヌ語動詞の基本的構造

アイヌ語の動詞は基本的に以下の図 1 のような構造である³。本論文では名詞を一つとる動詞を一項動詞、二つとる動詞を二項動詞、三つとる動詞を三項動詞、一つもとらない動詞を 0 項動詞と呼ぶ。そして、接頭要素や接尾要素を接合させることなく一項動詞、二項動詞、三項動詞として機能するものをそれぞれの「基本形」と呼ぶ。例えば、*apkas*「歩く」は一項動詞の基本形である。*apkas-te*「～を歩かせる」は二項動詞であるが、一項動詞に接尾要素の使役接尾辞が接尾したものであるため、これは基本形とは呼ばない。基本形は語根そのものが基本形である場合と、語根に動詞形成接尾辞が接尾した形態になっているものがあり、この基本形からさらに様々な動詞が形成される。その際に基本形には複数の要素が接合する場合もある。アイヌ語動詞は基本形に接頭要素や接尾要素が接合し、さらにその外側に人称接辞が接合する形態になっている。

図 1. アイヌ語動詞の基本的な構造



アイヌ語では人称を人称接辞によって示し、これは省略することはできない。人称代名詞も存在し、動詞の前に人称代名詞と副助詞が置かれることもあるが、そのような場合でも必ず人称接辞は動詞に接合する。人称代名詞が用いられるのは主語をあえて強調するような場合であり、通常は人称接辞のみで表現する。三人称はゼロ接辞によって表わされるので、人称接辞が接合していない場合は三人称として解釈される。また、人称接辞は上の図のように接頭辞の場合はこれより前に他の接頭要素が接頭することはな

³図中の√は語根を示す。また、本論文では人称接辞は=で区切って示す。

く、接尾辞の場合はこれより後に他の接尾要素が接尾することはない。よってこの接頭辞あるいは接尾辞が接合している場合は、そこに一語としての境界があることが判断できる。また、一部の人称は一項動詞と二項動詞・三項動詞で異なる人称接辞を用いる。そのため、アイヌ語ではどの人称接辞がつくかによってその動詞が一項動詞であるか、二項動詞・三項動詞であるかをはっきりと区別することが出来る。例えば、一人称複数であれば、一項動詞 *inkar* 「見る」には *inkar=as* 「私たちが見る」のように、*=as* が接尾し、二項動詞 *nukar* 「～を見る」には *ci=nukar* 「私たちが～を見る」のように *ci=* が接頭する(表 1 参照)。

表 1. 沙流方言の人称接辞⁴

		主格人称接辞		目的格人称接辞
		一項動詞	二項動詞 三項動詞	
一人称	単数	ku=		en=
	複数	=as	ci=	un=
二人称	単数	e=		
	複数	eci=		
三人称				
四人称		=an	a=	i=

2.2. 結合価による動詞区分

本論文では結合価を動詞の構造を把握するための重大な手掛かりの一つとする。中川(1993)は「アイヌ語はいわゆる動詞価(valency)に関して、非常に透明度が高いという特徴を持っている。すなわち、各動詞の動詞価が意味論的ではなく、統語論的に明確に規定でき、人称接辞によって表層構造の上でそれが明示される。しかも、その動詞価とそれを埋める項との関係は、述部と名詞句との関係だけでなく、複合動詞の内部構造にも同じように適用できる。すなわち、文構造と動詞の内部構造とがまったく同じシステムで記述できるのである」(p. 163)としている。アイヌ語は名詞的要素と動詞的要素の関係性がはっきり捉えられることが多く、それぞれの動詞が名詞をいくつとるのは明確であることがほとんどである。

本論文では「自動詞」「他動詞」という用語を用いずに、動詞の結合価からみた区分である 0 項動詞、一項動詞、二項動詞、三項動詞という用語を用いる。この用語は中川(1995)などで用いられている用語である。

⁴ 四人称とは①不定人称②二人称敬称③包括的一人称複数④引用文中の一人称として使われる。

一項動詞、二項動詞、三項動詞は、自動詞、他動詞、複他動詞と近い語であるが、完全に等しいものではない。例えば、田村(1996)では自動詞、他動詞、複他動詞という用語を用いており、それぞれを次のように定義している(p. v)。

【自動】 自動詞

【他動】 単他動詞(目的語を一つだけとる他動詞)

【複他動】 複他動詞(目的語を二つとる他動詞)

この定義に従い、田村(1996)においては名詞句を一つのみとる動詞であっても、それが目的語に相当すると考えられれば、他動詞として扱われている。具体的にいえば、他動詞(本論文でいう二項動詞)に *ci-*が接頭したものは他動詞とされている。例えば、*ci-ranaranke* 「下りる」という語も他動詞として記述されている(p.62)。この語は *ci-rana-ranke* のような語構成になっている。*rana* は「下方へ」という副詞的要素であり、*ranke* は「～を下ろす」という他動詞(本論文でいう二項動詞)である。ここで注目すべきは *ci-*という接頭辞である。*ci-*は田村(1996)では主語の位置を埋めるものという位置づけになっていることが読み取れる。そのため、他動詞(本論文でいう二項動詞)に *ci-*が接頭したものは名詞を一つとる動詞であるが、*ci-*が主語の位置を埋めており、その名詞は目的語として位置付けられる要素となるので、他動詞として記述されている。このように名詞を一つとるものが、必ずしも自動詞としてはみなされず、他動詞として扱われていることもある。一項動詞、二項動詞、三項動詞という用語は、自動詞、他動詞、複他動詞と近い語であるが、完全に等しいものではないことがわかる。

本論文では結合価を動詞の構造を把握するための重大な手掛かりの一つとするので、動詞の結合価からみた区分である 0 項動詞、一項動詞、二項動詞、三項動詞という用語を用いることとした。

2.3.結合価からみた接頭辞の分類

接頭辞は結合価との関連からみれば、動詞の結合価を一つ増やすもの、動詞の結合価を一つ減らすもの、動詞の結合価を増減させないものの三種類に分けられる。本論文では、これらをそれぞれ「増価接頭辞」「減価接頭辞」「結合価を変更しない接頭辞」と呼ぶ。

2.3.1. 増価接頭辞

増価接頭辞には次の三つがある。

e- ~について / ~でもって / ~(場所)で
ko- ~に対して / ~とともに

o- ～(場所)に／ ～(場所)へ

これらが接頭することにより、動詞全体の結合価は一つ増える。例えば、ran 「～が下りる」という一項動詞に o- 「～(場所)に」という増価接頭辞が接頭すると、oran 「～が～(場所)に下りる」という意味の二項動詞になる。また、ranke 「～が～を降ろす」という二項動詞にこの接頭辞が接頭すると、oranke という形になり、「～が～(場所)に～を降ろす」という意味の三項動詞になる。

2.3.2. 減価接頭辞

減価接頭辞には次のようなものがある。

yay-	自分
i-	もの
u-	互い
ci-	自ら
si-	自分
he-	頭
ho-	尻

これらが接頭することにより、動詞全体の結合価は一つ減る。例えば、kiru 「～を向ける」という二項動詞に he- 「頭」という接頭辞が接頭すると、hekiru 「(自分の) 頭を向ける、振り向く」という一項動詞になる。また、名詞の概念形もこれに相当する。koyki 「～を捕る」という二項動詞に名詞 cep 「魚」が接頭要素となると、cepkoyki 「魚を捕る」という一項動詞になる。このようにこれらは動詞に接頭すると、動詞のとり得る名詞句の数を一つ減らす働きをする。

2.3.3. 結合価を変更しない接頭辞

結合価を変更しない接頭辞は二種類に分けられる。所属形的接頭辞と副詞的接頭辞である。

2.3.3.1. 所属形的接頭辞

所属形的接頭辞は次の二つである。

e-	～の頭
o-	～の尻

これらは動詞に接頭すると動詞が必要とする名詞部分を一つ埋めるが、それと同時にそれ自身の所属先を必要とするものである。そのため、これらが接頭しても、動詞全体の結合価は増減しない。例えば、ca「～を切り取る」という動詞は二項動詞であるが、「～の頭」という意味の接頭辞 e- が接頭すると、eca という形になり、「～の頭を切り取る」という意味になる。基本形 ca が必要とする二つの名詞句のうち一つは接頭辞 e- によって埋められるが、e- 自体の所属先が必要となるため、e- が接頭しても動詞は二項動詞である。このようにこのタイプの接頭辞は接頭しても動詞全体の結合価を増減させることがない。

この接頭辞は名詞の所属形と並行的に捉えることが出来る。例えば、kewe「～の背」という名詞の所属形が、一項動詞 ri「高い」に抱合されると、kewe-ri「～の背が高い」となり、kewe は一項動詞 ri の項を埋めるが、kewe 自体の所属先が必要なため、動詞全体の結合価は変化しない。この点が e-/o- と名詞の所属形は同様であるため、e-/o- を本論文では「所属形的接頭辞」と呼ぶ。

この所属形的接頭辞については第九章で詳しく述べる。

2.3.3.2. 副詞的接頭辞

副詞的接頭辞には次のようなものがある。以下に挙げるのは一例である。

toyko-	激しく
wen-	ひどく、激しく
sirko-	激しく
toy-	激しく、ひどく
ray-	ひどく、激しく
ru-	やや
sir-	あたり

これらは動詞に接頭し、副詞的な意味を添える役割をするため、動詞の結合価は変化しない。例えば、二項動詞 kik「～を叩く」に toyko-「激しく」が接頭すると、toyko-kik「～を激しく叩く」となり、副詞的な意味が加わるが、動詞全体の結合価に変化はない。

sir- はこれまで減価接頭辞と同様に働くものと考えられてきたが、本論文ではその他に副詞的接頭辞として働くこともあることを指摘する。詳しくは第八章で述べる。

2.4. 結合価からみた接尾辞の分類

本節では、図 1 の接尾要素に入る接尾辞を取り上げる⁵。接尾辞は結合価との関連からみれば、動詞の結合価を一つ増やすもの、動詞の結合価を一つ減らすもの、動詞の結

⁵ 基本形を形成する動詞形成接尾辞については第四章で触れる。

合価を増減させないものの三種類に分けられる。本論文では、これらをそれぞれ「増価接尾辞」「減価接尾辞」「結合価を変更しない接尾辞」と呼ぶ。

2.4.1.増価接尾辞

増価接尾辞として働くのは次のようなものがある。

-re/-te/-e 使役
-ka 使役

-re は母音または/y/で終わる語幹に接尾する。-te は/y/, /r/以外の子音で終わる語幹に接尾する。-e は/r/で終わる語幹に接尾する。これらは異形態であるので、本論文では -re/-te/-e をまとめて-RE と表示する。

福田(1956)は-RE について「意味上差支えない限り、あらゆる動詞に接合して、その使役形を作ることができる」(p. 478)と指摘している。また、-ka が接尾するものは-RE と比較すると限定されるなどの違いがあるが、これらについては第四章で詳しく述べる。

2.4.2.減価接尾辞

減価接尾辞はほとんど確認できない。ただし、例外的に nuynak 「隠れる」に現れる -k という接尾辞はそれに該当するとみられる。nuynak には対応しているとみられる二項動詞 nuyna 「～を隠す」があるため、-k を次のように減価接尾辞として分析できる可能性がある。しかし、これ以外の例が確認できないため、本論文ではここで挙げるにとどめておく⁶。

nuyna	～を隠す	nuyna-k	隠れる
+2		+2	-1

2.4.3.結合価を変更しない接尾辞

結合価を変更しない接尾辞には次のようなものがある。以下に挙げるのは一例である。

-yar/-ar 不定使役

これは不定の人間に対する使役を表わし、接尾することによって「～させる」という意味を加えるが、動詞全体の結合価は変化しない。例えば、二項動詞 e 「～を食べる」に-yar が接尾すると、e-yar 「～を食べさせる」となり、「～に」の部分は表わされない

⁶ 奥田(2011)においても、nuyna と nuynak について触れており、「他動詞 nuyna に k が接尾して自動詞 nuynak が派生しているように見える。しかしこの語一例のみか。静内方言では自動詞「隠れる」が再帰(後述)のついた「si-nuynak」になるなど、不安定なカテゴリー。」としている(p.36)。

ので、結合価は変化せず、二項動詞のままである。

また、この位置には助動詞が入ることもある。例えば、ipe「食事する」に rusuy「～したい」という助動詞が接尾要素となり、iperusuy「食事したい、空腹である」のようになるが、結合価は変化しない。

第三章 アイヌ語の動詞基本形とその項の意味役割

アイヌ語の動詞は、基本形においては一項動詞、二項動詞、三項動詞がある。本章では、それぞれがどのような意味役割を項としてとるのかをみていく。

3.1. 一項動詞

一項動詞は項となる名詞句を一つとる動詞である。その項の意味役割は大きく分けて、動作主、対象または空間・場所の三種類がある。項となる名詞の文法機能は主語である。文法機能と意味役割の関係を表わすと、一項動詞は次の三種類である。

主語：動作主

主語：対象

主語：空間・場所

3.1.1. 動作主主語

動作主を主語としてとる一項動詞がある。例えば、**apkas**「歩く」、**yapkir**「投げる」、**suke**「料理する」、**rewsi**「泊まる」などがある。これらの動詞が表す事態は、主語の意志性が高く作用する動作であり、そのことから主語となる名詞は必然的に有生物であることが多い。

3.1.2. 対象主語

対象を主語としてとる動詞がある。例えば、**makke**「開く」、**tuy**「切れる」、**satke**「乾く」、**turse**「落ちる」などがある。これらの動詞が表す事態は、状態あるいは状態変化であり、主語の意志とは無関係に起こる出来事である。このことから、主語となる名詞は無生物であることが多い。

3.1.3. 空間主語

空間・場所を主語とする動詞がある。例えば、**peker**「明るい」、**hutne**「狭い」、**sep**「広い」などがある。

アイヌ語には名詞が文法的に「場所」であるか否かの区別があることが知られている。中川(1984)では名詞句が次のような「場所表現」に用いられる場合に、その名詞句は文法的な場所として扱われているとしている。それは、1. 場所目的語動詞の目的語となる場合、2. 場所格助詞 **ta**«に、で» **un**«へ» **peka**«で、を» **wa**«から»が後置する場合、3. 助詞 **ta,un,peka** と交替し得る動詞接頭辞 **e-**の目的語となる場合、4. 助詞 **un** が後置し、「～の(場所に属する)～」という構文を作る場合、以上の4つである(pp.

150-151)。

上の 1 で言及されている「場所目的語動詞」とは、中川・中本(2007)では「〈場所〉を表す名詞を目的語としてとる動詞を場所目的語動詞と言います」(p. 69)として説明している。具体的には次の 5 つを挙げている。

- oma ～ 〈場所〉にある, 入っている【他】
- osma ～ 〈場所〉に突っ込む【他】
- kus ～ 〈場所〉を通る【他】
- omare ～を～ 〈場所〉に入れる【複他】
- o ～を～ 〈場所〉に入れる【複他】

また、中川(1984)では「場所表現」において、各々の名詞はその種類、意味、形態によって異なった扱いを受ける。それは次の二つの傾向にまとめられる」として、次の二つの傾向を挙げている(pp. 151-152)。

傾向 1:

1. 位置名詞は常に「場所」として扱われる。
2. 固有名詞(地名)、mosir«国、土地」、kotan«村」、to«日」などの一部の普通名詞(概念形)は「場所」として扱われることも、扱われないこともある。
3. その他の普通名詞(概念形)は一般に「場所として扱われない」

傾向 2:

所属形の名詞は、原則的に or を後置させずそのままの形で「場所」として扱われる。

以上のように、アイヌ語には名詞が文法的に「場所」であるか否かの区別があるが、本論文でいう空間・場所とは文法的な場所に限定せず、文法的場所を含む広い意味での空間・場所を指す。具体的に言えば、cise「家」、cip「舟」、su「鍋」などは普通名詞であり、文法的に「場所」であるとは言えない。しかし、本論文ではこうしたものも空間・場所として扱う。

空間・場所を主語とする動詞が表す事態は、状態あるいは状態変化であり、主語の意志とは無関係に起こる出来事である。このことから、主語となる名詞は無生物である傾向がある。

3.1.4. 複数の意味役割をとる一項動詞

一つの動詞が複数の意味役割を項としてとることが可能な場合もある。一項動詞には、

動作主あるいは対象をとる動詞、対象あるいは空間・場所をとる動詞がある。

3.1.4.1.動作主と対象をとる動詞

動作主と対象どちらをとることも可能な一項動詞がある。例えば、**as**「立つ」がそれにあたる。

主語：動作主の例

- (1) oro ta **as**=an w_a
そこ に 立つ=4.S して
そこに私は立って

[国立大学法人千葉大学 2015 c:1935]

主語：対象の例

- (2) ruwe ranko cikuni **as** ruwe
太い カツラ 木 立つ 様子
太い桂の木が立っている様子

[国立大学法人千葉大学 2015 a:108]

柳下(1989)では **rikin**「のぼる」**ran**「くだる」**san**「くだる」**ahun**「はいる」**hetuku**「でる」は、主語に生物/無生物がくると記述している。この「生物/無生物がくる」という記述と動作主、対象のどちらもとることができるということは大きく関連している。

本論文では一項動詞の動作主と対象を区別する基準として、動詞が表す事態に主語の意志性が関わっているかどうかという点を重視する。動作主と対象のどちらもとることが可能な動詞の場合、その主語が動作主であるのか、対象であるのかの判定が困難な場合もある。例えば、(1)の例では、主語「私」は意志を持って動作を行う動作主であるとする解釈に問題はほぼないと考えられるが、(2)の主語 **cikuni**「木」は判断が難しい。それは文法的な面で解釈が困難であるというよりも、物語の解釈上の問題である。アイヌの物語中においては、植物や無生物が意志を持っていると考えられる描写も多数出てくるため、主語が植物や無生物だからと言って必ずしも意志性が低いとは言い切れない。

以上のような問題はあがあるが、**apkas**「歩く」のように動作主しか主語になりえない動詞、**tuy**「切れる」のように対象しか主語になりえない動詞がある一方で、**as**「立つ」のような中間的なものも存在するということと言える。この点は第六章で詳しく述べる。

3.1.4.2.対象と空間・場所をとる動詞

対象と空間・場所のどちらをとることも可能な一項動詞がある。例えば、**maknatara**「明るい」がそれにあたる。

主語：対象の例

(3) ape nipek maknatara

火 光 明るい
火の光が明るい。

[国立大学法人千葉大学 2015 c:1887]

主語：空間・場所の例

(4) casi upsor maknatara

館 ~の内部 明るい
館の中が明るい。

[金田一 1931:471]

(3)(4)はどちらも maknatara「明るい」という動詞の例であるが、(3)は ape nipek「火の光」という対象が項であるのに対して、(4)は casi upsor「館の内部」という空間・場所が項となっている。この upsor「~の内部」という語は位置名詞であり、文法的にも場所を表わすものである。

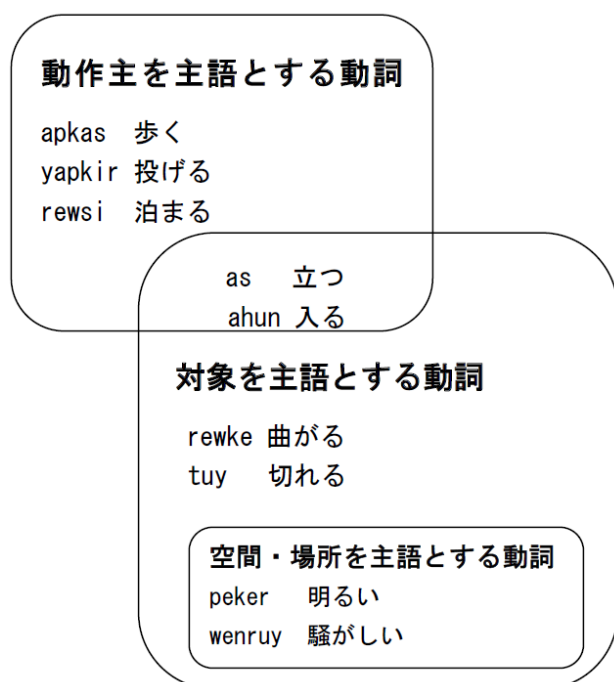
3.1.5. 一項動詞の分類

これまでみてきたように、一項動詞には大きく分けて動作主を主語とする動詞、対象を主語とする動詞、空間・場所を主語とする動詞の三種類がある。ただし、この三種類はそれぞれ別個のものとしてはっきりと区別できるものではなく、一部では重なり合っている。

具体的には、3.1.4.でみたように動作主を主語とする動詞と、対象を主語とする動詞は一部が重なり合っている。また、空間・場所を主語とする動詞は対象を主語とする動詞と重なることがわかっている(図 2 参照)。空間・場所を主語とする動詞の中に、空間・場所のみを主語とする動詞、つまり、対象を主語とすることがない動詞があるのかは今のところ明確にすることが出来ていない。

ただし、sik「~がいっぱいでる」は空間・場所のみを主語とする動詞である可能性がある。例えば、「~がいっぱいである、~が満ちる」という動詞の場合、日本語では「水がいっぱいである、水が満ちる」のように、対象をとることもある一方で、「鍋がいっぱいである、鍋が満ちる」のように、空間・場所をとることもある。このことから「~がいっぱいである、~が満ちる」という日本語の動詞は対象も空間・場所も主語とする動詞であると考えることができる。一方、アイヌ語の sik は、cise「家」、su「鍋」、cip「舟」、sikihi「~の目」、honi「~の腹」などの空間・場所を主語としてとる例が確認でき、対象をとる例は筆者は確認できておらず、空間・場所のみを主語とする動詞である可能性がある。

図 2. 一項動詞の分類



sik のような例はあるものの、空間・場所を主語とする動詞の中に、対象を主語とすることがない動詞が確実にあるのかは今のところ明確にすることが出来ておらず、対象を主語とする動詞のなかに空間・場所を主語とする動詞が完全に内包されている可能性がある。そのため、本論文では図 2 のように示しておく。

本論文では対象を主語とする動詞と空間・場所を主語とする動詞全体を指して「対象空間主語動詞」と呼ぶことにする。そして、対象空間主語動詞の下位区分として、対象を主語とする場合と、空間・場所を主語とする場合があることを指摘しておく。また、動作主を主語とする動詞を「動作主主語動詞」と呼ぶ。

一項動詞は動作主主語動詞と対象空間主語動詞の大きく分けて二種類があることになるが、これは非能格自動詞、非対格自動詞の区分と一致する。この点は第六章で詳しく言及する。

3.2.二項動詞

二項動詞は項となる名詞句を二つとる動詞である。その項の意味役割は大きく分けて、一項動詞同様、動作主、対象、空間・場所の三種類である。

そして、文法機能と意味役割の関係からすると、二項動詞は次の三種類が確認される。

主語：動作主 目的語：対象
主語：動作主 目的語：空間・場所
主語：対象 目的語：空間・場所

3.2.1.動作主主語・対象目的語

動作主を主語とし、対象を目的語とする動詞がある。例えば、**tuye**「～を切る」のようなものがこれに相当する。これは主語(動作主)の物理的働きかけにより目的語(対象)の状態が変化する事態を表すが、このほかに物理的な働きかけを含意しないもの、たとえば **ye**「～に/～を言う」、**nu**「～を聞く」、**nukar**「～を見る」のような知覚に関係する動詞もこれに含まれる。

動作主を主語とし、対象を目的語とする動詞は以上のようなことからさらに細かく分類することが可能ではあるが、本論文はそれを指摘するにとどめておく。本論文の分析対象となるのはこの中で物理的な働きかけを示すものである。

3.2.2.動作主主語・空間目的語

動作主を主語とし、空間・場所を目的語とする動詞がある。例えば、**kus**「～を通る」などがこれに相当する。中川・中本(2007)の「場所目的語動詞」もこれに含まれるものがある。

3.2.3.対象主語・空間目的語

対象を主語とし、空間・場所を目的語とする動詞がある。例えば、**oma**「～にある」などがこれに相当する。中川・中本(2007)の「場所目的語動詞」もこれに含まれるものがある。

3.2.4.複数の意味役割をとる二項動詞

一項動詞同様に、一つの二項動詞が複数の意味役割を主語の項として、あるいは目的語の項としてとる場合もある。

3.2.4.1.主語が動作主あるいは対象で空間・場所を目的語とする動詞

空間・場所を目的語とする動詞で、主語がある場合には動作主であったり、また、ある場合には対象であったりするものが確認される。

切替(1988)では **otke**「～を突く、～に刺さる」を例に挙げ、「自動か他動かの揺れは見られないものの、(中略)ときによって取りうる名詞項の性格がかなり変わる動詞語根が存在する」と指摘している(p. 16)。切替(1988)で挙げられている **otke** の胆振方言の例を以下に挙げる。

主語：動作主、目的語：空間・場所の例

(5)oyakake nit ari otkeotke

あちこち 棒 ～で ～をつつく(重複)

(パナンペは)あちこち棒でつついたり

[知里 1937(1973):46]

上記の例の主語であるパナンペとは散文説話の登場人物名であり、意志性のあるものであると考えることができる。空間・場所である目的語は oyakake であり、nit「棒」は、具格の ari で表されている。

主語：対象、目的語：空間・場所の例

(6)otompuye top otke

～の肛門 竹 ～に突き刺さる

肛門に竹が突刺さって

[知里 1937(1973):20]

一方、上記の例では主語は top「竹」であり、意志性があるとは判断しにくい。よって、この主語は対象であると解釈する。また、目的語は otompuye「肛門」であり、空間・場所として機能している。

3.2.4.2 三通りの項の組み合わせをとる動詞

二項動詞は文法機能と意味役割の関係からすると、第一に主語が動作主、目的語が対象、第二に主語が動作主、目的語が空間・場所、第三に主語が対象、目的語が空間・場所の三種類があることを述べたが、一つの動詞がこの全てに当てはまる場合も確認できる。例えば、us という動詞である。

主語：動作主、目的語：対象の例

(7) tapan cori e=us wa

この 草履 2.S=～をつける して

この草履をあなたが履いて

[国立大学法人千葉大学 2015 b: 1308]

主語：動作主、目的語：空間・場所の例

(8) e=sermaka a=us kus ne na.

2.S=～の背後 4S=～につく ～するつもり ～である よ

あなたを私は守りますよ。

[国立大学法人千葉大学 2015 a: 367]

主語：対象、目的語：空間・場所の例

(9) a=kotanu kem us hine

4.S=～の村 飢饉 ～につく して

私の村は飢饉になって

[田村 1985 : 10]

まず、(8)(9)に着目すると、(8)は主語の「私」が意志を持っており、目的語の e=sermaka 「あなたの背後」は空間・場所として機能していると考えられる。(9)では主語である kem 「飢饉」は意志性を持っているとは考えにくいので、対象であると捉える事が出来る。また、目的語の a=kotanu 「私の村」は空間・場所として機能している。このように(8)(9)は目的語がどちらも空間・場所の意味役割である例である。

一方、(7)では空間・場所が表れず、動作主と対象が表れている。意志性を持った動作主「あなた」が主語となり、対象である cori 「草履」が目的語となっている。(8)(9)同様に二項動詞ではあるが、(8)(9)の基本的な意味は「～が～につく」であるのに対し、(7)は「～が～をつける」であり、使役的な意味が含まれる。また、統語上には空間・場所にあたる意味役割のものは現れていないが、「～が～を履く」という意味になっており、「～が自分の体に～をつける」というように再帰的な意味を含意している。

us の項の文法機能と意味役割は、以上の三通りが見られるが、それをまとめると表 2 のようになる。

表 2.二項動詞 us の項の文法機能と意味役割

主語	目的語	us
動作主	対象	～が～をつける(履く)
動作主	空間・場所	～が～につく
対象	空間・場所	～が～につく(生える)

3.2.5. 二項動詞の分類

これまでみてきたように、二項動詞は動作主を主語とし、対象を目的語とする動詞、動作主を主語とし、空間・場所を目的語とする動詞、対象を主語とし、空間・場所を目

的語とする動詞の三種類がある。ただし、この三種類はそれぞれ別個のものとしてはつきりと区別できるものではなく、一部では重なり合っている。

動作主を主語とし、対象を目的語とする動詞を本論文では「対象目的語動詞」と呼ぶ。

空間・場所を目的語とする動詞は、主語が動作主または対象のどちらかである。これを一括して「空間目的語動詞」と呼び、この下位区分として、動作主主語とする場合と、対象を主語とする場合があることを指摘しておく。

3.3.三項動詞

三項動詞は名詞句を三つとる動詞である。その項の意味役割は動作主、対象、空間・場所である。

そして、文法機能と意味役割の関係は以下ようになる。

主語：動作主 目的語 1：対象 目的語 2：空間・場所

例えば、usi「～が～に～をつける」、o「～が～に～を入れる」などがある。

3.4.小括

本章では一項動詞、二項動詞、三項動詞がどのような意味役割を項としてとるのかについて以下の①～⑤のようなタイプがあることを述べた。

一項動詞

- ① 動作主主語動詞 主語：動作主
- ② 対象空間主語動詞 主語：対象または空間・場所
 - A. 対象が主語 主語：対象
 - B. 空間が主語 主語：空間・場所

二項動詞

- ③ 対象目的語動詞 主語：動作主 目的語：対象
- ④ 空間目的語動詞 主語：動作主または対象 目的語：空間・場所
 - A. 動作主が主語 主語：動作主 目的語：空間・場所
 - B. 対象が主語 主語：対象 目的語：空間・場所

三項動詞

- ⑤ 主語：動作主 目的語 1：対象 目的語 2：空間・場所

第四章 有対動詞

本章では先行研究での使役接尾辞と動詞形成接尾辞に関する記述を踏まえ、本論文で有対動詞とみなす範囲を定めた上で形態的な観点から沙流方言の有対動詞の分類を行う。その際に鶴川方言、浦河方言のデータも参照しながら、沙流方言においても自他同形型があることを指摘する⁷。

4.1. 有対動詞とは

日本語の動詞について扱った早津(1989)では「日本語の他動詞は、対応する自動詞があるか否かという点で二つの類に分けられる」とし、「倒す」や「曲げる」のように、対応する自動詞(「倒れる」や「曲がる」)のあるものを「有対他動詞」、「たたく」や「読む」のように、対応する自動詞のないものを「無対他動詞」と呼んでいる(p. 231)。他動詞と自動詞の対応については「本稿では他動詞と自動詞の間に形態的・意味的・統語的な対応が成り立つ場合にのみ、その他動詞と自動詞とが対応するとみなす。(引用者中略)「統語的な対応」とは次のような関係すなわち、他動詞文の目的語が、(形態的・意味的に)対応する自動詞による)自動詞文の主語である関係をいう」(p. 231)としている。

早津(1989)では「有対他動詞」という語が用いられているが、アイヌ語では形態的・意味的・統語的な対応は一項動詞と二項動詞のみならず、数は少ないが二項動詞と三項動詞の間にも成り立つので、本論文では形態的・意味的・統語的な対応があるペアを持つ動詞を「有対動詞」と呼ぶ。

4.2. 使役接尾辞と動詞形成接尾辞

有対動詞は形態的・意味的・統語的な対応があるペアを持つと定義したが、二項動詞文の目的語が(形態的・意味的に)対応する一項動詞による)一項動詞文の主語であるという統語的な対応という点からすると、一項動詞に使役接尾辞が接尾したものと同じ振る舞いをする。しかし、一項動詞に使役接尾辞が接尾した形態の二項動詞を自他対応のあるものとして考えると、ほぼ全て動詞が有対動詞であるという結論になってしまう。そのため、使役接尾辞が接尾したものは除外する。本論文でどのようなものを使役接尾辞とみなすかを本節では検討する。

まず、先行研究での記述をみていく。アイヌ語の他動詞形成接尾辞について触れた先行研究としては金田一(1960)⁸、金田一・知里(1936)、知里(1942)、福田(1956)田村(1988)

⁷ 本章の内容の一部は小林(2014)をもとにしている。

⁸ 金田一(1960)「アイヌ語学講義」は1931年刊行『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』に収録された「アイヌ

などがある。

4.2.1. 金田一(1960)

金田一(1960)は「他動詞の語尾」としていくつかの接尾辞を挙げている。以下にその部分を引用する。

§ 252. 自動詞もしくは形容詞へ語尾を付けて他動にするのに次のような方法が見出される。

ke,これは恐らく ki「する」と関係ある形であろう。

rai「死ぬ」 raike「殺す」

ran「下る」 ranke「おろす」

san「(前へ)出る」 sanke「(前へ)出す」

yan「あがる」 yanke「あげる」

ahun「入る」 ahunke「入れる」

ashin「(あらわれ)出る」 ashinke「(あらわし)出す」

sat「乾いている」 satke「乾かす」

§ 253. -re,-te,これは他動に附くと使役になるが自動に附くと他動になる。

hosipi「帰る」 hosipire「帰す(帰らす意味からか)」

arpa「行く」 arpare「やる、送る」

§ 254. -ka,これは恐らく kar「造る」であろう。

isam「無い」 isamka「無くす」

ush「(火が)消える」 ushka「消す」

ushtek「ふと消える」 ushtekka「ふと消す」

rarak「すべすべする」 rarakka「滑らかにする」

以上はあり得べき方法で、原義もほぼ解るのであるが、極めて多く用いられる常の語に、不規則的に残っている特殊の方法がある。次に述べようとするのがそれである。

§ 255. -i,-u,-e を付ける特殊な方法が、日常多く用いる語の上にあるのは、注意に値する：－

i-を付けるもの

ush「ついている、生えている」 ushi「つける、生やす」

ash「立つ」(pl.roshki) ashi「立てる」(pl.roshki)

u-を付けるもの

un「はまっている、はさまっている」 unu「はめる、はめている」

tesh⁹「反る」 teshu「反らす」

語法摘要」を改訂増補したものであり、他の先行研究に先立つものである。

⁹ tesh で自動詞形のように書かれているが、筆者はこの形での自動詞はこの記述以外では未確認である。

e-を付けるもの

tuy 「切れる」 -tuye 「切る」 pl.共に tuipa
suy¹⁰ 「揺れる」 -suye 「揺る」 ,pl.共に suipa
kai 「折れる」 -kaye 「折る」 pl.共に kaipa
rai 「死ぬ」 -raye 「ころす」 pl.共に raipa
ekot 「死ぬ」 -ekot-e 「殺す」 pl.共に ekotpa
kot 「結付いている」 -kote 「結びつける」 pl.共に kotpa

[金田一 1960 : 303-305]

また、これとは別に「使役動詞の語尾形」として以下を挙げている。

§ 217. 使役相は語尾で表わされる。そして複数形をも有している。使役される人の複数であらわす形である。故に使役動詞の活用に至っては目的語は二つあり、敬語が従って二重に用いられたりするに至っては、文法は微に入り、細に入るのである。普通の使役相の語尾は：－

1. 母音に終る語幹には-re.
2. 子音に終る語幹には-te.

§ 218. -re を用いるもの：－

ne 「なる、である」 nere 「ならしむ、であらしむ」
kore 「与える」 korere 「与えしむ」
ki 「する」 kire 「せしむ」
arpa 「行く」 arpare 「行かしむ」
paye 「行く」 payere 「行かしむ」(複)
nu 「聞く」 nure 「聞かす」
nupa 「(沢山)聞く」 nupare 「(沢山)聞かす」
hopuni 「起つ」 hopunire 「起たす」
shitoma 「恐れる」 shitomare 「恐れしめる」
ta 「汲む」 tare 「汲ます」
tere 「待つ」 terere 「待たす」

§ 219. te を用いるもの：－

oman 「行く」 omante 「行かす」
riwak 「帰る」 riwakte 「帰らす」
ek 「来る」 ekte 「来さす」「よこす」
yap 「のぼる」 yapte 「のぼらす」

通常確認できる自動詞形は teske となる。

¹⁰ suy で自動詞形のように書かれているが、筆者はこの形の自動詞形の用例は未確認である。

sap 「くだる、出る」 sapte 「くだらず、出す」

kush 「通る」 kushte 「通らず」

pash 「駆ける」 pashte 「駆けらす」

chish 「泣く」 chishte 「泣かしむ」

§ 220. e-だけを附するもの：－

nukar 「見る」 nukare 「見しむ、見せる」

inkar 「物を見る」 inkare 「物を見せる」

kar 「作る」 kare 「作らす」

kor 「持つ、所有す」 kore 「所有させる、与える」

apekur 「火にあたる」 apekure 「火にあたらせる」

[引用者注：§ 221 用例は略]

§ 222. 使役相語尾の複数形は-yar を語幹の末に結合す。尤も子音で終る語幹には、往々 y 音が吸収されて単に-ar を結合したような形になる。

hopumpa 人々起つ、 hopumpayar 人々を起たしめる。

shitoma 恐れる、 shitomayar 人々を恐れしめる。

paye 行く、 payeyar 人々を行かしめる。

nukarpa 人々を見る、 nukarpayar 人々に見さす。

ampa 手にもつ、 ampayar 手に持たす。

nukar 見る、 nukarar 人々に見さす。

ani 手にもつ、 aniyar 手に持たす。

kor 所有す、 korar 所有さす。

nuina 隠す、 nuinayar 隠さす。

nuinak 隠る、 nuinakar 隠れさす。

shikopa 自分をまちがえる、 shikopayar 自分をまちがえしむ。

[金田一 1960 : 285-287]

金田一は他動詞形成接尾辞を四種類挙げ、それとは別に使役接尾辞を挙げている。金田一の記述を簡潔にまとめると以下のようなになる。

他動詞形成接尾辞

(1)-ke (金田一 1960 : § 252)

(2)-ka (金田一 1960 : § 254)

(3)母音 -i、-u、-e (金田一 1960 : § 255)

(4)-re、-te (金田一 1960 : § 253)

使役接尾辞(金田一の用語では「使役動詞の語尾形」)

(5) -re (金田一 1960 : § 218)

(6) -te (金田一 1960 : § 219)

(7) -e (金田一 1960 : § 220)

その他(金田一の用語では「使役相語尾の複数形」)

(8) -yar, -ar (金田一 1960 : § 222)

他動詞形成接尾辞については自動詞¹¹(金田一の用語では「自動詞もしくは形容詞」)を他動詞化するものが挙げられており、(4)の「-re、-te」については「これは他動に附くと使役になるが自動に附くと他動になる」(p. 304)と説明していることから使役接尾辞である(5)-re(6)-te と同一のものであると見なしてよいだろう。

4.2.2. 金田一・知里(1936)

金田一・知里(1936)では、金田一(1960)で挙げられていた-ke、-ka、-re、-te について「他動詞語尾」として取り扱い、その点は変わりはない(pp. 106-107)。しかし、他動詞形成接尾辞である母音についての記述は異なっている。金田一(1960)ではこれに相当するものとして示されていたのは-i、-u、-eのみであった。しかし、この中では-a、-i、-u、-e、-o という全ての母音がその機能を持つものとして挙げられている(p. 107 § 185)。そして、これについては以下のような記述がある。

他動詞の語幹(stem)は大抵 語根(root)+形態素(formant) の形式に於いて成立してゐる。この形態素が母音(全く独立性を有せず)の時には、それを落として-pa を添へる：

〔他動詞語幹〕		〔自動詞語幹〕	〔目的物複数〕
kaye 折る	[kai+e]	kai 折れる	kai-pa
kiru 転ずる	[kir+u]		kir-pa
komo 折曲げる	[kom+o]	kom-ke 曲がる	kom-pa
kote 結びつける	[kot+e]	kot 附く	kot-pa
suve 振る	[sui+e]	(sui 回)	suipa

[筆者注：以下 他 42 例 中略]

[金田一・知里 1936 : 71-73 § 121(1)]

¹¹ 金田一の用語で形容詞とされるもの、例えば、poro 「大きい」という状態を表す動詞はこのままの形で「大きくなる」という状態変化の意味にも使われる。自動詞とされる例 komke 「曲がる」もこのままで「曲がっている」というの意味にも用いられる。つまり、状態、状態変化の両方の意味を含んでおり、区別する必要がないと考えられ、両方を自動詞(本稿の一項動詞)の範疇に含める。

金田一(1960)は自動詞を他動詞化するものとして他動詞形成接尾辞を扱っていた。しかし、ここで挙げられている例からは母音の他動詞形成接尾辞は自動詞を他動詞化する以外の働きをすることが窺える。例えば、三つ目に挙げられている例 **komo** は語根である **kom** に他動詞形成接尾辞が接尾したものである。**kom** は単独では自動詞としては機能しない¹²。また、二つ目の例 **kiru** は **kir** という語根に他動詞形成接尾辞が接尾したものであり、この語根は単独では自動詞としては機能せず、同語根から派生した自動詞は確認できない。このように他動詞形成接尾辞の母音は自動詞を他動詞化するのみならず、語根から他動詞を派生するものであることがこの記述からはわかる。

「他動詞語尾」の他に「使役相語尾」として使役接尾辞についても扱っているが、これは金田一(1960)と基本的に変わらないものである。

4.2.3. 知里(1942)

知里(1942)は「他動相及び使役相の接尾辞」として他動詞形成接尾辞と使役接尾辞について言及している(pp. 512-513)。この中では金田一・知里(1936)において他動詞形成接尾辞として挙げた母音について分類し、より詳しく述べられている。また、**-ke** についてもこれ以前の研究より詳しい分析になっている。以下にその部分を引用する。

(1) 語根から他動詞を造る母音の接尾辞 (**-a**, **-i**, **-u**, **-e**, **-o**)。アイヌ語の語根には「子音+母音」の如き構造のものと、「子音+母音+子音」の如き構造のものがある。後者、すなわち三音閉音節型の語根は、母音の接尾辞を附して他動詞化するのが原則である。

(イ) 語根に接尾辞**-ke**を附して自動詞を造り、母音の接尾辞を附して他動詞を造るもの。

mak-ke 開く ; **mak-a** 開ける。 **car-ke** ちらばる ; **car-i** ちらかす。 **mes-ke** もげる ; **mes-u** もぐ。 **kom-ke** まがる ; **kom-o** まげる。

(ロ) 語根にゼロ接尾辞を附して自動詞を造り、母音の接尾辞を附して他動詞を造るもの。

jak つぶれる ; **jak-u** つぶす。 **kaj** 折る ; **kaj-e** 折れる¹³。 **mos** 目がさめる ; **mos-o**¹⁴ さます。

(ハ) 次のものは語根の頭子音がゼロの場合と考へることができる。

an ある ; **an-u** おく。 **as** 立つ ; **as-i** 立てる。 **un**(*sing*), **us**(*pl.*) はまってる ; **un-u**, **us-i** はめる。

(2)-**ke**。第1種第3類の完用詞 (§ 35、§ 38) [筆者注 : 「尾子音の交替によって単・複の区別を示すもの」] は、単数形には**-ke**を附し、複数形には**-te**を附して他動詞をつく

¹² ただし、同語根から派生した **komke** という自動詞はある。

¹³ 筆者は **kay** 「折れる」、**kaye** 「折る」の用例しか確認できていない。誤植の可能性がある。

¹⁴ **moso** の形では筆者は用例で確認できていない。重複形 **mos-os-o** の形で確認できる。

る。

アフン、アフア はいる : アフン・ケ、アフア・テ 入れる。アシン、アシ
ア である ; アシン・ケ、アシア・テ だす。リキン、リキア あがる ; リキン・ケ、リ
キア・テ あげる。ラン、ラア さがる ; ラン・ケ、ラア・テ さげる。

(3)-ka。これは完用詞(完全自動詞)に附いて使役相又は他動相の用詞を造る。

フレ 赤い ; フレ・カ 赤らしめる、赤くする。レタラ 白い ; レタラ・カ
白からしめる、白くする。ホシピ もどる ; ホシピ・カ もどらせる、もどす。

[知里 1942 : 512]

このように知里(1942)は他動詞形成接尾辞の母音は自動詞を他動詞化するという機能
より、むしろ語根から他動詞を形成するものであるとしている。また、-ke については
「尾子音の交替によって単・複の区別を示すもの」であり、複数形は-te が用いられる
という見方を示している。-ka に関しては使役または他動を表わすものであるとしてい
る。

使役接尾辞についても扱っているが、これは金田一(1960)と基本的に変わらないもの
である。

4.2.4. 福田(1956)

福田(1956)は使役接尾辞についてそれまでと異なる指摘を行っている。

-re、-te、-e に関してはそれまでの先行研究と基本的に変わらないが、「使役形形成接
尾辞は、意味上差支えない限り、あらゆる動詞に接合して、その使役形を作ることがで
きる」という指摘をしている(p. 478)。

-yar、-ar についてはそれまでとは異なる以下のような見方を示している。

これ[引用者注 : -yar、-ar]が接尾した形式は、使役形と同様やはり《…サセル》と訳
せる。けれども、この接尾辞は使役形形成接尾辞とは性質を異にする。

-yar~ -ar が接尾しても、その動詞のとり得る客語の数は変わらない。たとえば、

'ipe 《食事スル》 ; 'ipe'an ro. 《食事シヨウ》

'ipeyar 《食事サセル》 ; 'ipe'yan ro. 《食事サセヨウ》

のように自動詞に-yar~ -ar が接尾してできた動詞はやはり自動詞である。

[引用者 : 中略]

-yar~ -ar は、使役される者を誰と定めなくて、誰かにやらせることを表わす形式で
ある。これの接尾した形式を、同じ語幹から派生した使役形とくらべてみると

○ kuyere na.

ワタシガ・云ワ・セル ヨ

は、誰に云わせるかはっきりわかっている場合に、その人に言わせるからね、の意味に

用いる。これに対し、

○ kuyeyar na.

ワタシガ・云ワ・セル ヨ

は、誰に云わせるかきめず(わかっていると言及せず)、とにかく誰か使いをやって云わせるからね、の意味に用いる。

[福田 1956 : 476]

このように-yar に関しては金田一(1960)や金田一・知里(1936)、知里(1942)とは異なる見解を示している。-yar は金田一(1960)では「使役相語尾の複数形」として定義されていた。しかし、福田(1956)では-yar は動詞に接尾してもその動詞のとり得る名詞の項数を変えることはなく、「使役される者を誰と定めないうで、誰かにやらせることを表わす形式」であるとしている。他動詞形成接尾辞と使役接尾辞は動詞に接尾した場合、その動詞が必要とする名詞の項数を一つ増やすものである。その点から言えば、この-yar という接尾辞は性質がその他とは異なっているといえる。そして、後に田村(1975)ではこの-yar~-ar という接尾辞に「不定使役語尾」という用語を用いている。

4.2.5.田村(1988)

田村(1988)では「語根(または語基を共有する自動詞、他動詞の対一語根(または、その重複形、派生形)を共有し、接尾辞の違い、あるいはその有無によって分かれた、自動詞と他動詞の対がたくさんある。この種の自動詞、他動詞の対を接尾辞の形から見ると、次の四種類の基本的な形が認められる」(p. 62)とし、それとは別の単複の区別をなす自動詞から派生したものも含めて以下のように示している。

- a) 擬音、擬態の語根に-ke が接尾して自動詞、1 個の母音が接尾して他動詞の単数形、-pa が接尾してその複数形が造られるもの[引用者注：例略 以下同じ]
- b) 接尾辞ゼロで自動詞、一個の母音が接尾して他動詞の単数形、-pa が接尾してその複数形が造られるもの
- c) 接尾辞ゼロで自動詞、接尾辞-ke で他動詞が造られるもの
- d) 接尾辞ゼロで自動詞、接尾辞-ka で他動詞が造られるもの
- e) なお、位置名詞から派生した、方向を表わす自動詞と他動詞の対では次のようになっている。

位置名詞(語根)に、-(i)n (単数形)、-(i)p (複数形)が接尾して自動詞が造られる。

自動詞に、-ka/-ke(単数形)、-te(複数形)が接尾して、他動詞が造られる。

[田村 1988 : 62-63]

この表示の仕方がこれまでに挙げた先行研究と異なるのは他動詞形成接尾辞-ke が接尾するものを二つに分けたことである。

4.2.6. 先行研究での言及

以上の先行研究で挙げられている他動詞形成接尾辞についてここでまとめておく。他動詞形成接尾辞としては次のようなものが挙げられていた。

①-V(-a, -i, -u, -e, -o)

- a) 語根が単独で自動詞
- b) 語根に自動詞形成接尾辞-ke が接尾して自動詞

②-ke 語根が単独で自動詞

③-ke 語根が位置名詞であり、-i(n)(単数形)、-i(p)(複数形)が接尾して自動詞のものに接尾する

④-ka

⑤-re, -te, -e

また使役接尾辞として以下のものが示されていた。

⑥-re 母音または/y/で終わる語幹に接尾する

⑦-te /y/, /r/以外の子音で終わる語幹に接尾する

⑧-e /r/で終わる語幹に接尾する

以上が動詞あるいは語根に接尾してその動詞が取り得る名詞句の数を一つ増やすものであるのに対して、次のものは使役的な意味を含むが動詞が取る名詞句の項を変えないものである。

⑨-yar

4.2.7. 使役接尾辞と動詞形成接尾辞の区分

使役を表す手段は語彙的なものから形態的、分析的なものまで様々なレベルのものがあり、その意味では先行研究で他動詞形成接尾辞として挙げられていたものまで含まれる¹⁵。アイヌ語では-V、-ke、-ka、-RE、-yar という接尾辞が挙げられる。このうち、

¹⁵ コムリー(1992)に使役に関して「形態面のパラメーターに関しては、3通りの類型的区別を立てることができるが、多くの類型的区別と同じように、諸言語に見られる形式は、かならずしもこの3つのタイプのどれかひとつにぴったりと合致するわけではなく、むしろ、いろいろな中間タイプを示している。この連続体は、全体として、分析的使役から形態的使役を経て語彙的使役へと及んでいる」(pp. 179-180)とある。

-yar は使役的な意味を含むが動詞が取る名詞句の項を変えないという点で他のものと大きく異なるので、ここでの議論からは除外する。

-V、-ke がつくものは非常に語彙的に限定されている。それに対し、福田(1956)は-RE について「意味上差支えない限り、あらゆる動詞に接合して、その使役形を作ることができる」(p. 478)と指摘しており、これらは非常に生産性の高いものであり、より分析的なレベルに近いものと考えられる。そのため、本論文では-V、-ke を「動詞形成接尾辞」とみなし、-RE は「使役接尾辞」と呼ぶことにする。

接尾辞-ka は、-RE 同様に「使役接尾辞」と呼ぶことにする。これには理由が三つある。

第一に-ka が接尾するものは-RE と比較すると限定されるが、どのようなものにつくのかは方言差が大きく、ある方言では-ka が接尾するものが他方言では-RE が接尾することもある。例えば、kunne 「黒い」という一項動詞から「～を黒くする」という二項動詞が派生する際に、沙流方言においては kunne-re という-RE が接尾する形が確認される¹⁶。帯広方言・美幌方言においては kunne-ka という-ka が接尾する形が確認されている¹⁷。

第二に同じ方言の中でも揺れが観察されることがある。例えば、nam 「冷たい」という一項動詞から「～を冷やす」という二項動詞が派生する際に沙流方言では nam-te、nam-ka という双方の形が確認される¹⁸。

第三に-V、-ke は語根あるいは一項動詞の基本形に直接接尾すると考えられるが、-ka は派生形に接尾する例もある。us 「消える」という一項動詞から二項動詞「～を消す」が派生する際には us-ka という-ka が接尾した形が確認される。また、同じ us から派生した形として arustekka 「～を全滅させる」という語も確認できる。これは ar-us-tek-ka[完全に-消える-さつと-使役]という語構成になっていると考えられる。語頭の ar-は副詞的な接頭辞である。-tek は動詞と接尾辞-ka に挟まれていることから、ここでは接尾辞的に働いているが、田村(1996)では助動詞 tek の項目があり、「(動詞の後に置かれて)ちょっと...する(短時間、瞬間に、軽く)。」(p. 705)と記述されており、助動詞が動詞の中に取り込まれている形である可能性もある。-tek が接尾辞であるか助動詞であるかは判断が難しいところではあるが、数は少ないものの同じように助動詞が動詞に取り込まれた後で-ka が接尾する語構成は他にも観察される。iperusuyka 「～を空腹にする」という語がある¹⁹。ipe-rusuy-ka[食事する-～したい-使役]という語構成にな

¹⁶ 田村(1996 : 363)などで確認できる。

¹⁷ 服部(1964 : 282)で確認できる。

¹⁸ 田村(1996:404)(萱野 2002 : 340) で確認できる。

¹⁹ Nakagawa & Bugaeva (2012) K7803231UP で次のような例が確認される。なお、筆者は iperusuyka という語はこの用例以外確認できていない。

a=kor son a=iperusuyka a=erampokiwēn wakusu
4.S=～を持つ 息子 4.S=～を空腹にさせる 4.S=～を気の毒に思う ので
息子を空腹にさせるのも私はかわいそうなので

っている。rusuy は願望を表わす助動詞であり、iperusuy で「空腹である」という意味になっており、それに-ka が接尾している。以上のことから-ka は必ずしも語根あるいは一項動詞の基本形に直接接尾するわけではないことがわかる。

よって、-ka は他の接尾辞よりも-RE に近いものであると考えられるため、本論文は使役接尾辞の一種として扱う。

以上をまとめると、本論文では動詞形成接尾辞として扱うのは-V、-ke であり、使役接尾辞として扱うのは-RE、-ka である。

4.3. 有対動詞の派生タイプ

国立国語研究所 (2014) は「世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベース」として、有対動詞の派生型として5つの形式的関係のタイプを挙げ、Haspelmath (1993) で提案された31の動詞対について、各言語での動詞対の派生型を掲載している。以下にその派生型についての表を引用する(表3)。

表 3. 国立国語研究所 (2014) 『使役交替言語地図』で示されている5つの形式的関係のタイプ

派生の方向の有無	派生型	自他動詞対間の形式的な関係
派生の方向あり	A (Anticausative)	他動詞が無標→自動詞が有標：自動化・反使役化型
	C (Causative)	自動詞が無標→他動詞が有標：他動化・使役化型
派生の方向なし	E (Equipollent)	自他動詞ともに有標：両極型
	L (Labile)	自他動詞ともに同じ形式：自他同形型
	S (Suppletive)	自他動詞ともに無標・異形：補充型

本論文では、有対動詞を形態的観点から分類した上で、上記の派生型のいずれに該当するのかも示すことにする。

4.4. 本論文で扱う有対動詞の範囲

国立国語研究所 (2014) で挙げられている世界の言語の一つにアイヌ語も含まれており、31の動詞について次のように分析されている(ブガエワ 2014a)。以下にその表を引用する(表4)。なお、引用にあたり表の形式については引用者が一部変更した。

表 4. プガエワ(2014 a) 「アイヌ語使役交替動詞対データ」

	Haspelmath (1993: 104) Table 4, 31 pairs ranked in the ascending order of A/C ratio	Non-causative	Causative	Type of morphological relation
1	boil	pop	pop-te	C
2	freeze	rupus	rupus-ka	C
3	dry	sat	sat-ke	C
4	wake up	mos	mos-o	C
5	go out/put out	us	us-ka	C
6	sink	rer	rer-e	C
7	learn/teach	yomne	yomne-re	C
8	melt	ru	rú-re	C
9	stop	as	as-te	C
10	turn	si-kiru	kiru	A
11	dissolve	ru	rú-re	C
12	burn	uhuy	uhuy-ka	C
13	destroy	arustek	arustek-ka	C
14	fill	sik	sik-te	C
15	finish	si-okere	okere	A
16	begin	heasi	heasi-re	C
17	spread	si-pirasa	pirasa	A
18	roll	karkarse	karkarse-re	C
19	develop	-	-	
20	get lost/lose	isam	isam-ka	C
21	rise/raise	rikin	rikin-ka	C
22	improve	pirka	pirka-re	C
23	rock	si-suye	suye	A
24	connect	sirkot	sirkot-e	C
25	change	utasa	utasa-re	C
26	gather	uwekarpa	uwekarpa-re	C
27	open	mak-ke	mak-a	E
		cak-ke	cak-a	E
28	break	per-ke	per-e	E

29	close	as	as-i	C
30	split	yas-ke	yas-a	E
31	die/kill	ray	ray-ke	C

上記 31 語(うち一語は未掲載)のうち、C タイプに分類されているものは 23 語ある。これはさらに以下の 4 つに分類できる。

- RE による派生
- ka による派生
- ke による派生
- V による派生

ブガエワ(2014a)の C タイプの派生に現われる接尾辞は、本論文での基準では「使役接尾辞」(-RE,-ka)、「動詞形成接尾辞」(-ke,-V)に大別できる²⁰。本論文では共通の語根から派生する一項動詞と二項動詞、あるいは二項動詞と三項動詞を有対動詞とみなし、動詞に使役接尾辞が接尾した形は有対動詞に含めないこととする。

また、ブガエワ(2014a)で A タイプに分類されている語は 5 語あるが、いずれも Non-causative は causative に si-が接頭した形である。例えば、“turn”に相当する causative として kiru が挙げられているが、kiru は単数形であり、複数形として kirpa がある。語根は kir であり、kiru はそれに接尾辞-u が接尾辞した形である。Non-causative の si-kiru は、それにさらに「自分」を意味する接頭辞 si-が接頭した形である。上記の通り、本論文では共通の語根あるいは一項動詞の基本形から派生する一項動詞と二項動詞、あるいは二項動詞と三項動詞を有対動詞とみなしている。si-は語根や一項動詞の基本形に直接接頭するわけではなく、二項動詞に接頭しているので、本論文ではこの派生は扱わないこととする。

4.5. 有対動詞のタイプ

沙流方言の有対動詞を形態的特徴から分類する。

4.5.1. $\sqrt{-ke}$ と $\sqrt{-V}$ の対

語根に-ke あるいは-se が接尾した形が一項動詞であり、語根に-V が接尾した形が二項動詞の単数形、-pa が接尾した形が複数形であるものがある。この語根は基本的に CVC である。以下に例を挙げる(表 5)。

なお、このような一項動詞と二項動詞の対応については 4.2.節で確認した先行研究等

²⁰ アイヌ語の使役に関してブガエワ(2014b)ではこの 4 つを生産性の観点から非生産的-V,-ke,-ka と生産的-re/-re/-e の二つに分けている。

でも指摘されている。

表 5. $\sqrt{\text{-ke}}$ と $\sqrt{\text{-V}}$ の対

一項目動詞		二項目動詞(単数形)		二項目動詞(複数形)
carke	散らばる	cari	carpa	～を撒く
cupke	すぼむ	cupu	cuppa	～をまるめる
kapke	ぺちゃんこになる	kapa	kappa	～をぺちゃんこにする
komke	曲がる	komo	kompa	～を折り曲げる
makke	開く	maka	makpa	～を開ける
noyke	ねじれる	noye	noypa	～をねじる
ohetke	流れ出す	ohetu	ohetpa	～を口やのどから吐き出す
perke	破れる、割れる	pere	perpa	～を破る、～を割る
petke	裂ける	petu	petpa	～を細く切る
rewke rewewse	曲がる	rewe	rewpa	～を曲げる、～をたわめる
soske	剥げる、むける	soso	sospa	～をはぐ、～をはがす
teske	反る	tesu	tespa	～を反らす
yaske	裂ける、割れる	yasa	yaspa	～を裂く
yupke	きつく締まる	yupu	yuppa	～をひき締める
hewke	傾く	hewe		～を傾ける
meske	欠ける、剥がれる	mesu	mespa	～の表面をそぎ取る、 ～をむしり取る
rutke	ずれて移動する	rutu	rutpa	～を押してずらす
piraske	広がる	pirasa	piraspa	～を広げる
teyke	崩れる	teye	teypa	～を押つぶしてぺし ちゃんこにする
poyke	混じる	poye	poypa	～を混ぜる

これらは同一の語根に一項目動詞の場合は-ke あるいは-se、二項目動詞の場合は-V あるいは-pa という接尾辞が接尾することにより、派生しているため、派生の方向はなく、自他動詞ともに有標の両極型で、派生型は E(Equipollent)タイプである。

4.5.2. $\sqrt{\text{ }}$ と $\sqrt{\text{-V}}$ の対

語根そのものが一項目動詞であり、語根に-V 接尾した形が二項目動詞の単数形、-pa が接

尾した形が複数形であるものがある(表 6)。この語根は基本的に CVC である。

なお、このような一項動詞と二項動詞の対応については 4.2.節で確認した先行研究等でも指摘されている。

表 6. 一項動詞√と二項動詞√-V の対

一項動詞		二項動詞(単)	二項動詞(複)	
kay	折れる	kaye	kaypa	～を折る
tuy	切れる	tuye	tuypa	～を切る
as(単)roski(複)	立つ	asi	roski	～を立てる
sat	乾く	satsatu	未確認	～を乾かす
tuk	(芽が)出る	tuku	tukpa	～を突き出す

これらの一項動詞は語根そのもの、二項動詞の場合は一項動詞に-V あるいは-pa という接尾辞が接尾することにより、派生している。そのため、派生の方向は一項動詞から二項動詞であり、一項動詞が無標、二項動詞が有標である他動化・使役化型で、派生型は C(Causative)タイプである。

また、これと平行的な二項動詞と三項動詞の対もある。二項動詞が語根そのものであり、三項動詞は語根に-V が接尾した形態になっているものである(表 7)。

表 7. 二項動詞√と三項動詞√-V の対

二項動詞		三項動詞	
us	～につく ～をつける(履く)	usi	～に～をつける
un	～に住む、～にはまる	unu	～に～をはめる

4.5.3. √と√-ke の対

語根そのものが一項動詞であり、語根に-ke が接尾した形が二項動詞であるものがある(表 8)。この語根は基本的に CVC である。

なお、このような一項動詞と二項動詞の対応については 4.2.節で確認した先行研究等でも指摘されている。

表 8. $\sqrt{\quad}$ と $\sqrt{\quad}\text{-ke}$ の対

一項動詞		二項動詞	
乾く	sat	～を乾かす	satke
鋭い、鋭くなる	een	～を尖らす	eenke
すり切れる	yar	～をすり切らす	yarke
死ぬ	ray	～を殺す	rayke

これらの一項動詞は語根そのもの、二項動詞の場合は一項動詞に **-ke** という接尾辞が接尾することにより、派生している。そのため、派生の方向は一項動詞から二項動詞であり、一項動詞が無標、二項動詞が有標である他動化・使役化型で、派生型は C(Causative)タイプである。

4.5.4. $\sqrt{\quad}\text{-n}$ と $\sqrt{\quad}\text{-n-ke}$ の対

位置名詞である語根に、**-(i)n** が接尾して一項動詞の単数形、**-(i)p** が接尾して一項動詞の複数形が形成されるものがある。また、さらに一項動詞の単数形に **-ke** が接尾して二項動詞の単数形、一項動詞の複数形に **-te** が接尾して二項動詞の複数形であるものがある(表 9)。

なお、このような一項動詞と二項動詞の対応については 4.2.節で確認した先行研究等でも指摘されている。

表 9. $\sqrt{\quad}\text{-n}$ と $\sqrt{\quad}\text{-n-ke}$ の対

一項動詞		二項動詞			
(単数形)	(複数形)		(単数形)	(複数形)	
ahun	ahup	入る	ahunke	ahupte	～を入れる
asin	asip	出る	asinke	asipte	～を出す
ran	rap	下りる、下がる	ranke	rapte	～を下ろす
san	sap	下る、出る	sanke	sapte	～を下ろす
yan	yap	上陸する	yanke	yapte	～を上げる

これらの一項動詞と二項動詞の関係は単数形の場合、一項動詞に **-ke** という接尾辞が接尾することにより派生している。また、二項動詞は一項動詞に **-te** という接尾辞が接尾することにより派生している。そのため、派生の方向は一項動詞から二項動詞であり、一項動詞が無標、二項動詞が有標である他動化・使役化型で、派生型は C(Causative)タイプである。

本論文では **-te** は使役接尾辞として扱い、これにより派生したものは有対動詞に含め

ないこととすると述べたが、単数形が-ke で派生しているため、このタイプも有対動詞に含める。

4.5.5. 一項動詞√-ke と二項動詞√-V または√-ke

語根に-ke が接尾した形が一項動詞であり、なおかつ二項動詞であるものがある。それとともに、語根に-V が接尾したものが二項動詞であるものがある。このタイプのものは先行研究では言及されていない。

まず、鵠川方言におけるこのタイプの動詞について述べた後で沙流方言についてみていく。

4.5.5.1. 鵠川方言における同一語根から派生した一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

筆者は小林(2014)にて鵠川方言においても動詞形成接尾辞-ke が確認され、これまで沙流方言に関する先行研究で指摘されているものと同様の機能があることを述べた(先行研究で指摘されている沙流方言の機能については4.5.1 及び4.5.3、4.5.4 参照)。また、その他に数は少ないものの、語根に-ke が接尾した形が一項動詞であり、なおかつ二項動詞であり、それと同時に、語根に-V が接尾したものが二項動詞であるものがあることを指摘した(表 10)。

表 10. 鵠川方言における同一語根から派生した一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

一項動詞		二項動詞	
cakke	開く	cakke caka	～を開ける
rewke	たわむ、折れ曲がる	rewke rewe	～を折り曲げる

鵠川方言の cakke 「開く、～を開ける」と caka 「～を開ける」の用例を以下に挙げる²¹。

(10) apa cakke wa an wa.

戸 開く ～して いる よ

戸が開いているよ。

[アイヌ語鵠川方言日本語－アイヌ語辞典「開く」の項目(新井田氏)]

²¹ 用例はウェブ上で公開されている「アイヌ語鵠川方言日本語－アイヌ語辞典」に掲載されている。項目名と話者名を用例とあわせて示した。

(11) mean na. iteki apa cakke.

寒い よ ~するな 戸 ~を開ける

寒いよ。決して戸を開けるな。

[アイヌ語鶴川方言日本語－アイヌ語辞典「...するな」の項目(吉村氏)]

(12) apa ku=cakke.

戸 1.S=~を開ける

私が戸を開ける。

[アイヌ語鶴川方言日本語－アイヌ語辞典「開ける」の項目(新井田氏)]

(13) apa ku=caka kor kimatek wa kira wa isam.

戸 1.S=~を開ける ~すると 驚く ~して 逃げる ~して いない

私が戸を開けると(猫たちは)驚いて逃げてしまった。

[アイヌ語鶴川方言日本語－アイヌ語辞典「罵倒する」の項目(新井田氏)]

(10)の用例からは **cakke** が一項動詞であることがわかる。それと同時に(11)(12)からは二項動詞としても機能することがわかる。また、(13)のように二項動詞として **caka** という形も確認できる。

4.5.5.2. 沙流方言における同一語根から派生した一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

沙流方言においては語根に-ke が接尾した形が一項動詞であり、なおかつ二項動詞であり、それと同時に、語根に-V が接尾したものが二項動詞であるものは、単独では筆者は確認できていない。しかし、派生語中では数は少ないものの、鶴川方言と同様に√-ke という形で通常は一項動詞として機能するものが、二項動詞として機能する例が確認できる。具体的には horutke 「崩れる」と honoyke 「ゆがむ、傾く」の二語である。

まず、horutke は、rutke という動詞に「尻、下部」を意味する接頭辞 ho- が接頭した形になっていると考えられる。rutke は、単独では「ずれて動く、崩れる」という意味の一項動詞として機能する。これに対応する二項動詞として、rutu(単数形)、rutpa(複数形)「~を押しずらす」が確認される。このことから、この語は語根が rut であり、動詞形成接尾辞-ke により一項動詞が形成され、動詞形成接尾辞-V、-pa により二項動詞が形成される動詞であることがわかる。

horutke の例を以下に挙げる。

(14) i=ka un toy horutke wa

4.O=~の上へ土 くずれる して

私の上に土が崩れて

[アイヌ民族博物館 2015 c:174]

(14)では horutke は名詞句 toy を一つ取っており、一項動詞として機能している。単独で表われる場合、rutke は一項動詞として機能するので、接頭辞 ho-「尻」が接頭すると、ho-rutke は 0 項動詞になることが予測されるが、実際には一項動詞となることが(14)からわかる。つまり、ho-rutke は「尻-~を押しずらす」のように二項動詞に接頭辞が接頭している構成になっており、「崩れる」という意味なっていると考えられる。このように ho-rutke という語中では rutke は二項動詞として機能している。

honoyke は noyke という動詞に「尻、下部」を意味する接頭辞 ho-が接頭した形になっていると考えられる。noyke は、単独では「ねじ曲がる」という意味の一項動詞として機能する。これに対応する二項動詞として、noye(単数形)、noypa(複数形)「~をねじ曲げる」が確認される。このことから、この語は語根が noy であり、動詞形成接尾辞 -ke により一項動詞が形成され、動詞形成接尾辞-V、-pa により二項動詞が形成される動詞であることがわかる。

honoyke の例を以下に挙げる。

(15) a=pakari hi koraci cise as pe ne kusu

4.S=~をはかる こと ように 家 たつ もの ~である ので

somo honoyke ohewke kuni pirkano a=nukar wa

否定 ゆがむ 傾く ように よく 4.S=~を見る して

測った通りに家がたつものだから、ゆがんだり、傾いたりしないように良く見て

[萱野・須藤 1976]

(15)では honoyke は cise「家」を主語とし、一項動詞として機能していると考えられる。単独で現われる場合、noyke は一項動詞として機能するので、接頭辞 ho-「尻」が接頭すると、ho-noyke は 0 項動詞になることが予測されるが、実際には horutke 同様に一項動詞となることが(15)からわかる。つまり、ho-noyke は「尻-~をねじ曲げる」のように二項動詞に接頭辞が接頭した構成になっており、「ゆがむ」という意味なっていると考えられる。ho-noyke という語中では noyke は二項動詞として機能している。

以上のことから、二項動詞の√-ke は派生語中でしか確認できないが、語根に-ke が接尾した形が一項動詞であり、なおかつ二項動詞であるものがある。それとともに、語根に-V が接尾したものが二項動詞であるものがある(表 11)。

表 11. 沙流方言における同一語根から派生した一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

一項動詞		二項動詞		備考
rutke	ずれて動く、崩れる	rutke rutu(単数形)、rutpa(複数形)	～を押しずらす	rutke という二項動詞は派生語中でのみ確認
noyke	ねじ曲がる	noyke noye(単数形)、noypa(複数形)	～をねじ曲げる	noyke という二項動詞は派生語中でのみ確認

上記の語根に-ke 接尾した形が一項動詞、語根に-V が接尾した形が二項動詞の単数形、-pa が接尾した形が複数形という対では、派生の方向はなく、自他動詞ともに有標の両極型で、派生型は E(Equipollent)タイプである。語根に-ke が接尾した形が一項動詞であり、二項動詞であるという対では、自他動詞ともに同じ形式の自他同形型で派生型は L(Labile)タイプである。

4.5.6. 一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

語根に-ke が接尾した形が一項動詞であり、なおかつ二項動詞である可能性が考えられるものがある。このタイプのものは先行研究では言及されていないが、他方言ではこのタイプが確認されるなど沙流方言においても有対動詞である可能性が高いことから本論文ではこのタイプも取り上げる。

まず、浦河方言におけるこのタイプの動詞について述べた後で沙流方言についてみていく。

4.5.6.1. 浦河方言の一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

浦河方言の有対動詞については全体像が把握できるような形にはなっていないが、北海道ウタリ協会浦河支部(1985)には浦河方言の単語 1074 語が記録されている。この中に次のような単語が挙げられている。

レウケ 曲がる 曲げた

[北海道ウタリ協会浦河支部 1985:11]

また、筆者の聞き取り調査においてもこの語については同様の結果を得ており、rewke で一項動詞「折れ曲がる」、二項動詞「～を折り曲げる」として機能していることがわかった²²。

これは自他動詞ともに同じ形式で自他同形型で派生型は L(Labile)タイプである。

²² 遠山サキ氏にご教示いただいた。

4.5.6.2. 沙流方言の一項動詞√-ke と二項動詞√-ke

沙流方言においては、語末が ke である語が一項動詞としても二項動詞としても機能する例は一語のみ確認できる。田村(1996)ではその語について以下のように記述されている。

ケッケ 1 kekke 【自動】 (波や細い木などが、たくさんそろってパチパチと)折れる。

ケッケ 2 kekke 【他動】 (細いたきぎなどを何本も一緒に)折る。

[田村 1996 : 292]

上記の例は形態的・意味的・統語的な対応が成り立っているため、語根に接尾辞-ke が接尾した形態である可能性が高い。そのため、本論文ではこの可能性を重視し、有対動詞の一つのタイプとして挙げることにした。

4.5.7. 有対動詞の分類

沙流方言では、有対動詞を形態から分類すると六種類が確認される(表 12)。

表 12. 沙流方言の有対動詞の分類

一項動詞	二項動詞	派生型	備考
√-ke	√-V(単数形)	E	
√-se	√-pa(複数形)		
√	√-V(単数形) √-pa(複数形)	C	二項動詞と三項動詞の対も確認している。
√	√-ke	C	
√-n(単数形) √-p(複数形)	√-n-ke(単数形) √-p-te(複数形)	C	
√-ke	√-V √-ke	E L	
√-ke	√-ke	L	断定は難しいが、沙流方言でもこのタイプの有対動詞がある可能性が高い。

4.6. √-ke の L タイプ

本論文では√-ke という L タイプがあることを指摘したが、これは E タイプから L タイプへと変化した可能性があることを本節では述べる。

先行研究のブガエワ(2014a)においても動詞対の派生型を明記しているが、L タイプ

が一つも出てきていない。ブガエワ氏によると、データ作成には主として田村(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』を参考にしたとのことである。これは、見出し語 9400 項目で「編者が録音または聞き書きした音声資料のうち、主として 1955 年から 1961 年 4 月までのものの中から語彙を拾った。ほかに、1961 年夏以降の資料や、寄贈を受けた資料から拾ったものも少しある。」(p. i)とのことである。主な話者として 12 人あげられており、最も年代が上の話者は 1880 年生(89 件採録)、最も若い話者は 1926 年生(16 件採録)である。最も採録件数が多い話者は、1895 年頃生(7000 件以上採録)であり、二番目に採録件数が多い話者は 1890 年生(約 3000 件採録)とのことである。つまり、田村(1996)は 1890 年代生まれの方からの聞き取り調査のデータが中心であると言えるだろう。

筆者がここで提示している鶴川方言と浦河方言のデータは、1910 年代から 1920 年代生まれの方のデータであり、田村(1996)で採録件数が多い方と比較すると、20 年から 30 年くらい後の世代となる。

このことから、E タイプから L タイプへの変化これはアイヌ語において比較的最近生じた言語変化である可能性がある。

4.6.1. 語根 *rew* からの派生

沙流方言では語根 *rew* から派生した有対動詞として、一項動詞 *rewke*「折れ曲がる」、二項動詞 *rewe*(単数形)、*rewpa*(複数形)「～を折り曲げる」が確認される。これと同じ語根から派生した語が鶴川方言と浦河方言でも確認される。鶴川方言においては一項動詞 *rewke*、二項動詞が *rewke*、*rewe* となっている。また、浦河方言においては一項動詞二項動詞ともに *rewke* である(表 13)。

表 13. 語根 *rew* からの派生

方言	一項動詞 折れ曲がる	二項動詞～を折り曲げる	派生型
沙流方言	<i>rew-ke</i>	<i>rew-e</i> (単数形) <i>rew-pa</i> (複数形)	E
鶴川方言	<i>rew-ke</i>	<i>rew-e</i> <i>rew-ke</i>	E L
浦河方言	<i>rew-ke</i>	<i>rew-ke</i>	L

この三方言を比較すると、沙流方言の E タイプから鶴川方言の E タイプと L タイプが共存する形への変化し、E タイプが失われ、浦河方言の L タイプのみに変化した可能性が考えられる。

E タイプから L タイプへと変化する要因として考えられるのは、接尾辞 *-ke* が語根から一項動詞が形成される際に接尾するだけでなく、語根から二項動詞を形成する際にも接尾するということである。例えば、*sat*「乾く」という一項動詞の対となる二項動詞

は **satke** 「～を乾かす」である。接尾辞**-ke**は沙流方言の **rewke** のように語根から一項動詞を形成することも **satke** のように二項動詞を形成することもあるので、本来一項動詞であるものが、二項動詞として使われるようになったという考え方である。沙流方言・鶴川方言のみに着目すれば、EタイプからLタイプへと変化したと考えられるのは**-ke**が接尾したものだけであるが、浦河方言では次に述べるように必ずしもそうではないので、これを要因と考えるには疑問が残る。

4.6.2.語根 **mak** と語根 **noy** からの派生

沙流方言では語根 **mak** から派生した有対動詞として、一項動詞 **makke** 「開く」、二項動詞 **maka**(単数形)**makpa**(複数形)「～を開ける」が確認される。浦河方言においては一項動詞、二項動詞ともに **maka** である(表 14)²³。

表 14. 語根 **mak** からの派生

方言	一項動詞 開く	二項動詞 ～を開ける	派生型
沙流方言	mak-ke	mak-a (単数形) mak-pa (複数形)	E
浦河方言	mak-a	mak-a	L

語根 **mak** の派生は浦河方言では、沙流方言における二項動詞の形が一項動詞としても二項動詞としても機能している。

また、沙流方言では語根 **noy** から派生した有対動詞として、一項動詞 **noyke** 「ねじ曲がる」、二項動詞 **noye**(単数形)**noypa**(複数形)「～をねじ曲げる」が確認される。また、**honoyke** という派生語中では **noyke** が二項動詞として機能する例も確認できる。浦河方言においては一項動詞が **noyke**、**noye** 双方の形が確認でき、二項動詞は **noye** である(表 15)²⁴。

表 15. 語根 **noy** からの派生

方言	一項動詞 ねじ曲がる	二項動詞～をねじ曲げる	派生型
沙流方言	noy-ke	noy-e (単数形) noy-pa (複数形)	E
		noy-ke	L
浦河方言	noy-ke	noy-e	E
	noy-e		L

²³聞き取り調査での遠山サキ氏からのご教示による。

²⁴ 浦河方言については、北海道ウタリ協会浦河支部(1985)において次のような記述がある。

ノイケル 曲がりくねった道 [p.8] (引用者：ルは「道」の意)

ノエノエ 曲がりくねる [p.8]

また、筆者は遠山サキ氏からこの語彙についてもご教示いただいた。

がそのタイプとして出現する。また、沙流方言、浦河方言においては *rewke* と近い意味を担う *noyke*、*noye* 「ねじ曲がる」「～をねじ曲げる」という語が同じ E&L タイプとして出現する。鶴川方言で E&L タイプである *cakke* 「開く」、*cakke*、*caka* 「～を開ける」が、浦河方言では語根は異なるが同じ意味を担う *maka* が「開く」「～を開ける」となり L タイプとなっている。このことから派生型 E&L タイプや L タイプになりやすい意味的な特性があることが予測される。

第五章 項構造と語彙概念構造

本論文では動詞の構造を項構造を用いて表わす。また、必要に応じて語彙概念構造も用いる。本章ではそれに先立ち、項構造と語彙概念構造に関する先行研究として影山(1993,1996,1999)を取り上げる。

5.1. 語彙概念構造

本節では語彙概念構造について簡潔に述べる。

影山(1999)は語彙概念構造について「これは、1970年代の生成意味論に端を発し、その後 Jackendoff(1990)などによって展開されてきた意味理論で、動詞の概念的意味を明確に表示し、統語構造と意味構造との関係を明確化しようとするものである」(p. 63)とし、基本的に以下の四つの発想を基にするものであるとしている。

- (A) 何千あるいは何万とある動詞は、てんでんばらばらな意味構造をもつのではなく、「移動」「状態変化」「活動」などの意味タイプによっていくつかのグループにまとまる。
- (B) それらは、外界の出来事を認識し、動詞として言語化する際の式型(スキーマ)になる。
- (C) 語彙概念構造は、個々の動詞が持つ概念的・含蓄的意味をすべて網羅的に示す必要はない。さしあたっては当該言語で統語的に意義のある意味特性を示せばよい。
- (D) 語彙概念構造は、幾つかの限られた意味述語と、それが取る項で構成される。

[影山 1999:63]

影山(1999)ではアスペクトを基にして、動詞を大きく「状態(アル型)」「動き(ナル型)」「活動(スル型)」「使役」の四つに分類している。さらに「動き(ナル型)」に関しては「変化」と「移動」の二つに分けている。以下は影山(1999)で提示されている語彙概念構造の基本形である。

影山(1999) 語彙概念構造(Lexical Conceptual Structures:LCS)の基本形

a. 状態(state)(アル型)

[[]_y BE AT-[]_z]

b. 動き(ナル型)

1. 変化(change)

[[]_y BECOME [BE AT-[]_z]]

2. 移動(motion)

[[]_y MOVE [PATH]_z]

c. 活動(activity)(スル型)

[[]_x ACT ON:[...]]_y]

d. 使役

[[]_x CAUSE [BECOME [[]_y BE AT-[]_z]]]

[影山 1999:65]

影山(1999)は語彙概念構造の具体的な考え方について「語彙概念構造は統語構造との対応を重視して作られた意味構造である。言い換えれば、統語構造との対応関係—意味構造のどの部分が文構造で主語になり、どの部分が目的語になるのかといった関係—を明らかにすることを第一の目標としている。そのため、単なる図ではなく、一種の論理式を用いる。その論理式は、限られた数の意味述語(semantic predicate)とその項(argument)で成り立っている」(p. 66)としている。上のモデルに用いられている意味述語については以下のように説明されている。

意味述語

- a. BE : 静止した「状態」を表す。
- a'. AT : BE と一緒に用いられて、抽象的な状態ないし物理的な位置を示す。
- b. BECOME : 「変化」を表す。
- c. MOVE : 「移動」を表す。
- d. ACT : 継続的あるいは一時的な「活動」を表す。
- d'. ON : ACT と一緒に用いられると、働きかけの対象を示す。

[影山 1999 : 66]

上で提示されている概念構造のモデルを具体的にどのように使うのかを状態動詞を例として取り上げる。状態動詞は影山(1999)では以下のような語彙概念構造を持つものとして記述されている(以下は影山 1999 : 67 を参考に引用者が説明を書き加えたものである)。

状態動詞の語彙概念構造

状態動詞： [[]y BE AT-[]z]
 ↑ ↑
 誰 / 何 状態 / 位置
 =統語構造における主語

状態動詞の場合、y には主語に相当するものが当てはまる。また、抽象的な状態ないし物理的な位置を示す AT の後ろにある z にはどのような状態であるのか、またはどのような位置にあるのかを表わすものが当てはまる。空欄 y や空欄 z は実際の文では具体的な名詞に相当し、変項と呼ばれている(p. 67)。影山(1999)で示されている具体例を以下に示す。

影山(1999)で示されている例

- a. Jack is in Chicago. [STATE[Jack]BE AT-IN-[Place Chicago]]
Sue is home. [STATE [Sue]BE AT-[Place home]]
- b. Jack is in good shape. [STATE[Jack] BE AT-IN-[Property good shape]]
Sue is healthy. [STATE[Sue]BE AT-[Property health]]

[影山 1999: 67]

- c. 身体が暖かい。
[]y BE AT-[ATATAKA 状態]z (y=身体)
- d. 身体が暖まる。
[BECOME []y BE AT-[ATATAKA 状態]z]
- e. 彼女は身体を暖める。
[[]x CAUSE [BECOME []y BE AT-[ATATAKA 状態]z]]
(x=彼女、y=身体)

[影山 1999: 73]

AT の後の変項は「場所」や「状態」あるいは「属性」でもよい。AT の後は通常は変項であるが、上の日本語の例「暖かい、暖まる、暖める」では ATATAKA 状態という特定の概念が入っており、このような特定化された項は定項と呼ばれている(p. 73)。

語彙概念構造では以上のような論理式を用いて動詞が表す意味を表示する。

5.2. 項構造

本節では項構造について述べる。

影山(1996)は項構造を統語構造と意味構造の間を取り持つレベルのものであるとし(p. 21)、影山(1993)は項構造は「述語が取る名詞句を記述したもので、Fillmore(1968)

の格文法の考え方を発展させたものとして捉えることができる。ただし、Fillmore の格文法では文に現われる総ての意味役割を対象にしたのに対して、項構造では述語の項(argument)のみを規定し、時間や場所手段などの付加詞(adjunct)は除外する」とし、「飲む」の項構造を次のように記している。

飲む : (Agent <Theme>)

[影山 1993 : 31 (38)]

影山(1993)はいわゆる自動詞には非能格自動詞と非対格自動詞の二種類があることが認められており、「意図的動作を行う動作主(Agent)を主語にとる動詞」が非能格自動詞、「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」が非対格自動詞であるとしている(p. 43)。そして、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の三種類の項構造を以下のように示している。

a.他動詞 : (Agent <Theme>)

b.非能格自動詞 : (Agent < >)

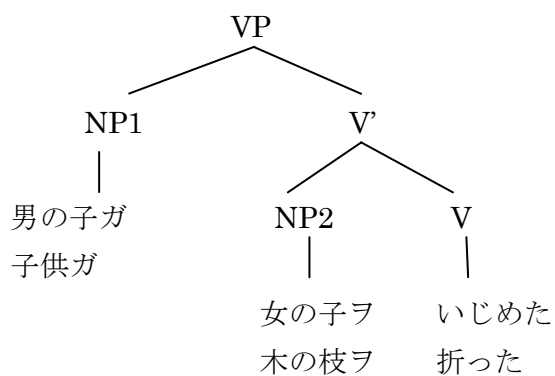
c.非対格自動詞 : (<Theme>)

[影山 1993 : 47]

つまり、自動詞の主語は他動詞の主語と同じ意味役割を担うものと、他動詞の目的語と同じ意味役割を担うものの二種類が考えられ、前者が非能格自動詞であり、後者が非対格自動詞である。

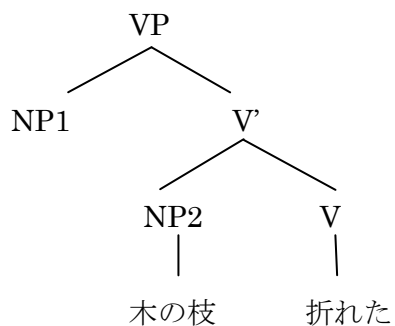
< >の中に入るものは内項、外側にあるものは外項と呼ばれる。影山(1993)は< >の内外の関係が動詞からの「距離」を表し、内項は動詞に近く、外項は動詞から離れているとしている(p. 47)。影山(1993)に示されている枝分かれ構造の図にこの「距離」が現れている。以下に他動詞「男の子が女の子をいじめた」「子供が木の枝を折った」、非対格自動詞「木の枝が折れた」非能格自動詞「男の子があばれた」を図示したものを引用する。

他動詞



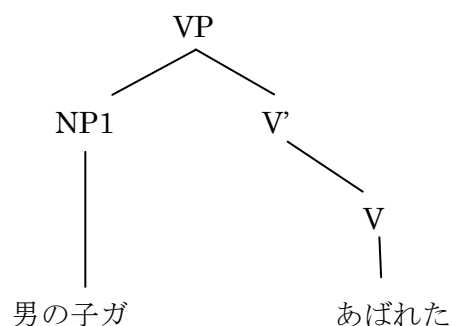
[影山 1993:46]

非対格自動詞



[影山 1993:46]

非能格自動詞



[影山 1993:46]

他動詞と自動詞の構造を比較すると、非対格自動詞の主語は他動詞の目的語と同じ位置にあり、非能格自動詞の主語は他動詞の目的語と同じ位置に示されている。前者の方が、動詞に近い位置であり、後者は動詞からより離れている。

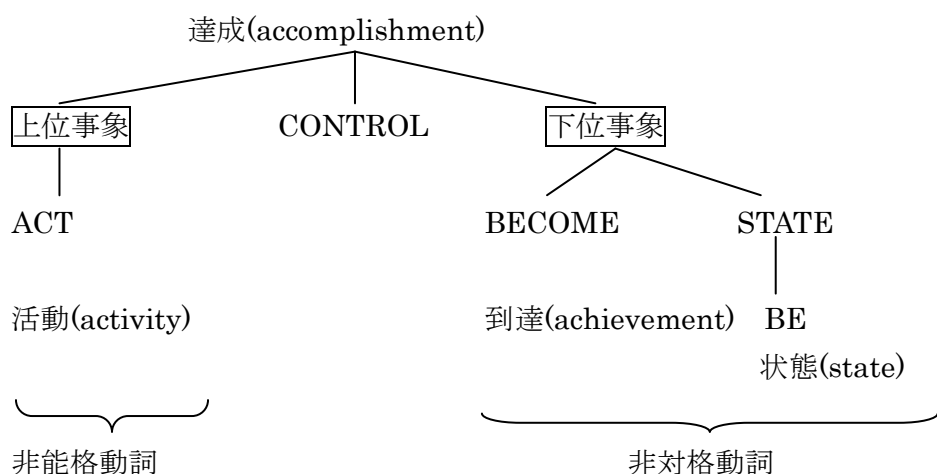
上記のような自動詞の二種類の違いを項構造では示すことが可能である。

5.3. 語彙概念構造と項構造の関係

本節では語彙概念構造と項構造の対応関係について述べる。

影山(1996)は使役構造を次のように図示している。図を影山(1996)に基づき、説明する。状態と状態変化は非対格構造に対応し、活動は非能格構造に対応する。そして、この二つを合わせたものが、使役構造であり、使役作用となる活動の部分は上位事象、その結果の部分は下位事象と呼ばれる。つまり、非対格動詞は下位事象だけを持ち、非能格動詞は上位事象だけを持つ。そして、使役他動詞は上位事象と下位事象を合わせたものである。そして、下位事象に現われる主語は内項に該当し、上位事象に現われる主語は外項に該当する(p. 91)。

影山(1996)で示されている使役構造



[影山 1996 : 90]

上の図は次のような語彙概念構造に相当する²⁵。

[x ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE AT-z]]
 ↓ ↓
 外項 内項

[影山 1996:91]

²⁵ 6.1. でみた影山(1999)で示されている使役の語彙概念構造は次のような表示である。

[[x CAUSE [BECOME [[y BE AT- [z]]]]]]

ここで挙げた使役構造の語彙概念構造と比較すると上位事象と下位事象をつなぐものが CAUSE か CONTROL かという部分に違いがある。影山(1996)は CAUSE と CONTROL の違いについて、CAUSE は結果の成立を含意するのに対し、CONTROL は「Y の成立を直接的に左右する」という程度で必ずしも Y の成立を含意するものではないとしている[影山 1996 : 85-86]。

5.4. 本論文で項構造を用いる理由

アイヌ語は動詞の項数がかなり明確に判別できる言語である。その理由は主に二つある。一つは人称を人称接辞によって表示する際に、一項動詞と二項動詞以上では異なる接辞がつくことである。これにより、その動詞が一項動詞であるのか、あるいは二項動詞または三項動詞であるのかは明確になる。そして、もう一つの理由は動詞の項となる名詞の側には何もマーカ―が付かないことにある。例えば、日本語のように名詞に助詞がつく言語では、それが動詞の項であるのか付加詞なのかが判別しにくい場合もある。しかし、アイヌ語の場合には何もマーカ―が付いていない形で現われていれば、それは動詞の項であるとみなせる。逆に助詞があれば、それは付加詞である。

このように、アイヌ語は動詞と名詞の関係がかなり明確であるので、文に現われた名詞が動詞の意味構造でどの位置に現われるかを端的に示すことができる項構造を用いれば、アイヌ語の動詞基本形の構造を簡潔に表示することが可能であると考えた。

5.5. 反使役化

語彙概念構造と項構造に関連して、本節では反使役化について述べる。

使役構造を持つ二項動詞(使役他動詞)と非対格自動詞の関係において、どちらが基本であるかには次の二通りの方向がある。

1. 使役化 (一項動詞から二項動詞へ)
2. 反使役化 (二項動詞から一項動詞へ)

これは形態的に一項動詞が無標で二項動詞が有標な場合は「使役化」、一方、二項動詞が無標で一項動詞が有標な場合を「反使役化」というように、形式的な関係のことも指すが、意味的な観点からどちらが基本であるかを分析する見方もある。

影山(1996)では自動詞としても他動詞としても用いられる英語の能格動詞は、他動詞の構造が基本であり、そこから反使役化という操作により自動詞の用法が生じるとしている。影山(1996)は *open* という動詞を例に挙げ、概念構造における反使役化を次のように説明している。

- a. The door was opened (by John).
- b. The door opened.
- c. *The door open by John.

[影山 1996 : 143]

受け身文の a では動作主(*by John*)の明示が可能であるのに対し、b ではそのような動作主は含意されず、実際動作主を加えた c は非文となるが、c の場合「動作主 *by John*

の排除はあくまで統語構造あるいはその直接の反映である項構造での制限にすぎない」(p. 143)とし、自動詞構造では使役主が統語上抑制されていると説明している。そして、自動詞用法においてドア自体が対象物であると同時に使役主であるという考え方を反使役化(anti-causativization)として定式化できるだろうとし、その概念構造を以下のよう示している。

語彙概念構造における反使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

[影山 1996 : 145]

そして、このように使役主と対象物が同定されると、統語上使役主は抑制され、BEの主語のみが明示的な項となると説明している。

このように使役主が統語上抑制されることを影山(1996)では使役主と対象物の同定により説明しているが、須賀(2000)は原因となる外的な働きかけの潜在化としてこれを説明している。

須賀(2000)は日本語の「立つ」「並ぶ」「向く」といった動詞には、行為を表す用法(「兄と妹が手をつないで立っている」と)と主体性を持たない物体の変化を表す用法(「棒が立っている」と)があるとし、行為を表す場合、その行為者は、使役的働きかけの主体であると同時に変化する対象でもあり、意味的に再帰構造をなしていると考えられると述べている。一方、それ自身では変化することのできない対象物の変化を表す場合は、外から動作・作用が加わった結果としての変化ということになるとし、その違いを以下のように示している(p. 122)。

須賀(2000)で示されている「立つ」

「立つ」(行為)

[x ACT] CAUSE [x BECOME [x <STATE>]]

「立つ」(物体の変化)

«[x ACT]» CAUSE [y BECOME [y <STATE>]]

須賀(2000)は、行為としての「立つ」は上位事象の主体と下位事象の対象が同一であり、一方、物体の変化の場合は、外的な働きかけの結果でしかないが、原因となる外的な働きかけが潜在化していると述べている。そして、他動詞「立てる」に対応する自動詞は主体性のない物体の変化を表す「立つ」に限定されており、「優勝旗を立てる」「校長先生を立てる」を例として挙げ、前者は正常な表現だが、後者は「校長先生」の主体性が無視されない限り、容認されない表現であるとしている。そして、「立つ」「立てる」の

構造を次のように示し、行為としての「立つ」はすでに[x ACT]が顕在化しているため、「立てる」でそれを顕在化することはできないとしている(pp. 122-123)。

須賀(2000)で示されている「立つ」「立てる」

「立つ」(物体の変化)

《[x ACT]》 CAUSE [y BECOME [y <STATE>]]

「立てる」(主体の行為・対象物の変化)

[x ACT] CAUSE [y BECOME [y <STATE>]]

そして、この場合、「-e-の機能は、潜在化している働きかけの主体を顕在化することであると言える」と述べている(p. 123)。

以上のように、使役構造を持つ二項動詞(使役他動詞)と非対格自動詞の関係において、意味的な観点から見て二項動詞(使役他動詞)が基本であるとみなすと、非対格自動詞の構造においては語彙概念構造上は存在するが、統語上現れない項があるということになる。この現象について、本節では使役主と対象物の同定により、使役主が統語上抑制されるという見方と、原因となる外的な働きかけの潜在化という見方があることを示したが、アイヌ語の分析においてどのような見方をすべきかは第六章で検討する。

第六章 一項動詞と対象目的語動詞の項構造

本章ではまず一項動詞に着目し、形態的な観点と意味的な観点から分類を行う。形態的な観点は、第四章で見た有対動詞か否かという点を軸とする。意味的な観点は第三章で示したどのような意味役割を項としてとるかを基準とする。そして、その二つの基準から分類した動詞の構造を項構造によって示す。また、対象目的語動詞の項構造もあわせて示す。

6.1. 有対動詞の基本的な項構造

本節では有対動詞にどのような意味的特徴があるのかをみる。

第四章でみたように形態的な観点から分類を行うと、アイヌ語沙流方言には6種類の有対動詞がある。表16に例と共に挙げる。

表 16. 沙流方言の有対動詞の分類と例

一項動詞			二項動詞			派生型
√-ke	rew-ke	折れ曲がる	√-V(単数形)	rew-e	～を折り曲げる	E
√-se	rew-ew-se		√-pa(複数形)	rew-pa		
√	tuy	切れる	√-V(単数形)	tuy-e	～を切る	C
			√-pa(複数形)	tuy-pa		
√	sat	乾く	√-ke	sat-ke	～を乾かす	C
√-n(単数形)	ra-n	下りる	√-n-ke(単数形)	ra-n-ke	～を下す	C
√-p(複数形)	ra-p		√-p-te(複数形)	ra-p-te		
√-ke	noy-ke	ねじ曲がる	√-V	noy-e	～をねじ曲げる	E
			√-ke	noy-ke		L
√-ke	kek-ke	折れる	√-ke	kek-ke	～を折る	L

有対の一項動詞と二項動詞の関係は使役交替になっている。そして、この一項動詞に着目すると、位置名詞である語根に、-(i)n が接尾して一項動詞の単数形、-(i)p が接尾して一項動詞の複数形が形成されるものは移動動詞であるが、それ以外の動詞が表す事態は、状態あるいは状態変化であり、主語の意志とは無関係に起こる出来事である。このことから、主語となる名詞は無生物であることが多いという特徴があり、対象空間主語動詞であるといえる。そして、その対となる二項動詞は、その対象を目的語とする対象目的語動詞である。

第五章でみたように「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にと

る動詞」が非対格自動詞であるから、アイヌ語の有対一項動詞は、基本的に非対格自動詞である。このことから、一項動詞と二項動詞の対である有対動詞の基本的な項構造を動作主を x 、対象を y とし、それぞれ次のようなものとして仮に想定しておく。

有対一項動詞(対象空間主語動詞)の項構造 : ($\langle y \rangle$)

有対二項動詞(対象目的語動詞)の項構造 : (x $\langle y \rangle$)

例えば、 tuy 「切れる」、 $tuye$ 「～を切る」の対であれば、二項動詞 $tuye$ は動作主 x と対象 y の二つを項としてとる。一方、対応する一項動詞 tuy は、対象 y のみが項として現われる。

この関係は使役交替とみなすことができ、対象 y の状態変化を動作主 x の働きかけが引き起こしていると捉えることができる。つまり、動作主 x は使役主であり、対象 y は被使役者とみなせる。

6.2. 無対一項動詞の項構造

無対一項動詞には、非能格自動詞と非対格自動詞の双方が含まれる。

6.2.1. 非能格動詞

非能格動詞は「意図的動作を行う動作主(Agent)を主語にとる動詞」である(影山 1993 p.43)。 $apkas$ 「歩く」、 $suke$ 「料理する」など本論文で動作主主語動詞と呼んでいるものは非能格動詞にあたる。この項構造は、次のような動作主 x のみが現れるものとして想定できる。

無対の非能格動詞(動作主主語動詞)の項構造 : (x $\langle \quad \rangle$)

6.2.2. 非対格動詞

有対の一項動詞は基本的に非対格動詞であることを述べたが、無対動詞の中にも非対格動詞と考えられるものがある。例えば、 nam 「冷たい」、 mom 「流れる」、 us 「消える」などである。これらは「意図を持たずに受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる動詞」(影山 1993 p.43)の非対格動詞であるので、その項構造は有対一項動詞(対象空間主語動詞)と同じ以下のようなものとして想定できる。

無対の非対格動詞(対象空間主語動詞)の項構造 : ($\langle y \rangle$)

6.3. 二種類の使役形

有対の一項動詞と二項動詞の関係は使役交替であることを述べた。つまり、二項動詞

は、一項動詞から形成された一種の使役形と捉えることができる。有対の二項動詞は語根に接尾辞-V あるいは-ke が接尾した形であるから、形態的な観点からは対象 y を被使役者とする使役形は接尾辞-V あるいは-ke で表されていると言える。

無対の非能格動詞(動作主主語動詞)では、動作主 x が主語であるが、これを被使役者とする使役形は使役接尾辞-RE で表される。apkas 「歩く」から使役形が形成される際には使役接尾辞-RE が接尾し、apkas-te 「～を歩かせる」となる。

無対の非対格動詞は、対象 y が主語であるが、接尾辞-V あるいは-ke で形成された対応する二項動詞がない。そのため、使役形は使役接尾辞-RE あるいは-ka で形成される。例えば、nam 「冷たい」から使役形「～を冷やす」が形成されると、nam-te あるいは nam-ka になる。

6.3.1. 動作主と対象を主語とする一項動詞

有対一項動詞(対象空間主語動詞)であれば、その使役形は接尾辞-V あるいは-ke によって形成され、無対の非能格動詞(動作主主語動詞)であれば、使役接尾辞-RE で形成される。そして、無対の非対格動詞(対象空間主語動詞)の場合、使役形は使役接尾辞-RE あるいは-ka によって形成される。しかし、一部の一項動詞は、有対動詞であっても、使役接尾辞-RE による使役形も形成することがある。本節ではこの点について検討する。

6.3.1.1. as 「立つ」

as 「立つ」は有対動詞であり、対応する二項動詞「～を立てる(単数形)」は as-i である。一項動詞は語根そのものであり、二項動詞は接尾辞-V を接尾させた形になっている((16)参照)。as-i という有対の使役形があるが、それと同時に as-te という使役形も確認される((17)参照)。

(16)nea itanki a=asi tek h_inē

その お椀 4.S=～を立てる さっと して

そのお椀を私はちょっと立てて

[国立大学法人千葉大学 2015c : 1586]

(17)ne suy par ta i=as-te wa

その 穴 口 ～に 4.O=立つ-使役 して

(主人は)その穴の入口に私を立てて

[田村 1985:26]

この二つの違いについて中川(1995)は次のように述べている。

無生物を立てる時には、通常アシ *asi* が使われる。人間を自分の意思で立たせるようなときにはアシテのほうが用いられる。ただし、アシテにもフミヒ *asite humihi* 「音を立てる」のような用法がある。

[中川 1995 : 7]

上記の記述から使役形が二種類確認されるのは、一項動詞 *as* が主語として動作主も対象もとることが可能であることによると推測される²⁶。第三章では動作主と対象のどちらをとることも可能な一項動詞があることを述べ、その例として *as* 「立つ」を挙げた。例を再掲する。

主語：動作主の例

- (1) *oro ta as=an w_a*
そこ に 立つ=4.S して
そこに私は立って

[国立大学法人千葉大学 2015 c:1935]

主語：対象の例

- (2) *ruwe ranko cikuni as ruwe*
太い カツラ 木 立つ 様子
太い桂の木が立っている様子

[国立大学法人千葉大学 2015 a:108]

as は有対動詞であるが、(1)では動作主を主語とし、(2)では対象を主語としている。(1)のように動作主が主語の場合は、有対動詞であっても非能格的な性質を持っており、使役形を形成する際には使役接尾辞-RE が接尾すると考えられる。それに対し、(2)は対象を主語とし、非対格的な性質を持っており、使役形を形成する際には接尾辞-V が接尾している。ただし、中川(1995)の指摘にもあるように、この区分は絶対的なものではなく、音のように、それ自体が意志を持つと考えられないものが目的語となる場合にも使役接尾辞-RE が使われることがある。

第五章ですでに述べたように、須賀(2000)は、日本語の「立つ」「並ぶ」「向く」といった動詞には、「兄と妹が手をつないで立っている」のような行為を表す用法と「棒が立っている」のような主体性を持たない物体の変化を表す用法とがあるとし、行為を表す場合、その行為者は、使役的働きかけの主体であると同時に変化する対象でもあり、

²⁶ 中川(1995)で指摘されている *humihi aste* のような例は、*humihi* 「～の音」の所属先として、意志性を持つものの存在が想定される。*humihi* 自体は抽象的なものを指すが、そのために *asi* ではなく、*aste* が使われる可能性も考えられる。

意味的に再帰構造であると考えられると述べている。一方、それ自身では変化することのできない対象物の変化を表す場合は、外から動作・作用が加わった結果としての変化ということになるとしている(p. 122)。

須賀(2000)で示されている「立つ」

「立つ」(行為)

[x ACT] CAUSE [x BECOME [x <STATE>]]

「立つ」(物体の変化)

《[x ACT]》 CAUSE [y BECOME [y <STATE>]]

須賀(2000)は、行為としての「立つ」は上位事象の主体と下位事象の対象が同一であり、一方、物体の変化の場合は、外的な働きかけの結果でしかないが、原因となる外的な働きかけが潜在化していると述べている。そして、行為としての「立つ」はすでに[x ACT]が顕在化しているため、「立てる」でそれを顕在化することはできないとしている。須賀(2000)で示されている「立つ」「立てる」の構造を再掲する(pp. 122-123)。

須賀(2000)で示されている「立つ」「立てる」

「立つ」(物体の変化)

《[x ACT]》 CAUSE [y BECOME [y <STATE>]]

「立てる」(主体の行為・対象物の変化)

[x ACT] CAUSE [y BECOME [y <STATE>]]

そして、この場合、「-e-の機能は、潜在化している働きかけの主体を顕在化することであると言える」と述べている(p. 123)。

この現象はアイヌ語の *as* と平行的に捉えることができる。上記の「立つ」(行為)の構造は、動作主主語動詞の *as* と一致し、「立つ」(物体の変化)の構造は、対象空間主語動詞の *as* の構造と一致する。また、「立てる」(主体の行為・対象物の変化)は、有対二項動詞 *asi* の構造と一致すると考えられ、対象空間主語動詞において潜在化している働きかけの主体が-Vにより顕在化している。そして、行為としての *as* はすでに[x ACT]が顕在化しているため、接尾辞-Vによって、それを顕在化することはできず、使役形は使役接尾辞-REが出現すると考えられる。

田村(1996)では、*as* の意味について「①立つ、立ち止まる、止まる」と記述しており、次のような例も挙げている(p. 26)。

(18)ku=hoyupu wa nisap k=as ka eaykap

1.S=走る して 急に 1.S=止まる も ~出来ない

私は走って来て急に立ち止まることもできなかった。

[田村 1996 : 26]

この「立ち止まる」という意味の as の使役形としても aste という形が確認される。

(19)umma as-te

馬 立ち止まる - 使役

馬を止まらせろ。

[神保・金澤 1898 : 163]

(18)の as 「立ち止まる」は行為を表わしているため、その使役形は(19)のように使役接尾辞-RE が接尾した形になる。

as は動作主を主語とする行為を表わす場合と、対象を主語とする物体の変化を表わす場合があり、使役形を形成する際、前者は-RE、後者は-V が接尾する傾向がある。

6.3.1.2. $\sqrt{-n}$ と $\sqrt{-p}$

位置名詞である語根に-(i)n が接尾して一項動詞の単数形、-(i)p が接尾して一項動詞の複数形が形成されるものは、一項動詞の単数形に-ke が接尾して二項動詞の単数形、一項動詞の複数形に-te が接尾して二項動詞の複数形となり、一項動詞と二項動詞の対になっている²⁷。他の有対動詞が状態あるいは状態変化を意味するのに、これらは移動を意味するという違いがある。

第三章で見たように柳下(1989)ではこれに含まれる動詞(ran「くだる」san「くだる」ahun「はいる」)について、主語に生物/無生物がくると記述している。例えば、ranには次のような例がある。

(20)oro peka karkarse wa ran pe ne hike

そこ を 転がる して 下りる もの ~である だが

(おにぎりは)そこを転がり下りたものであるが、

[田村 1986:22]

²⁷ この他に位置名詞である語根に-(i)n が接尾して一項動詞の単数形、-(i)p が接尾して一項動詞の複数形が形成されるものは、rikin(単数形)、rikip(複数形)「上がる」という語があり、この語のみ、単数形の二項動詞は-ka で派生する。二項動詞「~を上げる」の単数形はrikin-ka であり、複数形はrikip-te となる。

(21) pet or_ ta ran=an h_ine

川 ~のところに 下りる=4.S して

川に私は下りて

[国立大学法人千葉大学 2015c : 1991]

(20)では主語のおにぎり勝手に転がって行ってしまったという状況を表わしている。よって、この主語は対象であり、項構造の y の位置を占めると考えられる。一方、(21)では主語の私は自らの意志で川に下りるという動作を行っている。この場合は主語は動作主であり、動作主主語動詞の項構造の x の位置を占める。

as「立つ」の場合と平行的に考えれば、(20)の場合は対象が主語であるので、使役形は接尾辞-ke で形成され、(21)の場合は動作主が主語であるので、使役接尾辞-RE が接尾することが予測される。実際に ranke は確認されるが、rante は単独では確認できない。使役接尾辞-RE の接尾が確認されるのは複数形の場合である。複数形 rap に対しては rapke という語は確認されず、rapte になる。

(22) i=sam ta nea sikehe ranke ruwe ne.

4.O=そば ~に その 荷物 ~を下す 様子 ~である

(女の人)は私のそばにその荷物を下ろしたのだ。

[田村 1985 : 38]

(23) petru orke a=i=0-rap-te

川脇 ~のところに 4.S=4.O=~に - 下りる(複数) - 使役

川沿いに私たちは下りさせられた

[国立大学法人千葉大学 2015a : 546]

単複の違いによって、なぜ接尾辞が異なるのかは要因は明らかになっていないが、位置名詞である語根に、-(i)n が接尾して一項動詞の単数形、-(i)p が接尾して一項動詞の複数形が形成されるものに二種類の接尾辞が接尾する要因は、as 同様に主語として動作主も対象もとることが可能であることにあると考えられる。須賀(2000)を参考に、この構造を示すと以下のようなになる。

ran 「下りる(単数)」 rap 「下りる(複数)」

ran・rap(物体の変化)

《[x ACT]》 CAUSE [y MOVE]

ran・rap(主体の行為・対象物の変化)

[x ACT] CAUSE [x MOVE]

ranke 「～を下す(単数)」 rapte 「～を下す(複数)」

[x ACT] CAUSE [y MOVE]

語彙的使役を表す・ke は単数形に接尾し、分析的使役である・RE は複数形に接尾する。繰り返しになるが、単複の違いによって、なぜ接尾辞が異なるのかは要因が明らかになっていない。しかし、as 同様に動作主を主語とする移動行為を表わす場合と、対象を主語とする物体の位置変化を表わす場合があり、二種類の使役接尾辞が接尾する。

6.3.2.意味的特徴

本節では以下の動詞に二種類の使役形が確認されることを述べた。

as(単数)		立つ
ran(単数)	rap(複数)	(高所から)下りる
san(単数)	sap(複数)	(山の方から)下りる
ahun(単数)	ahup(複数)	入る
asin(単数)	asip(複数)	出る
yan(単数)	yap(複数)	上陸する

位置名詞である語根に、-(i)n が接尾して一項動詞の単数形、-(i)p が接尾して一項動詞の複数形が形成されるものは、移動を意味すると述べた。as「立つ」は主語の位置変化を表すと考えることができ、移動動詞も主語の位置変化を意味するので、その点で as と共通している。

主語として動作主も対象もとることが可能な動詞は、主語の位置変化を表す動詞であるとみなせる。

6.4. 使役化と反使役化

有対動詞は、二項動詞では動作主と対象が出現するのに対し、一項動詞では対象のみが現れ、動作主が出現しない点に前者と後者の違いがある。第五章でも述べたように、どちらが基本であるかには次の二通りの方向がある。

1. 使役化 (一項動詞から二項動詞へ)
2. 反使役化 (二項動詞から一項動詞へ)

アイヌ語の有対動詞は一項動詞と二項動詞のどちらが基本であるかを考える際に、まず派生の方向が問題になる。派生の方向は E タイプ、C タイプ、L タイプがある(第四章参照)。第四章でみたように、L タイプは E タイプから変化した可能性があるため、

ここでは E タイプと C タイプを検討する。

E タイプは、mak-ke 「開く」、mak-a 「～を開ける」のように、一項動詞も二項動詞も語根に接尾辞が接尾した形態になっており、派生の方向が不明である。

C タイプには tuy 「切れる」、tuy-e 「～を切る」や sat 「乾く」、sat-ke などがある。これら是一项動詞に接尾辞が接尾することにより、二項動詞になっており、一項動詞から二項動詞が派生しているため、一項動詞の形態の方が派生の方向からみれば基本的であると言える。

そこで、この C タイプの形態的特徴を重視し、一項動詞が基本であり、そこから使役の概念が加わったと仮定すると、tuy 「切れる」、tuy-e 「～を切る」のような語の語彙概念構造は次のようになる。

一項動詞を基本と考えた場合の C タイプの語彙概念構造

一項動詞	√	[y BECOME [y BE AT-z]]
二項動詞	√-V	[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

一項動詞が基本であると捉えると、二項動詞是一项動詞の構造に x CONTROL が加わったものということになる。形態と照らし合わせて考えれば、-V が付加されることにより、CONTROL が加わり、動作主 x が付加されたということになる。

しかし、前節でみたように有対の一項動詞であっても、行為を表わす as 「立つ」のような非能格的な性格をもつ動詞もある。これらは対象ではなく、動作主が主語となる。その場合、-V が形態上なくても x CONTROL が現れており、上記の語彙概念構造では説明できない。

そこで、本論文では意味的にみると二項動詞の構造が基本であり、非対格的な一項動詞は、その二項動詞のうち一項が統語上現れないことによって生じると捉えることにする。語彙概念構造で記すと次のようになる。なお、語彙概念構造上は存在するが、統語上現れない部分は須賀(2000)同様に《 》で示した。

二項動詞を基本と考えた場合の C タイプの語彙概念構造

一項動詞	√	非対格的	[《x CONTROL》 [y BECOME [y BE AT-z]]]
	√	非能格的	[x CONTROL [x=y BECOME [x=y BE AT-z]]]
二項動詞	√-V		[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

そして、これは E タイプや L タイプにも適応できるものである。つまり、アイヌ語の有対動詞はいずれも意味的には二項動詞の構造を基本としており、動作主 x が自らを対象 y とする再帰的な場合には、対象 y が統語上現れず、非能格的な一項動詞となる。そして、動作主 x が統語上現れない場合は、非対格的な一項動詞となる。

以下では統語上にあらわれる名詞句の数ではなく、意味に関して項数に言及する際は〈X 項〉のように〈 〉を用いて表記する。例えば、「非対格的な一項動詞は〈二項動詞〉の構造を基本としている」のように表記する。

6.5. 項構造における項の表示

語彙概念構造上は存在するが、統語上現れない項の存在を項構造に反映させるために、本論文では以下では次のような表示法を用いる²⁸。概念構造においては存在するが、統語上は現れない項には下線を引いて示す。

一項と二項の有対動詞の項構造

有対一項動詞	非対格的	(<u>x</u> < y >)
	非能格的	(x < <u>y</u> >) x=y
有対二項動詞		(x < y >)

本論文では用例に沿ってその項構造を示す際には、x や y の位置に用例中の項である具体的な名詞を示す。項である要素が接頭辞や人称接辞である場合はそれを示す。また、統語上に具体的な名詞となって現れない要素については記号(x など)で書き、下線を引く。

例えば、上記の表示を用いて、(16)asi 「～を立てる」、(1)(2)の as 「立つ」を表示すると以下ようになる。統語構造との対応関係を合わせて示す。

(16)asi 「～を立てる」の項構造	主語：「私」	目的語：nea itanki 「そのお椀」
	(a= < nea itanki >)	
	私	そのお椀
	↓	↓
(16)の統語構造	S	O

主語の「私」は動作主として x の位置に入り、目的語の nea itanki 「そのお椀」は対象として y の位置に入る。

²⁸ 影山(1993)などの表示とは異なる。他の項と同定されて統語上現れない項があるということがアイヌ語動詞の構造を示すには重要な点となるため、本稿では項の同定が明確になるようにこのような表示方法を導入した。

主語：空間・場所の例

(4) casi upsor maknatara

館 ~の内部 明るい

館の中が明るい。

[金田一 1931:471]

本論文では無対の対象空間主語動詞の項構造を次のように新たに設定する。

無対の対象空間主語動詞の項構造：(〈y []〉) または (〈 [z] 〉)

y の位置には対象が入り、[]の中の z の位置には空間・場所が入る。なお、この表示の仕方については第八章で再検討する。

場所を内項とする分析は、日本語について論じた外崎(2005)において示されている。外崎(2005)は人間言語はどの言語をみても述語の項の数は最大三つに限られているとし、x、y、z の三つが現れる動詞の項構造を示している。外崎(2005)で示されている「達成」動詞の語彙概念構造およびその項構造を以下に引用する。「太郎が机の上に本を置いた」のような文がこの構造に該当する。

外崎(2005)で示されている「達成」動詞の語彙概念構造およびその項構造

a. LCS [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]

↓

↓

連結規則

b. 項構造 x < y AT-z >

[外崎 2005:26]

本論文においても空間・場所 z を内項の位置に現われるものとして扱う。

6.7. 対象目的語動詞の項構造

6.1.では、有対の二項動詞の項構造として、動作主 x と対象 y の二つの項を持つ構造を示したが、アイヌ語の二項動詞は動作主と対象をとるものだけでなく、対象 y と空間・場所 z の二つをとるものがある。そこで、それを踏まえて有対二項動詞(対象目的語動詞)の項構造も以下のように設定し直す。

対象目的語動詞の項構造：(x 〈y []〉)

つまり、動作主 x と対象 y の二つが項として存在し、空間・場所の z の位置は空欄である。

上の構造は有対かどうかに関わらず、対象目的語動詞であれば適応できるものである。例えば、ca「～を切りとる」は対応する一項動詞は持たないが、動作主と対象の二つの名詞句をとる動詞であり、上記の項構造で表される。

6.8.小括

一項動詞には非能格性を有する動詞と非対格性を有する動詞、また、その両方を有する動詞がある。有対動詞は基本的に非対格性を持つと言えるが、無対動詞は非能格性を持つ動詞と非対格性を持つ動詞が含まれ、それぞれ以下のような性質を持つ(表 17)²⁹。

表 17. 一項動詞の分類と特徴

非能格性を有する動詞 非能格性と非対格性 非対格性を有する動詞 をあわせもつ動詞				
対の有無	無対	有対	有対	無対
使役形	-RE	-RE,-ka,-V,-ke	-V,-ke	-RE,-ka,
主語の意味役割	動作主	動作主または対象	対象または空間場所	
意味	動作	移動・位置変化・状態	状態・状態変化	
項構造	(x < [])	(<u>x</u> < y []) または (x < (<u>y</u> []))x=y	(<u>x</u> < y [])	(< y []) または (< [z])

²⁹有対の一項動詞の中にも空間・場所を項としてとるものが存在する可能性もあるが、今回の分析ではそのようなケースについては取り上げなかった。

第七章 三項動詞と空間目的語動詞の項構造

本章では空間目的語動詞の意味構造に関する先行研究の指摘について触れた上で、三項動詞と空間目的語動詞の項構造を示し、空間目的語動詞は非対格動詞的な性質を持ち得ること、その項構造は複数あることを述べる。

7.1. 空間目的語動詞の意味構造に関する先行研究での指摘

空間目的語動詞に該当するものの意味構造については中川(2003)、佐藤(2005)に言及がある。

7.1.1. 中川(2003)

中川(2003)では「投げる」と「刺す」という動詞の構造をアイヌ語に限らず、普遍的にみてどう捉えることができるかを提示している。深層格では〈道具〉だと考えられるものが、日本語などでは表層では対格(目的語)になることがある。こういった「投げる」や「刺す」といった動詞を「道具目的語動詞」と呼び、これらは影山(1996)で典型的な他動詞に与えられる[CONTROL [BECOME [y BE AT-z]]という構造は持っておらず、[x ACT (ON z)]という、接触・打撃動詞に類する構造を持っていることが想定できるとしている。そして、影山・由本(1997)で「道具動詞」の概念構造の表示に用いているBY-MEANS-OFという述語を使って「投げる」と「刺す」の一般的な概念構造を以下のように記述している。

中川(2003)で示されている「投げる」の概念構造

[x ACT(ON z)[BY-MEANS-OF y]]

中川(2003)で示されている「刺す」の概念構造

[x ACT ON z [BY-MEANS-OF y]]

「投げる」は日本語では y が内項に投影され、表層では「を」格をとり、アイヌ語などでは動詞自体が自動詞であり、y は道具格で表示されるとしている。そして、「刺す」は「z が内項に投影された場合には y が道具格として、y が内項に投影された場合には、z が場所格(あるいは方向格)として実現するということになる」と述べている。

中川(2003)では概念構造にある変項の表層への現れ方が複数あることを示しているが、本論文ではこの問題を中心的に扱い、アイヌ語の空間目的語動詞についてより詳しくみていく。

7.1.2. 佐藤(2005)

佐藤(2005)は o「～にある」「～を～に入れる」の構造について重要な指摘を行っている。o は基本的には次のような格の枠組みを持つとしている。

佐藤(2005)で示されている o の「格の枠組み」

+ [_____ O L(A)]

佐藤(2005)は O(対象)と L(場所)は必ず表示されなければならないが、A(動作主)は義務的ではなく、現れないこともあり、O と L の「文法関係」が場合によって二つ可能であることが重要だと述べている。その文法関係とは O が主語、L が目的語である「O が L にある」という構造と、O が目的語、L が主語である「L が O を持つ」という構造である。そして、アイヌ語の o は所有と存在の二つの構文を許す動詞である可能性があり、もしそうだとすると他のアイヌ語の「存在」を意味する動詞にも同様の機能がある可能性があることを指摘している。そして、もう一例 us「～に生える」を挙げ、us は ker k-us「靴を私がはく」という用法もあり、「O が「主語」の場合は kina us i「スゲが群生しているところ」(知里 1956 : 226)のような解釈になり、L が主語の場合には、「私が靴を持つ(身に付ける)」のような解釈となる(ただし、両方の us を同一の形式と考える限りにおいてではあるが)」と述べている。o や us のような動詞を佐藤(2005)では、「他動詞的存在動詞」と仮に呼んでいる。また、O(対象)と L(場所) のどちらも主語になることが可能な動詞は他動詞的存在動詞に限らない可能性があり、場所を目的語にとる kus「～を通る」なども機能的な共通点があることを示唆している。そして、「アイヌ語のこの種の動詞には同じ事象をどの視点から述べるかによって二種の構文が許される、ということになるであろう」としている(pp.172 - 173)。

佐藤(2005)は他動詞的存在動詞が格の枠組みにおいて対象と場所、動作主の三つが想定できることを指摘している点で重要である。

佐藤(2005)で取り上げられている他動詞的存在動詞や場所を目的語にとる kus「～を通る」は本論文での空間目的語動詞に該当する。筆者は本論文において空間目的語動詞は佐藤(2005)の指摘にあるように、対象と場所、動作主の三つの存在が前提としてあることを述べる。そして、佐藤(2005)においては、O(対象)と L(場所)は必ず表示されなければならないが、A(動作主)は義務的ではないとされていたが、本論文で扱う空間目的語動詞の項のあらわれ方には別のパターンもあることを項構造を用いて提示する。

7.2. 二項動詞と三項動詞の有対動詞

本節では二項動詞と三項動詞の対になっている動詞の項構造について検討する。

7.2.1. 三項動詞の項構造

基本形の三項動詞は動作主、対象、空間・場所の三つの名詞句を項としてとる。三項動詞の項構造は以下のようなになる。

三項動詞の項構造：(x 〈 y [z] 〉)

例として usi 「～に～をつける」を以下に挙げる((24)参照)。

(24)a=sapaha ka wakka a=usi wa a=raraypa.
4.S=頭 も 水 4.S=～を～につける して 4.S=～を撫でる
私は頭にも水をつけて撫でつけた。

[田村 1985:8]

上記の例の項構造および統語構造は次のようになる。

(24)の項構造	(a=	〈wakka	[a=sapaha]	〉)
		私	水	私の頭		
		↓	↓	↓		
(24)の統語構造	S		O		O	

主語の動作主「私」は x の位置に入り、wakka「水」は y の位置に入る。そして、a=sapaha「私の頭」は空間・場所として z の位置に入る。目的語は二つ現れている。

7.2.2. 三項動詞と対になる二項動詞の項構造

第四章で見たように、二項動詞と三項動詞にも対になっている動詞がみられる。二項動詞 us 「～につく」、un 「～にはまる」、kot 「～に結び付く」には対応する三項動詞がある。また、o 「～に入る」は同形で三項動詞として機能する場合がある。

7.2.2.1. us

us 「～につく」の項構造を設定し、統語構造と合わせて示し、(24)の us-i 「～を～に付ける」と比較する。

(25)toytoy us kam
土 ～につく 肉
土がついた肉

[国立大学法人千葉大学 2015b: 1524]

(25)の項構造	(<u>x</u>	〈toytoy	[kam]	〉)
			土	肉	
		↓	↓	↓	
(25)の統語構造		φ	S	O	

対象である「土」は y の位置に入り、空間・場所である「肉」は z に入る³⁰。(24)と比較すると、動作主の x が統語上現れているかどうかの違いがある。(25)では動作主 x は統語上は出現しない。(24)と(25)の関係は、一項動詞と二項動詞の対同様に使役交替であるとみなせる。空間・場所の z が表れているか否かという点が、一項動詞と二項動詞の対とは異なる点である。

us は対象と空間・場所をとる際に、「～につく」という意味の他に「～に生える」という意味になる場合もある((26)参照)。

(26) husko a=kopunpa	p	kunne kumi	<u>us</u>
先	4.S=	～に差し出す	もの 黒い カビ <u>～に生える</u>
先に私が(夫に)よそったものに黒カビが生えた。			

[Nakagawa & Bugaeva (2012)K7807153KY]

(26)は kunne kumi 「黒カビ」が対象、husko a=kopunpa p 「先に私がよそったもの」が空間・場所である。(25)の「土が肉につく」という意味の場合、元から toytoy 「土」も kam 「肉」も存在しており、ある場所から toytoy 「土」が kam 「肉」へと移動したことを表す。それに対し、(26)のような「～に生える」という意味の場合、対象の kunne kumi 「黒カビ」は元々は存在していなかった物体である。その点が「～につく」という意味の場合と異なっている。影山(1996)は出現・発生を表す動詞の語彙概念構造と、対象変化を表す動詞の語彙概念構造を次のように書き分けている。

出現・発生 [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]

変化	y が	z に(ある)	
(変化	ニキビが	おでこに)	= おでこにニキビができる
(変化	幽霊が	教室に)	= 教室に幽霊が現れる

³⁰ o や us のような動詞を佐藤(2005)では、「他動詞的存在動詞」と仮に呼び、O(対象)と L(場所) のどちらとも主語になることが可能であるとしている。この指摘は重要だが、本論文の分析では対象と場所の二つが項となる動詞について、存在を表す点を重視して対象を主語、場所を目的語として分析を進める。

対象変化 [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]]

y が 変化 y が z に
 (魚が 変化 魚が 腐った状態に) = 魚が腐る

[影山 1996 : 110]

語彙概念構造では、対象変化の場合は BECOME の前に y があるのに対し、出現・発生の場合は BECOME の前に y が存在しない。元々は存在していなかった物体の出現・発生を BECOME の前に y を置かないことによって表示している。影山(1996)は対象変化の「BECOME の前に置かれた y は、BE の主語の y と同じ物体であるが、意味的にはそれが状態変化を被る前の姿を表している」と説明している(p. 111)。このように、語彙概念構造を用いれば、「～につく」と「～に生える」の違いは表示することは可能であるが、ここでは同じ項構造で示されるものとして扱う。

なお、第五章で語彙概念構造は存在するが、統語上抑制される項に関して、使役主と対象物の同定により、使役主が統語上抑制されるという捉え方(影山(1996))と、原因となる外的な働きかけの潜在化というの捉え方(須賀(2000))があることを示した。アイヌ語の分析において、このどちらの捉え方がより有効であるかについては、us を例に考えるならば、「土が肉につく」のような「～につく」という意味では外的な要因が想定できるので、外的な働きかけの潜在化という捉え方が有効と考えられる。しかし、「～に生える」という意味においては、外的な要因というよりは、むしろ対象自身の力によって起こる現象と捉えることもでき、対象自体が使役主であるという捉え方も成立し得る。よって、このどちらの見方がアイヌ語の分析において有効であるという捉え方はせず、本論文では統語上は現れない項があるという点に着目して分析を進める。

第三章で述べたが、us は対象が主語となるだけでなく、動作主が主語となることもある。例を再掲し、項構造および統語構造を示す。

(8) e=sermaka a=us kus ne na.
 2.S=～の背後 4.S=～につく ～するつもり ～である よ
 あなたを私は守りますよ。

[国立大学法人千葉大学 2015a: 367]

(8)の項構造 (a= < y [e=sermaka] >) x=y
 私 あなたの背中
 ↓ ↓ ↓
 (8)の統語構造 S φ O

主語の動作主「私」は x に入り、e=sermaka 「あなたの背中」は空間・場所であり、z

の位置に入る。

(25)と(8)は同じ *us* という動詞でありながら、ときには項の一つが *x* の位置に入り主語となり、またある場合は *y* の位置に入り主語となっている。このような現象は、空間・場所の *z* が表れるかどうかを別にすれば、第六章で見た *as* 「立つ」や *ran* 「下りる」と共通している。第六章でみた一項動詞の場合には、主語として動作主も対象もとることが可能な動詞は、主語の位置変化を表す動詞であると述べた。そこで、二項動詞 *us* の場合を見ると、二項動詞 *us* も同様に位置変化を表しているとみなせることがわかる。つまり、(25)では *toytoy* 「土」が *kam* 「肉」についていない状態からついた状態へと変化したこと、つまり、*toytoy* 「土」が *kam* 「肉」へと移動した状態を表している。(8)も同様に、主語の「私」が *e=sermaka* 「あなたの背中」へと移動することを表している。また、対である三項動詞 *us-i* と比較すると、(24)では対象の *wakka* 「水」を、空間・場所の *a=sapaha* 「私の頭」へと動作主の「私」が移動させているとみることができる。これをより一般化すると、次のような流れとして捉えられる(図4)。

図4. *us* と *usi*

I. 動作主 *x* の働きかけ

↓

II. 対象 *y* の移動

↓

III. (対象 *y* が)空間・場所 *z* に存在・発生

三項動詞の *usi* 「～を～につける」は、図4のI～IIIまでの全てを統語上に反映しており、*x*、*y*、*z* の三つの名詞句が出現する。それに対し、二項動詞の *us* 「～につく」は、対象と空間・場所の二つの項をとる場合、Iで示される働きかけをもたらず動作主が統語上現れない。また、動作主と空間・場所の二つの項を取る場合は、動作主 *x* と対象 *y* が同定され、IIで示される移動する対象 *y* が統語上現れない。

第六章で見た *as* 「立つ」や *ran* 「下りる」のような主語として動作主も対象もとることが可能な一項動詞の場合は、接尾辞-V が接尾する形と使役接尾辞-RE が接尾する形の二つの使役形が確認できる。*us* 「～につく」もこれと平行的であり、三項動詞 *us-i* は接尾辞-V が接尾した形であるが、この他に *us-te* という形も確認できる((27)参照³¹)。

(27) *kamuy-si-sermak-us-te=an hi*

カムイ - 自分-背後 - ～につく - 使役=4.S

カムイを私の背後につかせること(カムイに私の背後を守ってもらうこと)

[アイヌ民族博物館 2015b : 120]

³¹ *si*-二項動詞-RE で「～してもらう」という意味になる。

(27)は被使役者は kamuy 「カムイ」である。カムイを意志性のあるものと捉えると、二項動詞 us においては動作主として働くと考えられる。

一項動詞 as 「立つ」の場合、動作主が主語の場合は、有対動詞であっても非能格的な性質を持っており、使役形を形成する際には使役接尾辞-RE が接尾すると考えられる。それに対し、対象を主語とする場合は非対格的な性質を持っており、使役形を形成する際には接尾辞-V が接尾している。ただし、中川(1995)の指摘にもあるように、この区分は絶対的なものではないと述べた。これと同様に us の使役形に関しても、空間・場所以外の項が動作主か対象かという違いが、必ずしも使役形に反映しているとは言い切れないが、二種類の使役形があることは共通している。

また、us には「～を履く」という意味もある。第三章で挙げた例を再掲する。

(7) tapan cori e=us wa
 この 草履 2.S=～をつける して
 この草履をあなたが履いて

[国立大学法人千葉大学 2015b: 1308]

これは主語が動作主、目的語が対象であり、項構造および統語構造を示すと次のようになる。

(7)の項構造	(e=	⟨	cori	[z	⟩)	x=z
		あなた		草履					
		↓		↓		↓			
(7)の統語構造		S		O		φ			

動作主「あなた」は x の位置に入り、対象の cori 「草履」は y の位置に入る。空間・場所の z は動作主 x と同定され、統語上出現しない。

第六章では対象目的語動詞の項構造を以下のように示した。

対象目的語動詞の項構造：(x ⟨y []⟩)

対象目的語動詞 tuye 「～を切る」を例として以下に挙げる。

(28) tus a=tuye kusu ne na.
 綱 4.S=～を切る ~するつもり ~である よ
 私は綱を切るよ。

[国立大学法人千葉大学 2015b : 1318]

(28)の項構造	(a=	〈	tus	[])
	私		綱		
	↓		↓		
(28)の統語構造	S		O		

us「～を履く」も動作主と対象をとる点は上の対象目的語動詞と共通しているが、空間・場所 z の欄に違いが現れる。

「～につく」という意味では、図 4 に示したように us は「動作主 x の働きかけ」が最初であり、「対象 y の移動」、そして「(対象 y が)z に存在」という流れの事態を示している。us「～を履く」も「～につく」同様に、この流れの事態を表すものである。(7) は、動作主「あなた」が、対象の cori「草履」を「自分自身の身体」という空間・場所に移動させることを表している。つまり、統語上には現われていないが、空間・場所が「自分自身の身体」という再帰的な意味で含意されているのである。本論文では、この us「～を履く」も空間目的語動詞に関連するものとして扱う。tuye「～を切る」のような対象目的語動詞と異なる点、つまり、空間・場所が再帰的な意味として含意されている構造は本論文では次のように示される。空間・場所の z は統語上現れていないが、x と同定されるので、下線とともに表示される。tuye「～を切る」のような対象目的語動詞は、この含意がないので z は単なる空欄である。

「主語：動作主、目的語：対象、再帰的な意味として空間・場所が含意される動詞」
 の項構造： (x 〈y [z]) x=z

以上のことから二項動詞 us は次の項構造を持っていると考えられる。

us「～につく、～に生える」主語：対象 目的語：空間・場所
 (x 〈 y [z] 〉)

us「～につく」主語：動作主 目的語：空間・場所
 (x 〈 y [z] 〉) x=y

us「～を履く」主語：動作主 目的語：対象
 (x 〈 y [z] 〉) x=z

7.2.2.2. un

「～にはまる」という意味の un という動詞がある。第四章でも述べたが、これは有対動詞であり、三項動詞 unu「～に～をはめる」と対になっている。二項動詞が un が語

根であり、それに接尾辞-V が接尾した形態が三項動詞 unu である。

まず、三項動詞の例と項構造、統語構造を示す。

(29)ne kem puy nuyto a=unu hine
 その 針 穴 糸 4.S=～を～にはめる ～して
 その針穴に糸を私は通して

[アイヌ民族博物館 2015b : 92]

(29)の項構造 (a= <nuyto [ne kem puy])

私 糸 その針穴
 ↓ ↓ ↓

(29)の統語構造 S O O

(29)では、主語の「私」が動作主であり、x の位置に入る。nuyto「糸」は対象であり、y の位置に入る。ne kem puy「その針穴」は空間・場所であり、z の位置に入る。これは次のような流れを意味する(図 5)。

図 5. un と unu

- I. 動作主 x の働きかけ
 ↓
- II. 対象 y の移動
 ↓
- III. (対象 y が)空間・場所 z に存在

つまり、(29)では動作主の「私」が対象の nuyto「糸」を ne kem puy「その針穴」へと移動させ、nuyto「糸」が ne kem puy「その針穴」に存在する状態になったことを意味しているわけである。

二項動詞 un と三項動詞 unu の関係は使役交替になっており、二項動詞 un は対象と空間・場所をとる例が確認できる。その例と項構造、統語構造を示す。

(30)puta un cip ne kusu
 蓋 ～にはまる 舟 ～である ので
 蓋がはまった舟であるので

[中川 2001a:111]

(30)の項構造 (\underline{x} 〈puta [cip]〉)

蓋 舟

↓ ↓ ↓

(30)の統語構造 ϕ S O

(30)では、puta「蓋」が対象であり、y の位置に入る。cip「舟」は空間・場所であり、z の位置に入る。動作主は統語上現れていない。

以上のことから二項動詞 un は次の項構造を持っていると考えられる。

un 「～にはまる」主語：対象 目的語：空間・場所

(\underline{x} 〈y [z]〉)

7.2.2.3. kot

「～に結び付く」という意味の kot という二項動詞があり、これは三項動詞 kote 「～に～を結び付ける」と対になっている。二項動詞 kot が語根であり、それに接尾辞-V が接尾した形態が三項動詞 kote である。

まず、三項動詞の例と項構造、統語構造を示す。

(31) newaan hemanta a=ninpaninpa. poro p ne kusu tus

その 化け物 4.S=～を引きずる 大きい もの ～である ので 綱

a=kote wa

4.S=～に～を結び付ける して

その化け物を私は引きずった。大きいものなので(化け物に)綱を結び付けて

[国立大学法人千葉大学 2015a:225]

(31)の項構造 (a= 〈tus [newaan hemanta]〉)

私 綱 その化け物

↓ ↓ ↓

(31)の統語構造 S O O

(31)では、主語の「私」が動作主であり、x の位置に入る。tus「綱」は対象であり、y の位置に入る。newaan hemanta「その化け物」は空間・場所であり、z の位置に入る。これは次のような流れを意味する(図 6)。

図 6. kot と kote

- I. 動作主 x の働きかけ
↓
- II. 対象 y の移動
↓
- III. (対象 y が)空間・場所 z に存在

つまり、(31)では動作主の「私」が対象の tus「綱」を newaan hemanta「その化け物」へと移動させ、tus「綱」が newaan hemanta「その化け物」に存在する状態になったことを意味している。

二項動詞 kot と三項動詞 kote の関係は使役交替になっており、二項動詞 kot は対象と空間・場所をとる例が確認できる。その例と項構造、統語構造を示す。

(32)matne kuwa kot saranpe rerakar hine
 女 墓標 ～に結び付く 絹の布 風に当たる して
 女の墓標に結び付いていた絹の布は風に当たって

[久保寺 1977 : 381]

(32)の項構造	(<u>x</u>	⟨saranpe	[matne kuwa]⟩)
			絹の布	女の墓標	
		↓	↓	↓	
(32)の統語構造	φ		S		O

(32)では saranpe「絹の布」は対象であり、y の位置に入る。matne kuwa「女の墓標」は空間・場所であり、z の位置に入る。kot は動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z に存在する事態を表すが、動作主 x は統語上現れていない。

以上のことから二項動詞 kot は次の項構造を持っていると考えられる。

kot 「～に結び付く」主語：対象 目的語：空間・場所
 (x ⟨y [z]⟩)

7.2.2.4. o

「～に入る」という意味の o という動詞がある。この動詞は同形で三項動詞としても機能する。o の項の意味役割は次の四種類に分けられる。

1. 主語：動作主 目的語：対象
2. 主語：動作主 目的語：空間・場所
3. 主語：対象 目的語：空間・場所
4. 主語：動作主 目的語：対象、空間・場所

まず、三項動詞の例を示し、項構造、統語構造を示す。

(33) mesi itanki or a=o kor
 ごはん 茶碗 ~のところ 4.S=~に~を入れる すると
 ごはんを茶碗に入れると

[田村 1984 : 58]

(33)の項構造 (a= <mesi [itanki or] >)
 私 ごはん 茶碗のところ
 ↓ ↓ ↓
 (33)の統語構造 S O O

(33)では主語の「私」は動作主であり、x の位置に入る。そして、目的語の一つ、対象の mesi「ごはん」は y の位置に入り、もう一つの目的語 itanki or「茶碗のところ」は、空間・場所であり、z の位置に入る。これは次のような流れを意味する(図 7)。

図 7. o

- I. 動作主 x の働きかけ
 ↓
- II. 対象 y の移動
 ↓
- III. (対象 y が)空間・場所 z に存在・発生

つまり、(33)では動作主の「私」が対象の mesi「ごはん」を itanki or「茶碗のところ」へと移動させ、mesi「ごはん」が itanki or「茶碗のところ」に存在する状態になったことを意味している。

二項動詞 o は対象と空間・場所をとる例が確認できる。その例と項構造、統語構造を示す。

(34) yam o kamasu yam o saranip
 栗 ～に入る カマス 栗 ～に入る サラニブ
 栗の入ったカマス、栗の入ったサラニブ³²

[田村 1984 : 32]

(34)の項構造 (<u>x</u> <yam [kamasu]>)	(<u>x</u> <yam [saranip]>)
栗 カマス	栗 サラニブ
↓ ↓ ↓	↓ ↓ ↓
(34)の統語構造 φ S O	φ S O

(34)では yam「栗」は対象であり、y の位置に入り、kamasu「カマス」あるいは saranip「サラニブ」は空間・場所であり、z の位置に入る。動作主 x は統語上現れていない。また、これと同じ構造を持つものとして次のような例もある。

(35) mame ka ipe o oasi noyne siran
 豆 も 実 ～に入る するところだ ような 様子である
 豆にも実が入る(生る)ところのようだ

[田村 1984 : 50]

(35)の項構造 (<u>x</u> <ipe [mame]>)	
実 豆	
↓ ↓ ↓	
(35)の統語構造 φ S O	

(35)では対象の ipe「実」が y の位置に入り、mame「豆」が空間・場所であり、z の位置に入る。これは us が「～につく」だけでなく、「～に生える」という意味を持つのと同様に考えることができる。

o はこれ以外に、「～に入る」という意味の動作主と空間・場所をとる構造も持つ。以下に例を挙げるとともに、項構造、統語構造を示す。

(36) sinot kusu paye utar ne cip o pa
 遊ぶ ので 行く 人々 その 舟 ～に入る(乗る) 複数
 遊びに行った人々がその舟に乗り

[田村 1984 : 22]

³² カマスやサラニブは物を入れる袋のことを指す。

(36)の項構造	(sinot kusu paye utar 〈 y [cip] 〉) x=y		
	遊びに行った人々	舟	
	↓	↓ ↓	
(36)の統語構造	S	φ	O

(36)では主語の sinot kusu paye utar 「遊びに行った人々」が動作主であり、目的語の cip 「舟」は空間・場所であり、z の位置に入る。

これまで見てきた動詞は位置変化・移動を意味することを述べたが、o も同様である(図 7)。三項動詞の o 「～を～に入れる」は、図 1 の I～III までの全てを統語上に反映しており、x、y、z の三つの名詞句が出現する。それに対し、二項動詞の o 「～に入る」は、対象と空間・場所の二つの項をとる場合、I で示される動作主の働きかけが統語上現れない。また、動作主と空間・場所の二つの項を取る場合は、動作主 x と対象 y が同定され、II で示される移動する対象が統語上現れない。

また、us には us-i と us-te という二つの使役形が確認されるのと同様に、o は「～を～に入れる」、つまり、「～を～に移動させる」という一種の使役と考えられる働きがあるが、o-re という使役接尾辞-RE を接尾させた形も確認できる。

(37) sine pon sisam KURUMA en=o-re wa hinak un en=tura.
 一 小さい 和人 車 1.O=～に入る-使役 して どこか へ 1.O=～を連れる
 一人の若い和人が車に私を乗せてどこかへ連れて行った。

[本田 2001 : 14]

(37)の被使役者は「私」であるので、対応する二項動詞においては動作主として働くと考えられる。二項動詞の o が空間・場所の他に取る項が、あるときは動作主であり、またあるときは対象であるということが、二つの使役形が確認されることにも反映されており、動作主が主語の動詞を使役形にする際には、使役接尾辞-RE が用いられることが多いという傾向に(37)も合致している。

動作主と対象の二つの名詞句をとる動詞は、対象目的語動詞と考える。しかし、次の例は切替(1988)で挙げられている十勝方言の o 「～を入れる」であるが、三項動詞と二項動詞の両方が確認され、二項動詞は三項動詞から空間・場所の項を削除した形になっている。そのため、本論文ではこれを対象目的語動詞ではあるが、空間目的語動詞と関連が深いものとみなし、ここで言及する。動作主と対象をとる十勝方言の二項動詞の例を挙げ、項構造、統語構造と共に示す。

(38) or en asopiw a=o kor

～の中 に オヒョウニレの樹皮 4.S=～を入れる すると

その中(染料となる樹皮を煮た液の中)にオヒョウニレの樹皮を入れておくと

[切替 1988: 29]

(38)の項構造 (a= <asopiw [])

私 オヒョウニレの樹皮

↓ ↓

(38)の統語構造 S O

(38)では主語の「私」は動作主であり、x の位置に入る。そして、目的語の asopiw 「オヒョウニレの樹皮」は対象であり、y の位置に入る。空間・場所の z は空欄である。動詞の必須項としては存在していない。しかし、格助詞 en により示されており、斜格としては存在していることがわかる。このように、この場合は空間・場所が動詞の必須項ではないため、空間目的語動詞に深く関連するものながらも、項構造からすると対象目的語動詞とみなせる。

以上のことから二項動詞の o は次の項構造を持っていると考えられる。

o 「～に入る、～に乗る」主語：動作主 目的語：空間・場所

(x < y[z]) x=y

o 「～に入る、～になる」主語：対象 目的語：空間・場所

(x < y [z])

o 「～を入れる」対象目的語動詞 主語：動作主 目的語：対象

(x < y []) z は格助詞で示されることがある。

7.2.3. 有対空間目的語動詞の項構造

本論文では第六章で一項動詞の項構造について述べた。そして、有対動詞の場合、その構造は〈二項動詞〉が基本であり、有対一項動詞は一つの項が概念構造上は存在するが、統語上現れないことを主張した。その関係は次のように図示できる。

二項動詞と一項動詞の対の関係

a. 有対二項動詞

項構造	(x 〈 y [] 〉)
	↓ ↓
統語構造	S O

b. 有対一項動詞(非対格的)

項構造	(<u>x</u> 〈 y [] 〉)
	↓ ↓
統語構造	φ S

c. 有対一項動詞(非能格的)

項構造	(x 〈 <u>y</u> [] 〉)	x=y
	↓ ↓	
統語構造	S φ	

三項動詞と二項動詞の対も基本的にこれと同様である。二項動詞の構造は〈三項動詞〉が基本となっており、対となる二項動詞は語彙概念構造上は存在するが、統語上現れない項がある。その関係は次の a~d のように図示できる。また、この他に e のように項の一つが動詞の必須項ではなくなる例も確認される。

三項動詞と空間目的語動詞(二項動詞)の対の関係

a. 三項動詞

項構造	(x 〈 y [z] 〉)
	↓ ↓ ↓
統語構造	S O O

b. 有対空間目的語動詞(非対格的)

項構造	(<u>x</u> 〈 y [z] 〉)
	↓ ↓ ↓
統語構造	φ S O

c. 有対空間目的語動詞(非能格的)

項構造	(x 〈 <u>y</u> [z] 〉)	x=y
	↓ ↓ ↓	
統語構造	S φ O	

d.有対対象目的語動詞 (空間・場所を再帰的な意味として含意)

項構造	(x	⟨ y [z] ⟩)	x=z
	↓	↓ ↓	
統語構造	S	O φ	

e.対象目的語動詞(空間・場所は必須項ではない)

項構造	(x	⟨ y [] ⟩)
	↓	↓
統語構造	S	O

上記の b~e の中で、b~c までは項の一つが空間・場所であり、三項動詞と対になる二項動詞は基本的に空間を目的語とする動詞、あるいは d のように空間を含意する動詞であると言える。ただし、e は空間・場所が動詞の必須項ではなく、この中では特殊である。

7.3.無対の空間目的語動詞の項構造

本節では対となる三項動詞がない空間目的語動詞の項構造について検討する。

前節では二項動詞と三項動詞の対になっている動詞の項構造について検討し、三項動詞と対になる二項動詞は、基本的に空間目的語動詞であり、その構造は ⟨三項動詞⟩ が基本となっており、対となる二項動詞は語彙概念構造上は存在するが、統語上現れない項があることを述べた。本論文では対となる三項動詞がない空間目的語動詞についても、同様の分析を適応し、意味構造上は項が三つあることが前提となっており、統語上現れない項があることを述べる³³。また、この他に中川(2003)で言及されている y が具格で示される現象との関連についても述べる。

無対の空間目的語動詞には次のようなものがある。なお、以下に挙げた動詞は空間目的語動詞の一例であり、全てではない。

空間目的語動詞

oma	~に入る
osma	~に入る
kus	~を通る
kamu/kampa	~を覆う
otke	~に刺さる ~を刺す

³³ ここで挙げる無対の動詞は us と usi のような対応を示さない。しかし、本稿では項構造の分析の観点からこれらの動詞を 3 つの変項を持つものとして扱った。ただし、形態的観点からは再考の余地があると思われる

seske	～をふさぐ
kik	～にぶつかる ～を叩く
kuta	～からはがれる ～をぶちまける
pici	～から離れる ～を離す
kere	～に触れる

三項動詞との対がある空間目的語動詞(二項動詞)の構造は、〈三項動詞〉が基本となっている。つまり、語彙概念構造は存在するが、統語上現れない項があり、二項動詞になる。これを最もプロトタイプ的な空間目的語動詞であるとする³⁴。つまり、形態的な観点からは対応する三項動詞がある場合、そして、意味的な観点からは語彙概念構造は三項が存在するが、統語上現れない項が一項あるという場合に、よりプロトタイプ的な空間目的語動詞であるといえることができる。無対の空間目的語動詞は、形態的な観点からみれば、対応する三項動詞がない点で有対のものと比較して非プロトタイプ的である。また、意味的な観点からすると、無対のものの中でもその度合いには違いがみられる。具体例は以下でみていくが、上に挙げた中で *oma*、*osma*、*kus*、*kamu/kampa*、*otke* の用例はいずれも動作主と空間・場所を項としてとる例が確認される。その際に動作主自身が統語上現れない対象となる再帰的な構造をもつ。そのため、語彙概念構造は存在するが、統語上現れない項があると説明ができ、意味構造における三つの項の存在が、他の無対空間目的語動詞と比較すると捉えやすく、よりプロトタイプ的である。この中で *oma*、*osma*、*kus* は中川・中本(2007)において「場所目的語動詞」³⁵とされているものであることも着目すべき点であり、文法的な場所を目的語とする場所目的語動詞は、無対空間目的語動詞のなかでよりプロトタイプ的であるといえる。また、*otke*、*seske*、*kik*、*kuta*、*pici* に関しては、中川(2003)の指摘にあったように、項の一つが格助詞で示されるなど、三項のうち一つが動詞の必須項でなくなる用例もある。その点において非プロトタイプ的である。

このようなばらつきはあるものの、いずれの動詞も項構造においては *x*、*y*、*z* という三つの項の存在が想定できることを本論文では述べる。

7.3.1. *oma*

「～に入る」という意味の *oma* という動詞がある。

oma は対象と空間・場所をとる例が確認できる。以下に例と共に項構造、統語構造を示す。

³⁴ このようなプロトタイプ的な観点から空間目的語動詞の整理を行うというアイディアは中川裕先生よりご教示いただいた。

³⁵ 場所目的語動詞に関しては第三章で触れた。pp. 11–12 参照。

図 8.oma

- I. 動作主 x の働きかけ
↓
- II. 対象 y の移動
↓
- III. (対象 y が)空間・場所 z に存在

(40)では動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z に存在する事態を表すが、対象 y は動作主自体であり、動作主 x と対象 y は同定され、対象は統語上現れない。(39)でも同じ流れを表わすが、動作主 x は統語上現れない。

以上のことから二項動詞の oma は次の項構造を持っていると考えられる。

oma 「～に入る」主語：動作主 目的語：空間・場所
(x <y[z]>) x=y

oma 「～に入る」主語：対象 目的語：空間・場所
(x <y[z]>)

7.3.2.osma

「～に入る」という意味の osma という動詞がある。

osma は動作主と空間・場所をとる例が確認できる。以下に例と項構造を示す。

(41) nani arpa=an h_ine kotan or a=osma.
すぐ 行く=4.S ~して 村 ~のところ 4.S=～に入る
すぐに私は行って村に入った。

[国立大学法人千葉大学 2015b:920]

(41)の項構造	(a=	<	y	[kotan or]>)	x=y
		私		村のところ			
		↓		↓	↓		
(41)の統語構造	S		φ		O		

(41)では主語の「私」が動作主であり、x の位置に入り、kotan or「村のところ」は空間・場所であり、z の位置に入る。

osma は対象と空間・場所をとる例も確認できる。以下にの例と共に項構造、統語構

造を示す³⁷。

(42) kamuy hum sir-osma ruwe ne.
カムイ 音 あたり-~に入る 様子 ~である
カムイの音(雷)が地面に突っ込んだのだ。

[田村1989 : 58]

(42)の項構造 (x <kamuy hum [sir]>)
カムイの音 あたり
↓ ↓ ↓
(42)の統語構造 φ S O

(42)では kamuy hum 「カムイの音(雷)」が対象であり、y の位置に入り、sir 「あたり」は空間・場所であり、z の位置に入る。動作主 x は統語上現れない。

osma も他の空間目的語動詞と同様に、図9の流れで捉えることが可能である。

図9.osma

- I. 動作主 x の働きかけ
↓
- II. 対象 y の移動
↓
- III. (対象 y が)空間・場所 z に存在

(41)では動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z に存在する事態を表すが、対象 y は動作主自体であり、動作主 x と対象 y は同定され、対象は統語上現れない。(42)でも同じ流れを表わすが、動作主 x は統語上現れない。

以上のことから二項動詞の osma は次の項構造を持っていると考えられる。

osma 「~に入る」 主語：動作主 目的語：空間・場所
(x <y[z]>) x=y

osma 「~に入る」 主語：対象 目的語：空間・場所
(x <y[z]>)

³⁷ 田村(1989)ではこの用例の hum に()が付いた形で示されている。ここでは kamuy は雷を指している
ので、hum の有無はここでの解釈に影響はないと考えられる。

7.3.3.kus

「～を通る」という意味の kus という動詞がある。

kus は動作主と空間・場所をとる例が確認できる。以下に例と項構造を示す。

(43)kotan soy a=kus h_ine paye=an.

村 外 4.S=～を通る して 行く=4.S

村の外を私は通って行った。

[国立大学法人千葉大学 2015b: 838]

(43)の項構造 (a= < y [kotan soy]) x=y

私 村の外

↓ ↓ ↓

(43)の統語構造 S ϕ O

(43)では、主語の「私」が動作主であり、x の位置に入る。kotan soy「村の外」は空間・場所であり、z の位置に入る。kus も位置変化・移動を意味する(図 10)。

図 10.kus

I. 動作主 x の働きかけ

↓

II. 対象 y の移動

↓

III. (対象 y が)空間・場所 z に存在・通過

(43)では動作主の「私」自身が、空間・場所の kotan soy「村の外」へと移動し、そこを通過することを意味する。そのため、移動する対象 y は動作主であり、x と y は同定される。

また、この他に対象と空間・場所をとる例も確認できる。以下に例と共に項構造、統語構造を示す。

(44)orano i=ka toy kus pekor yaynu=an

それから 4.O=上 土 ～を通る かのように 思う=4.S

それから私の上に土がある(土に埋められている)かのような気分だった。

[国立大学法人千葉大学 2015b : 986]

(44)の項構造 (\underline{x} 〈toy [i=ka]〉)

土 私の上

↓ ↓ ↓

(44)の統語構造 ϕ S O

(44)では toy「土」が対象であり、y の位置に入り、i=ka「私の上」は空間・場所であり、z の位置に入る。これも図 10 の流れに沿って捉えることが可能である。動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z に存在する事態を表すが、動作主 x は統語上現れない。

以上のことから二項動詞の kus は次の項構造を持っていると考えられる。

kus 「～を通る」主語：動作主 目的語：空間・場所

(\underline{x} 〈y[z]〉) x=y

kus 「～を通る」主語：対象 目的語：空間・場所

(\underline{x} 〈y[z]〉)

7.3.4. kamu /kampa

「～を覆う」という意味の kamu あるいは kampa という動詞がある。この形態から語根が kam であり、単数形 kamu、複数形 kampa であることが推測される。

kamu は動作主と空間・場所をとる例が確認できる。以下に例と項構造、統語構造を示す。

(45) tosir corpok ta, yaykunnuyana=an wa sir-kamu=an wa an=an ayne,

川岸のうろ 下 ～に 隠れる=4.S して あたり-～を覆う して いる=4.S 挙句

sirpeker.

夜が明ける

土手の下に私は隠れて地面に覆いかぶさっていたあげく、夜が明けた。

[田村 1997:66]

(45)の項構造 (=an 〈 \underline{y} [sir]〉) x=y

私 地面

↓ ↓ ↓

(45)の統語構造 S ϕ O

(45)では、主語の「私」が動作主であり、x の位置に入る。sir「地面」は空間・場所で

あり、z の位置に入る。kamu も位置変化・移動を意味する(図 11)。

図 11. kamu/kampa

I. 動作主 x の働きかけ

↓

II. 対象 y の移動

↓

III. (対象 y が)空間・場所 z に存在・発生

(45)では動作主の「私」自身が、空間・場所の sir「地面」へと移動し、地面を覆い、そこに存在することを意味する。そのため、移動する対象 y は動作主であり、x と y は同定される。

また、この他に対象と空間・場所をとる例も確認できる。以下に千歳方言の例と共に項構造、統語構造を示す。

(46)inkar=an akusu a=unihi ne yakka tane sir-kamu wa munin
 見る=4.S すると 4.S=家 ~である ~しても もう あたり-~を覆う ~して 腐る
 wa an ruwe ene an hi ne
 ~して ある 様子 このように ある こと ~である
 私が見ると、私の家ももうあたりを覆うように腐っていた。

[中川 1995:222]

(46)の項構造	(<u>x</u>	<a=unihi	[sir]>)
			私の家	あたり	
		↓	↓	↓	
(46)の統語構造	φ	S	O		

(46)では、主語の a=unihi「私の家」が対象であり、y の位置に入る。sir「地面」は空間・場所であり、z の位置に入る。動作主 x は統語上現れない。

また、これと同様に対象と空間・場所をとる例で発生を意味する場合もある。以下に例と共に項構造、統語構造を示す。

(47)a=rupune -piri cima kampa
 4.S=大きい-傷 かさぶた ~を覆う
 私の大きな傷をかさぶたが覆った。

[田村 1998:102]

(47)の項構造	(<u>x</u>	〈	cima	〈	[a=rupne-piri]	〉)
				かさぶた		私の大きな傷		
				↓		↓		
(47)の統語構造	φ		S			O		

(47)では、主語の cima 「かさぶた」が対象であり、y の位置に入る。a=rupne-piri 「私の大きな傷」は空間・場所であり、z の位置に入る。これは us の「～に生える」という意味や o の「～に(実が)なる」という意味と同様に考えることができる。

以上のことから二項動詞の kamu/kampa は次の項構造を持っていると考えられる。

kamu/kampa 「～を覆う」 主語：動作主 目的語：空間・場所
 (x 〈y[z]〉) x=y

kamu/kampa 「～を覆う」 主語：対象 目的語：空間・場所
 (x 〈y[z]〉)

7.3.5.otke

第三章で述べたように、切替(1988)は otke 「～を突く、～に刺さる」を例に挙げ、「自動か他動かの揺れは見られないものの、(中略)ときによって取りうる名詞項の性格がかなり変わる動詞語根が存在する」(p. 16)と指摘している。

まず、otke が動作主と空間・場所の二つの名詞句をとる場合についてみていく。第三章で挙げた胆振方言の otke の例を以下に再掲し、合わせて項構造、統語構造を示す。

(5)oyakake nit ari otkeotke
 あちこち 棒 ～で ～をつく
 (パナンペは)あちこち棒でつついたり

[知里 1937(1973) : 46]

(5)の項構造 :	(pananpe	〈	[oyakake]	〉)
		パナンペ		あちこち		
		↓		↓		
(5)の統語構造	S					O

(5)では主語の pananpe 「パナンペ」は動作主であり、x の位置に入る。目的語の oyakake 「あちこち」は空間・場所であり、z の位置に入る。y の位置は空欄になっている。

第三章で挙げた胆振方言の別の *otke* の例を再掲し、項構造および統語構造を示す。

(6) *otompuye top otke*

肛門 竹 ～に突き刺さる
 肛門に竹が突刺さって

[知里 1937(1973) : 20]

(6)の項構造	(\underline{x}	<	top	[<i>otompuye</i>]	>)
				竹		肛門			
		↓		↓		↓			
(6)の統語構造		ϕ		S		O			

(6)では主語の *top* 「竹」が対象であり、*y* の位置に入る。目的語の *otompuye* 「肛門」は空間・場所であり、*z* の位置に入る。動作主 *x* は統語上は出現しない。

(6)では、空間・場所に刺さるものが対象となっている。(5)で動作主の行為によって、空間・場所に刺さるのは、*ni* 「棒」である。この二つを比較すると、(5)の具格の格助詞 *ari* によって示されている名詞句は道具であるが、(6)の項構造においては対象であるとみなせる。中川(2003)では *y* が道具格として実現することがあると指摘されていたが、(5)においてもそれがみられる。(5)では具格の格助詞 *ari* により、*y* が示されており、*y* は存在するが、動詞の必須項ではない。このような要素は、(5)のように具格の格助詞により表示されたり、増価接頭辞 *e*-により表示されたりと斜格として扱われる。また、文に現われないこともある。

otke 「～を刺す」のような動作主と空間・場所をとる動詞の項構造および統語構造は次のようになる。

無対空間目的語動詞(対象は必須項ではない。斜格(道具格)になる。)

項構造	(x	<	[z]	>)
		↓		↓		
統語構造		S		O		

otke も位置変化・移動を意味する (図 12)。

図 12. **otke**

I. 動作主 x の働きかけ

↓

II. 対象 y の移動

↓

III. (対象 y が)空間・場所 z に接触・存在

動作主 x が対象 y に働きかけ、対象 y が移動し、空間・場所 z に接触あるいは存在する状態へと変化する。「～を刺す」という意味では、動作主 x と空間・場所 z のみが統語上出現し、「～に刺さる」という意味では対象 y と空間・場所 z のみが出現する。**otke** は対になる三項動詞は確認できないが、図 12 のような流れが想定できる。

また、主語が動作主、目的語が空間・場所でも(5)と異なる構造を持つと考えられることもある。それは次のような場合である。

(48) *osoro kamihi kem-okkayo otke ruwe ne.*

尻 肉 針-男 ～を刺す 様子 ～である

(魔神の)お尻の肉を針男が刺したのだ。

[久保寺 1977 : 57]

(48)では針を擬人化しており、針自身が意志を持って(魔神の)お尻の肉を刺したという状況に捉えられるため、*kem-okkayo*「針男」は動作主、*osoro kamihi*「(魔神の)お尻の肉」は空間・場所として解釈できる。この項構造は次のようになる。

(48)の項構造 (*kem-okkayo* < y [*osoro kamihi*]>) $x=y$

針男

お尻の肉

↓

↓

↓

(48)の統語構造

S

ϕ

O

つまり、(48)では動作主の *kem-okkayo*「針男」自身が、空間・場所の *osoro kamihi*「お尻の肉」へと移動し、接触することを意味する。そのため、移動する対象 y は動作主自身であり、 x と y は同定される

以上のことから **otke** は次の項構造を持っていると考えられる。

otke 「～を刺す」主語：動作主 目的語：空間・場所

(x < y [z]>) $x=y$

っておらず、統語上現れていない。

この他に対象と空間・場所をとる例も確認できる。以下に例と共に項構造、統語構造を示す。

(50) hure rek tanne rek rerar kasi seske kane an siporo aynu ahun hine
 赤い ひげ 長い ひげ 胸 上 ～を覆う して ある 大きい 人間 入る して
 赤いひげ、長いひげがその胸の上を覆っている大きな人間が入ってきて

[Nakagawa & Bugaeva (2012)K8109193.UP]

(50)の項構造 (\underline{x} <hure rek [rerar kasi]>)	(\underline{x} <tanne rek [rerar kasi]>)				
赤いひげ	胸の上	長いひげ	胸の上		
↓	↓	↓	↓		
(50)の統語構造 ϕ	S	O	ϕ	S	O

(50)では hure rek 「赤いひげ」あるいは tanne rek 「長いひげ」が対象であり、y の位置に入り、rerar kasi 「胸の上」は空間・場所であり、z の位置に入る。これも図 13 の流れに沿って捉えることが可能である。動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z に存在する事態を表すが、動作主 x は統語上現れていない。

以上のことから二項動詞 seske は次の項構造を持っていると考えられる。

seske 「～をふさぐ」主語：対象 目的語：空間・場所
 (\underline{x} <y[z]>)

seske 「～をふさぐ」主語：動作主 目的語：空間・場所
 (x < [z]>)

7.3.7.kik

「～を叩く」という意味の kik という動詞がある。

kik は動作主と空間・場所をとる例が確認できる。以下に例と項構造、統語構造を示す。

(51) soy ta a=yupihi a=teke ani kane hine sir-kik-kik ruwe
 外 ~で 4.S=兄 4.S=手 ~を持つ ながら して あたり-~を叩く-重複 様子
 ne akusu
 ~である すると

外で兄が私の手を引きながら、あたりを叩いていると

[国立大学法人千葉大学 2015b: 838]

(51)の項構造 (a=yupihi < [sir])

私の兄 あたり

↓

↓

(51)の統語構造 S O

(51)では a=yupihi「私の兄」が動作主であり、x の位置に入る。sir「あたり」が空間・場所であり、z の位置に入る。

筆者は小林(2007)において「kikは「~を叩く」という意味であり、その行為の結果、対象物が何らかの変化を起こす(例えば、対象物の形状が変わるなど)可能性もあるが、その変化が起こるか否かということは含意せず、働きかけのみを意味する動詞である」と述べ、影山(1999)の語彙概念構造の基本形を参考に、次のような構造で示した。

小林(2007)で示した kik(活動動詞)の概念構造

[[]x ACT ON-[...]y]

小林(2007)においては(79)の sir「あたり」も対象として捉えていたが、本論文ではこれを対象ではなく、空間・場所と見なし、kik もこれまで見てきた空間目的語動詞同様に位置変化・移動を意味すると捉える(図 14)。

図 14. kik

I. 動作主 x の働きかけ

↓

II. 対象 y の移動

↓

III. (対象 y が)空間・場所 z に接触

図 14 に沿って(51)を考えれば、対象 y は統語上表れていないが存在し、動作主 x である a=yupihi「私の兄」が対象 y を空間場所 sir「あたり」に移動させ、接触させたという流れである。

(54)の項構造 (\underline{x} <ku=minaki [u-]>)

私の歯 互い

↓ ↓ ↓

(54)の統語構造 ϕ S O

(54)では動詞は kik が重複されている。ku=minaki「私の歯」が対象であり、y の位置に入り、空間・場所の z の位置にはこの接頭辞 u-が入っている。動作主 x は統語上現れない。そして、対象 y が互いに接触することを表している。

以上のことから二項動詞 kik は次の項構造を持っていると考えられる。

kik 「～にぶつかる」主語：対象 目的語：空間・場所

(\underline{x} <y[z]>)

kik 「～を叩く」主語：動作主 目的語：空間・場所

(x < [z] >)

y は斜格(具格)として表示されることがある。

7.3.8.kuta

kuta 「～を空ける」という二項動詞がある。

kuta は動作主と対象をとる例が確認できる。以下に例と項構造、統語構造を示す。

(55) sineanta a=macihi nupki kuta kusu soyene akusu

あるとき 4.S=妻 濁り水 ～を空ける ～ので 外にでる すると

あるとき、私の妻が濁り水を捨てるために外に出ると

[国立大学法人千葉大学 2015b : 1347]

(55)の項構造 (a=macihi <nupki []>)

私の妻 濁り水

↓ ↓

(55)の統語構造 S O

(55)では主語の a=macihi「私の妻」が動作主であり、x に入り、目的語の nupki「濁り水」が対象で y の位置に入る。これは次の図 15 のような流れの事態を表している。

図 15.kuta

I. 動作主 x の働きかけ



II. 対象 y の移動



III. (対象 y が)空間・場所 z から除去

つまり、(55)では動作主 a=macihi「私の妻」が対象の nupki「濁り水」を空間・場所 z から除去したことを表している。ただし、空間・場所 z は統語上現れていない。

この kuta という動詞について田村(1996)では次のように記述されている。

クタ kuta【他動】...(入れ物の中から)あける/全部出す(「まかす」)、...の中味をあける(容器の中の水などを全部捨てて空にする)、...の中味を(ザッと)出す。 nupki kuta ヌプキ クタ よごれ水を捨てる(昔は川や泉から水を汲んで来て使い、使ったあとの水は外に捨てた)。 ☆参考 目的語は中味の場合もあるし、入れ物の場合もある。 ☆参考 ekuta エクタ ...の一部分を「まかす」、こぼす。 {E: to open, spill...}

[田村 1996 : 369]

田村(1996)では、「目的語は中味の場合もあるし、入れ物の場合もある」と指摘されている。目的語が入れ物である例と項構造、統語構造を示す³⁹。

(56) oraun nea su, nea to or un a=kuta tek hine

それから その 鍋 その 沼 ~のところ へ 4.S=~をあける さっと して

それから、その鍋をその沼へ私はさっと空けて

[田村 1985 : 14]

(56)の項構造 (a= < [su])

私 鍋



(56)の統語構造 S O

動作主と空間・場所が統語上現れ、(55)で現われていた対象 y は出現せず空欄となる。

kuta は接尾辞-atpa が接尾し、kutatpa という形になることがある⁴⁰。その際に対象と空

³⁹ この例は中川裕先生にご教示いただいた。

⁴⁰ 田村(1996)ではこの接尾辞について「他動詞語幹などに接尾して、激しく、大きい動作で、一度にたくさん、などの意味を添えて他動詞をつくる」(p.33)と説明されている。

間・場所をとる例も確認できる。以下にの例と共に項構造を示す。

(57) a=husko-piri cima kutatpa
 4.S=古い-傷 かさぶた ～から剥がれる
 私の古い傷からかさぶたが剥がれた。

[国立大学法人千葉大学 2015b : 1506]

(57)の項構造 (\underline{x} ‹cima [a=husko-pirihi]›)
 かさぶた 私の古い傷
 ↓ ↓ ↓
 (57)の統語構造 ϕ S O

(57)では cima 「かさぶた」が対象であり、y の位置に入り、a=husko-piri 「私の古い傷」は空間・場所であり、z の位置に入る。これも図 15 の流れに沿って捉えることが可能である。動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z から除去する事態を表すが、動作主 x は統語上現れない。

以上のことから二項動詞の kuta は次の項構造を持っていると考えられる。

kuta 「～から剥がれる」主語：対象 目的語：空間・場所
 (\underline{x} ‹y[z]›)

kuta 「～をぶちまける」対象目的語動詞 主語：動作主 目的語：対象
 (x ‹y []›)

kuta 「～をあける」主語：動作主 目的語：空間・場所
 (x ‹ [z]›)

7.3.9. pici

pici 「～を離す」という二項動詞がある。

pici は動作主と空間・場所をとる例が確認できる。以下に例と項構造、統語構造を示す。

(58) ne niyatus nenkane a=o-pici yakun
 その 手桶 万が一 4.S=～の尻-～を離す したら
 その手桶を万が一私が離したら

[アイヌ民族博物館 2015a : 5]

(58)の項構造	(a=	⟨niyatys	[z]⟩)	x=z
		私	手桶		
		↓	↓	↓	
(58)の統語構造	S	O	φ		

(58)では *pici* に所属形的接頭辞 *o-*「～の尻、～の下方」が接頭しており、「～の下方を離す」という意味になっている。主語の動作主「私」が *x* の位置に入る。目的語は一つしか現れていない。この目的語 *niyatys*「手桶」は対象であり、*y* の位置に入る。(58)では主人公の私は犬であり、口に手桶をくわえて水汲みに行ったというシーンである。空間・場所は統語上現れていないが、動作主「私」が、対象 *niyatys*「手桶」を空間・場所「自分の口」から離すという流れを表している。*niyatys*「手桶」を空間・場所ではなく、対象としたのは次のような例も確認できるためである。

(59) a=tekehe	wa	a= <u>o-pici</u>	ruwe... hikusu
4.S=手	～から	4.S=～の尻-～を離す	様子 ので
(ぬかおにぎり)手から私は離したので			

[アイヌ民族博物館 2015c: 166]

(59)の項構造	(a=	⟨murtaktak	[]⟩)
		私	ぬかおにぎり	
		↓	↓	
(59)の統語構造	S	O		

(59)は主語の「私」が動作主であり、*x* に入り、*murtaktak*「ぬかおにぎり」が対象で *y* の位置に入る。そして、空間・場所は動詞の必須項ではないので、*z* は空欄になっているが、格助詞 *wa* で示されている。格助詞 *wa* は「～(場所)から」ということを示すので、*a=tekehe*「私の手」は空間・場所として捉えることができ、そのため、*murtaktak*「ぬかおにぎり」が空間・場所ではなく、対象であると判断した。(58)もこれと平行的に考え、*niyatys*「手桶」を対象と判断した。(58)及び(59)からは動作主 *x* と空間・場所 *z* が同定され得る場合、つまり、空間・場所が動作主の身体の一部であるような場合においても、*z* を斜格で示すことも可能であることがわかる。

pici は次の図 16 のような流れの事態を表している。

図 16.pici

- I. 動作主 x の働きかけ
 ↓
 II. 対象 y の移動
 ↓
 III. (対象 y が)空間・場所 z から離れる

pici は対象と空間・場所をとる例も確認できる。以下に虻田方言の例と共に項構造、統語構造を示す。

(60)a=sikehe a=sapaha e-pici p ne kusu
 4.S=荷物 4.S=頭 ~の頭~から離れる もの ~である ので
 荷物の先が私の頭から離れたものなので

[銀の滴講読会 2010 : 26]

(60)の項構造 (x <a=sikehe [a=sapaha]>)
 私の荷物 私の頭
 ↓ ↓ ↓
 (60)の統語構造 φ S O

(60)では pici に接頭辞 e-「~の頭」が接頭している。a=sikehe「私の荷物」が対象であり、y の位置に入り、a=sapaha「私の頭」は空間・場所であり、z の位置に入る。これも図 16 の流れに沿って捉えることが可能である。動作主 x の働きかけによって、対象 y が移動し、空間・場所 z から離れる事態を表すが、動作主 x は統語上現れない。

以上のことから二項動詞の pici は次の項構造を持っていると考えられる。

pici 「~から離れる」主語：対象 目的語：空間・場所
 (x <y[z]>)

pici 「~を離す」対象目的語動詞 主語：動作主 目的語：対象
 (x <y [z]>) x=z

pici 「~を離す」対象目的語動詞 主語：動作主 目的語：対象
 (x <y []>)
 z は斜格として表示されることがある。

(62)の項構造 (x 〈kane etor [u-]〉)

黄金の鈴 互い

↓ ↓ ↓

(62)の統語構造 φ S O

(62)では動詞は *kere* に接頭辞 *u-*が接頭した *u-kere* という形になっている。*u-*は「互い」という意味である。*kane etor*「黄金の鈴」が対象であり、*y* の位置に入り、空間・場所の *z* の位置には、この接頭辞 *u-*が入っている。動作主 *x* は統語上現れていない。そして、対象 *y* が互いに接触することを表している。

kere から派生したとみられる *hokerekere* という語もある。この語は田村(1996)では次のように記述されている。

ホケレケレ *hokerekere* 【自動】 [*ho-kere-kere* 尻・にさわる(?)・(重複)]尻をついて足をバタバタさせる(だだをこねる様子)。

[田村 1996 : 194]

次のような用例がある。

(63)*cise or ta ka ho-kere-kere=an kor*

家 ~のところ ~で も 尻~に触れさせる-重複=4.S ~ながら

家でも私は尻をついて足をバタバタさせながら

[田村 1984 : 42]

(63)では *hokerekere* の主語は「私」であり、動作主と考えられる。そして、目的語として働いているのは接頭辞 *ho-*「尻」である。この *ho-*は対象か、あるいは空間・場所かということになる。(61)と比較すると、(61)では主語の動作主の身体部分が対象であり、これとは別に空間・場所が表れている。(63)も(61)同様に動作主の身体部分であるので、*ho-*は対象であると捉えることが出来る。そして、(63)では空間・場所の項が表れていない。つまり、この項構造は次のようになる。

(63)の項構造 (=an 〈ho- []〉)

私 尻

↓ ↓

(63)の統語構造 S O

主語の動作主「私」は *x* の位置に入り、接頭辞 *ho-*「尻」は対象として *y* の位置に入る。

空間・場所の *z* は空欄となる。

以上のことから二項動詞 *kere* は次の項構造を持っていると考えられる。

kere 「～に触れる」主語：対象 目的語：空間・場所

(*x* 〈*y*[*z*]〉)

kere 「～に触れさせる」対象目的語動詞 主語：動作主 目的語：対象

(*x* 〈*y*[]〉)

7.4.小括

本章では空間目的語動詞に三種類の項構造が認められることを示した。空間目的語動詞はこの三種類のうちのいずれか一つ以上の構造が確認でき、場合によってはこの他に対象目的語動詞と同じ構造を有することもある。また、この際の対象目的語動詞の構造には二種類ある。

各動詞の項構造を一覧にしたものを以下に示す(表 18)。表 18 では確認される項構造の部分に日本語訳を入れた⁴¹。空欄部分は確認されていないものである。現段階では確認できていないが、空欄部分の項構造の存在を否定するものではなく、存在する可能性もある。

空間目的語動詞はプロトタイプのものから周辺のものまで様々であるが、その共通点は対象と空間・場所をとる構造を持ち得ることである。この構造は、動作主が語彙概念構造上は存在するが、統語上現れないという点で対象空間主語動詞、つまり、非対格動詞と共通しており、空間目的語動詞は二項動詞でありながら、非対格的な構造をとる動詞であると言える。

⁴¹ *kuta* に関しては動作主と空間・場所をとることが田村(1996)で指摘されているが、筆者は確認できていないため、()に入れて示した。

表 18. 空間目的語動詞に関連する項構造一覧

	① 動作主 空間・場所 (x < [y [z]]) x = y	② 対象 空間・場所 (x < [y [z]])	③ 動作主 空間・場所 (x < [z])	対象目的語動 詞 動作主 対象 (x < [y [z]]) x = z	対象目的語動 詞 動作主 対象 (x < [y []])
us	～につく	～につく、～に 生える		～を(自らの身 体につける、～ を履く	
un		～にはまる			
kot		～に結び付く			
o	～に入る、～に 乗る	～に入る、～に 生る			～を入れる
oma	～に入る	～に入る			
osma	～に入る	～に入る			
kus	～を通る	～を通る			
kamu/kampa	～を(自らの身 体で)覆う	～を覆う			
otke	～を(自らの身 体で)刺す	～が刺さる	～を刺す		
seske		～をふさぐ	～をふさぐ		
kik		～にぶつかる	～を叩く		
kuta		～からはがれ る	～をあける		～をぶちまけ る
pici		～から離れる		～を(自らの身 体から)離す	～を離す
kere		～に触れる			～に触れさせ る

第八章 動詞結合価の揺れと自他同形動詞

中川(1993)は「アイヌ語はいわゆる動詞価(valency)に関して、非常に透明度が高いという特徴を持っている。すなわち、各動詞の動詞価が意味論的にではなく、統語論的に明確に規定でき、人称接辞によって表層構造の上でそれが明示される。しかも、その動詞価とそれを埋める項との関係は、述部と名詞句との関係だけでなく、複合動詞の内部構造にも同じように適用できる。すなわち、文構造と動詞の内部構造とがまったく同じシステムで記述できるのである」(p. 163)としている。確かにアイヌ語は名詞的要素と動詞的要素の関係性がはっきり捉えられることが多く、それぞれの動詞が名詞をいくつとるのかは明確であることがほとんどである。しかし、動詞の結合価と、実際に現れる名詞句の数が合わないようにみえる場合もある。文脈上明らかな名詞句はしばしば省略されるため、名詞句の数より動詞の結合価の方が多く場合は、名詞句が省略されているものと考えられる。動詞の結合価より名詞句の数が多い場合は考察の必要がある。可能性としては、言い誤りや「動詞結合価の揺れ」があることが考えられる。

ここでいう「動詞結合価の揺れ」とは、ある動詞の結合価が方言により異なっている場合や、同一方言内でも話者により異なる場合を指す。また、第四章でみたように同一の話者であっても、ある動詞がある場合は一項動詞として使われ、またあるときは二項動詞として使われることがある。このような動詞を第四章では自他動詞対間の形式的な関係から L タイプ（自他同形型）と呼んだが、多くの話者、あるいは多くの方言において L タイプ（自他同形型）として固定化していない語をここでは「動詞結合価の揺れ」の一種とみなして議論を進める。

動詞の結合価に揺れが見られる例は決して多くはない。また、ある動詞の結合価が方言により異なっている場合についての分析を行うため、本章では沙流方言に限らず、鶴川方言、浦河方言を含めて分析を行う。また、他方言の先行研究についても参照しながら議論を進める。

8.1. 自他同形動詞と動詞結合価の揺れに関する先行研究

アイヌ語においては自他同形動詞は例外的なものである。その最も知られている動詞として *roski* 「立つ/～を立てる」(複数形)がある。例えば、金田一(1931)に次のような記述がある。

ash 立つ、(pl.roshki)

ashi 立てる、(pl.roshki)

[金田一 1931 : 173]

roski は次のように一項動詞としても二項動詞としても機能する。

一項動詞の例 主語：動作主

- (64) soy wa roski=an
外 から 立つ.複数=4 S
私達は外に立った

[萱野 1998a:76]

二項動詞の例 主語：対象

- (65) poronno ikuspe roski-roski kane an
たくさん 柱 立つ. 複数(重複) して ある
たくさん柱が立っていた。

[国立大学法人千葉大学 2015c : 1722]

roski が自他同形動詞としてもっとも知られている例である。この他に動詞結合価に揺れのある動詞が観察され、先行研究でもいくつか指摘がある。

8.1.1. 切替(1988)

切替(1988)は「この現象をどのように評価するか、つまり、それを社会習慣的なものと見るか、単に言い誤りと見るか、言い誤りとしてもその誤りが何に由来するものか、また、それがどの程度の誤りなのか、確実に言い切れるだけの証拠は、まだ得られていない」(p. 15)と述べた上で、次のことを指摘している。

アイヌ語文法では動詞語根は大きく自動詞語根と、他動詞語根の二つに分かれ、ある動詞語根が、ときに自動詞語根のように、ときに他動詞語根のように働くことはないと言われている。なお、「動詞語根」とは、それを分割するともはや動詞的な働きを失ってしまうもののことである。ところが非常にわずかな例であるが、上の規定に反するように見える例、つまり自動詞的にもなり、他動詞的にもなる動詞語根がいくつか見いだされる。

また、他動詞語根が複他動詞的に用いられた例にも言及し、自動詞語根が他動詞語根的に用いられた語、他動詞語根が複他動詞的に用いられた語は「放物線的空中移動」あるいは「空間占拠」という意味的共通性があることを指摘している。

放物線的空中移動

- turse ～が飛ぶ/～が～を飛ばす
yapkir ～が投げる動作をする/～が～を投げる

空間占拠

an	～がある/～が～にある
reusi	～が泊まる/～が～に泊まる
at	～がある/～が～にある
o	～が～にある、～が～をあらしめる/～が～を～にあらしめる

切替(1988)での用例は 1937 年に出版された胆振地方の民話のテキスト(知里真志保『アイヌ民譚集』郷土研究社)から中心に集めているが、上記のうち、o は十勝方言での指摘である⁴²。

o は二項動詞と三項動詞の間の例であり、それ以外は一項動詞と二項動詞の間の揺れである。

8.1.2. 柳下(1989)

柳下(1989)は沙流方言、千歳方言のデータを用い、o について次のように記述している。

1. [状態をあらわすとき] (場所目的語動詞)2 項動詞で oma の複数形として用いられる。
2. [動作・作用をあらわすとき] (場所目的語動詞)3 項動詞で「入れる」という意味をあらわす。
3. [動作・作用をあらわすとき] 2 項動詞で「乗る」あるいは「実がなる」という意味をあらわす。

[柳下 1989:51]

つまり、o は千歳方言や沙流方言でも二項動詞として機能するときと三項動詞として機能するときがある。

8.2. 動詞結合価に揺れがみられる動詞

先行研究において結合価に揺れがある動詞はいくつか挙げられているが、それ以外にも確認される。

8.2.1. √-ke

語根に動詞形成接尾辞-ke が接尾した形で一項動詞であり、かつ二項動詞である動詞がある (詳細は第四章参照)。

⁴² この他に揺れがある可能性のある語として sik 「～がいっぱいになっている」も挙げられていたが、別の解釈も成り立つ可能性も提示されているので、ひとまず本論文では除外しておく。

8.2.2. 方言間で結合価の揺れがみられる語—浦河方言の事例—

ここでは、ある方言では一項動詞として現れるものが、他の方言では二項動詞として機能するという場合についてみる。

筆者は浦河方言の聞き取り調査において、他方言においては一項動詞として現われるものが、浦河方言では二項動詞として働く例をいくつか確認している。具体的には yaske 「～を洗う」、pakkay 「～を負ぶう」、suke 「～を煮る」である。これらは浦河の西隣の静内方言、本論文で中心的に扱う沙流方言ではいずれも一項動詞である(表 19)⁴³。

表 19. 方言間で結合価の揺れがみられる語

	浦河方言	静内方言	沙流方言
yaske	～(顔)を洗う	顔を洗う	手を洗う
pakkay	～を負ぶう	子どもを負ぶう	子どもを負ぶう
suke	～を料理する	料理する	料理する

浦河方言の例 二項動詞

(66) enkuta nanu yaske yan.

早く 顔 洗う 命令

早く顔を洗いなさい。

[浦河方言の聞き取り調査]

沙流方言の例 一項動詞

(67) nea rupnemat yaske a yaske a ewonne a ewonne a hine

その 年配女性 手を洗う 反復 手を洗う 反復 顔を洗う 反復 顔を洗う 反復 して

その年配の女性は何度も手を洗い、何度も顔を洗って

[アイヌ民族博物館 2015a:43]

浦河方言の例 二項動詞

(68) hapo korsi pakkay wa apkas.

母親 子ども 負ぶう して 歩く

お母さんが子どもを負ぶって歩いている。

[浦河方言の聞き取り調査]

⁴³ 静内方言は奥田(1999)による。

沙流方言の例 一項動詞

- (69) asinuma pakkay=an hine
私 子を**負ぶう**=4.S して
私は子どもをおぶって

[田村 1985:30]

浦河方言の例 二項動詞

- (70) piyapa suke wa kamuy turano ipe an.
ヒエ ～を料理する して カムイ 一緒に 食事する 命令
ヒエを料理して、カムイと一緒に食事しなさい。

[浦河方言の聞き取り調査]

沙流方言の例 一項動詞

- (71) ora suke=an hine
それから 料理する=4.S して
それから私は料理をして

[国立大学法人千葉大学 2015b : 993]

上記のように沙流方言、静内方言などの他方言において「意味上は対象に対する働きかけを含むが、動詞の意味に既に対象が含意されている一項動詞」として確認できる語に関して、浦河方言では目的語をとる形が確認される。

元々は浦河方言でも他方言同様に一項動詞として使われていた可能性も考えられるが、一項動詞としての確実な例は確認できていない。

8.3. 自他同形動詞の二つのタイプ

一般に自他同形動詞は、大きく分けて二種類に分けられることが知られている。一つは自動詞主語と目的語が一致する S=O タイプであり、もう一つは、自動詞主語と他動詞主語が一致する S=A タイプである。その英語の例 Kulikov and Lavidas(2014)を下記に引用する。

S=O type

Patient-preserving lability(P-lability)

a. John broke the Vase.

b. The vase broke.

S=A type

Agent-preserving lability(A-labilty)

c. John is eating porridge.

d. John is eating

[Kulikov and Lavidas 2014 : 871]

S=O タイプの例では、他動詞文(例文 a) の目的語 vase が、自動詞文(例文 b)の主語になっている。この二文は他動詞文の主語 John が現れているかどうか異なっている。一方 S=A タイプでは、他動詞文(例文 c)の主語 John と自動詞文(例文 d)の主語が一致し、他動詞文の目的語 porridge が現れているかどうか異なっている。

すでにみたように、アイヌ語の二項動詞の目的語は対象だけでなく、場所である場合もあり、上記の二種類では上手く説明できない。そこで本論文では別の分類を試みる。

8.4. 一項動詞と二項動詞の揺れ一項の意味役割による分析

本節では、第三章でみた動詞基本形とその項の意味役割を基準に、一項動詞と二項動詞の間にみられる結合価の揺れについて分析を行う。そして、沙流方言と鶴川方言、浦河方言の観察からは、一項動詞と二項動詞の間にみられる結合価の揺れは次の二種類に分けられることを指摘する⁴⁴。

1. 使役交替
2. 対象付加

8.4.1. 使役交替

一項動詞と二項動詞の間に結合価の揺れがみられる場合、その関係が使役交替になっているものがある(表 20)。このタイプでは一項動詞は、対象空間主語動詞であり、二項動詞は対象目的語動詞である。一項動詞の主語と、二項動詞の目的語が一致し、二項動詞の主語である動作主が現れるかどうか異なっている。

これらのタイプには形態的にも特徴がみられ、いずれも語根に動詞形成接尾辞-se、あるいは-ke、-V が接尾しているものである。このうち、kekke は第四章で述べたように、断定は難しいが、語根に-ke が接尾した形態である可能性が高い。

⁴⁴ 切替(1988)で挙げられている an 「～がある/～が～にある」、reusi 「～が泊まる/～が～に泊まる」、at 「～がある/～が～にある」はこの二種類に当てはまらない。これらの一項動詞と二項動詞を比較すると、二項動詞には一項動詞に空間・場所の項が付加されていることから、「空間付加」とみなすことができる。沙流方言においても、空間付加がみられる可能性はあるが、今のところ筆者は確認できていない。

表 20. 使役交替の結合価の揺れ

	一項動詞	二項動詞	方言	備考
rewke	折れ曲がる	～を折り曲げる	鶴川方言 浦河方言	鶴川方言では二項動詞は rewe と共存。
cakke	開く	～を開ける	鶴川方言	二項動詞は caka と共存。
rutke	くずれる	～を押しずらす	沙流方言	二項動詞は派生語中でのみ確認。また、 rutu と共存。
noyke	ねじ曲がる	～をねじ曲げる	沙流方言	二項動詞は派生語中でのみ確認。また、 noye と共存。
kekke	折れる	～を折る	沙流方言	
maka	開く	～を開ける	浦河方言	
noye	ねじ曲がる	～をねじ曲げる	浦河方言	一項動詞は noyke と共存。

8.4.2. 対象付加

一項動詞と二項動詞の間に結合価の揺れがみられる場合、その二項動詞が、一項動詞に対象が付加された関係になっているものがある(表 21)。このタイプでは一項動詞は、動作主主語動詞であり、二項動詞は対象目的語動詞である。一項動詞の主語と、二項動詞の主語が一致し、二項動詞の目的語である対象が現れるかどうか異なっている。

表 21. 対象付加の結合価の揺れ

	一項動詞	方言	二項動詞	方言	揺れのタイプ
yaske	顔を洗う	浦河方言	～(顔)を洗う	沙流方言等	方言間の揺れ
pakkay	子どもを負ぶ	浦河方言	～を負ぶ	沙流方言等	方言間の揺れ
suke	料理する	浦河方言	～を料理する	沙流方言等	方言間の揺れ

このタイプの一項動詞は「意味上は対象に対する働きかけを含むが、動詞の意味に既に対象が含意されている一項動詞」であるという特徴がある。

留意すべき点として、**yaske**、**pakkay**、**suke** は沙流方言など多くの方言において一項動詞として確認され、二項動詞として確認されるのは例外的である。つまり、上に挙げた三語はいずれも一項動詞としての機能の方が基本的である。そこから対象を付加する二項動詞としての用法が生まれた可能性が高い。

8.5. 二項と三項の同形動詞―項の意味役割による分析―

本節では、第三章でみた動詞基本形とその項の意味役割を基準に、二項動詞と三項動

詞の間にみられる同形動詞について分析を行う。これは先行研究であげられていた *o* である。*o* は多くの方言、話者において二項動詞としても、三項動詞としても使われる例が確認できるため、結合価の揺れというより、同形動詞として扱うべきものとして本論文では考える。

第七章でも触れたように、*o* の項の意味役割は次の四種類に分けられる。

1. 主語：動作主 目的語：対象
2. 主語：動作主 目的語：空間・場所
3. 主語：対象 目的語：空間・場所
4. 主語：動作主 目的語：対象、空間・場所

以下にそれぞれの例を再掲する。なお、1 の主語が動作主で目的語が対象である例は切替(1988)で挙げられている十勝方言の例であり、沙流方言の例ではない。

1 の例 二項動詞 主語：動作主 目的語：対象

- (38) *or en asopiw a=o kor*
 ~の中に オヒョウニレの樹皮 4.S=~を入れる すると
 その中(染料となる樹皮を煮た液の中)にオヒョウニレの樹皮を入れておくと
 [切替 1988 : 29]

2 の例 二項動詞 主語：動作主 目的語：空間・場所

- (36) *sinot kusu paye utar ne cip o pa*
 遊ぶ ので 行く 人々 その 舟 ~に入る(乗る) 複数
 遊びに行った人々はその舟に乗り
 [田村 1984 : 22]

3 の例 二項動詞 主語：対象 目的語：空間・場所

- (34) *yam o kamasu yam o saranip*
 栗 ~に入る カマス 栗 ~に入る サラニブ
 栗の入ったカマス、栗の入ったサラニブ
 [田村 1984 : 32]

- (35) *mame ka ipe o oasi noyne siran*
 豆 も 実 ~に入る するところだ ような 様子である
 豆にも実が入る(生る)ところのようだ
 [田村 1984 : 50]

4 の例 三項動詞 主語：動作主 目的語：対象、空間・場所

(33) mesi itanki or a=o kor
 ごはん 茶碗 ~のところ 4.S=~に~を入れる すると
 ごはんを茶碗に入れると

[田村 1984 : 58]

主語が動作主であり、目的語が対象である 1 の場合と 4 の三項動詞を比較すると、三項動詞は二項動詞に空間・場所が付加された関係になっている。主語が動作主であり、目的語が空間・場所である 2 の場合と、4 の三項動詞を比較すると、使役交替の関係になっていると考えられる。第七章で述べたように、空間目的語動詞の主語が動作主である場合に、この動作主を被使役者とする使役の事象を表わすには、使役接尾辞・RE を接尾させた形が用いられやすい傾向がある。例えば、o は二項動詞に使役が加わると、同形の o で三項動詞として「~に~を入れる」という意味で用いられるが、ore という使役接尾辞がついた形も確認される。そして、ore は被使役者の意志性が高い場合に用いられる傾向がある。主語が対象であり、目的語が空間・場所である 3 の場合と、4 の三項動詞を比較すると、使役交替の関係になっている(表 22)。

ただし、表 22 の 1 は沙流方言ではなく、十勝方言にみられたものである。

表 22. o の項の文法機能と意味役割

	o	主語	目的語
1	~が~を入れる	動作主	対象
2	~が~に入る(乗る)	動作主	空間・場所
3	~が~に入る(生じる)	対象	空間・場所
4	~が~を~に入れる	動作主	対象、空間・場所

8.6. 0 項動詞にみられる結合価の揺れ

0 項動詞は一項動詞に名詞的要素が一つ接頭した形の動詞である。本節では sir を含む 0 項動詞が名詞句を一つとり、一項動詞のように機能している例がみられることを指摘する。sir は田村(1973)では次のように記述されている。

sir は、そのままでは独立の名詞としては用いられないが、語源的にこれの所属形であることの疑いのない siri は独立的に用いられ、漠然とあたりの様子、目に見える有様を表わす。合成語の要素としては、天候や自然現象、地形などに関する語の中によく現われ、英独仏の it,es,il が用いられる場合に相当することが多く、自然界の様子を漠然と表わすほか、場合によっては《土地》、《山》などをさすこともある。

[田村 1973 : 119]

0 項動詞が名詞句を一つとり、一項動詞のように機能している具体例をいくつか挙げる。

- (72) menoko mina haw sir-wenruy hi a=nu.
女性 笑う 声 あたり-騒がしい こと 4.S=～を聞く
女性の笑う声があたりに騒がしいのを私が聞いた。
(女性が笑う声であたりが騒がしいのを私は聞いた)

[平石 2003 : 604]

この例では、動詞は wenruy 「騒がしい」という一項動詞に sir が接頭しているので、0 項動詞と考えられるが、menoko mina haw 「女性の笑う声」という名詞句が一つ現われており、一項動詞のように機能しているように見える。

- (73) cise onnay ka sir-peker
家 ~の中 も あたり-明るい
家の中もあたりが明るい。
(家の中も明るい)。

[田村 1997:94]

また、(73)でも、動詞は peker 「明るい」という一項動詞に sir が接頭しているので、0 項動詞と考えられるが、cise onnay 「家の中」という名詞句が一つ現われており、一項動詞のように機能しているように見える。

- (74) kapar upas ka ta isepo apir sir-ci-ninanina wa an
薄い 雪 ~の上 に ウサギ 足跡 あたり-動作主-～をこねる(重複) して ある
薄雪の上にウサギの足跡があたりにごちゃごちゃしている。
(薄雪の上にウサギの足跡がごちゃごちゃついている)

[萱野 2002:266]

この例では、動詞は ninanina 「～をこねる(重複)」という二項動詞に、まず、ci-が接頭して「こねられる」のような意味の一項動詞になり、さらに sir が接頭しているので、0 項動詞になると考えられるが、isepo apir 「ウサギの足跡」という名詞句が一つ現われており、一項動詞のように機能しているように見える。

一項動詞のように機能している 0 項動詞は 17 語確認されている (表 23)⁴⁵。

⁴⁵ 表中の語で本章の中で用例を挙げていないものについて、以下に出典を記しておく。

sitciturimeta 田村(1996:649)
sitcitestesu 萱野(1998 c:132)
sitcininanina Nakagawa& Bugaeva2012 K770824_2_UP

表 23. 一項動詞のように機能する 0 項動詞

アイヌ語		語構成	
sitcininanina	あたりがぐちゃぐちゃしている	sir-ci-nina-nina	あたり・動作主-~をこねる-~をこねる
sircipukrototo	あたりにブツブツと音がする	sir-ci-pukrototo	あたり・動作主-~にブクブク音をさせる
sitcitestesu	あたりがぐちゃぐちゃしている	sir-ci-testesu	あたり・動作主-~を反らす
sitciturimeta	あたりにドンドンと音がする	sir-ci-turimeta	あたり・動作主-~にドンと音を立てる?
sinratci	あたりがおだやかである	sir-ratci	あたり・おだやかである
sirhanke	近い	sir-hanke	あたり・近い
sirhumumatki	あたりがごうごう響く	sir-humumatki	あたり・ごうごう響く
sirkunne	あたりが暗い	sir-kunne	あたり・暗い
sirkuttek	あたりにたちこめている	sir-kuttek	あたり・たちこめる
sirpeker	あたりが明るい	sir-peker	あたり・明るい
sirpop	あたりがにぎやかだ	sir-pop	あたり・にぎやかだ
sir'uhawepopo	あたりが騒がしい	sir-uhawepopo	あたり・互い・声-~で騒ぐ
sir'ukocayayke	あたりにたくさん棘が出ている	sir-u-ko-cayayke	あたり・互い-~に対して-とげとげしている
siruskosanu	あたりがパッと消える	sir-uskosanu	あたり・パッと消える
sirwenruy	あたりが騒がしい	sir-wenruy	あたり・ひどく激しい、あたり・騒がしい
siryaskosanu	あたりが裂ける音がする	sir-yaskosanu	あたり・パッと裂ける
sinroyse	あたりが騒がしい	sir-royse	あたり・騒がしい

このような語は複数の話者の用例にみられることから、特定の話者にのみ見られる揺れ

siryaskosanu	北海道教育庁生涯学習部文化課編(1999:107)
sir'ukocayayke	アイヌ民族博物館(2015b:119)
sirpop	国立大学法人千葉大学(2015c:2226)
sirkuttek	Nakagawa& Bugaeva2012 K8106233UP
sirkunne	Nakagawa& Bugaeva2012 K7708241UP
sirhumumatki	北海道教育庁生涯学習部文化課編(1996:140)
sirhanke	萱野(1998 b:56)、国立大学法人千葉大学(2015a:277)、田村(1989:32)
sinroyse	国立大学法人千葉大学(2015c:1647)
sinratci	Nakagawa& Bugaeva2012 K8108011UP

ではないことがわかる。

また、0項動詞が名詞的に機能することもあり、この点でも一項動詞のように機能することがあると言える。

(75) ruy rera ruy sirsimoye an yakka

激しい 風 激しい 地震 ある ~しても

激しい風や強い地震があっても

[萱野・須藤 1976]

sirsimoye は sir-si-moye[あたり-自分-~を動かす]という語構成になっており、0項動詞と捉えられるが、(35)では an「ある」の主語として機能しており、名詞的に機能している。

8.6.1. 5つの可能性の検討

このような現象が起こる理由として、本章では以下の五つの可能性を検討する。

1. sir が所属形 siri である可能性
2. 0項動詞の前に来る名詞が副詞節のマーカとして機能している可能性
3. 0項動詞の前に来る動詞がトピックである可能性
4. sir の接頭している一項動詞が二項動詞としても機能する可能性
5. sir が副詞的要素になっている可能性

8.6.1.1. sir が所属形 siri である可能性

0項動詞が名詞句を一つとり、一項動詞のように機能しているに見える場合に、sir が所属形 siri であれば、動詞は0項動詞ではなく、一項動詞となる。例えば、sir-peker[あたり-明るい]「あたりが明るい」という0項動詞の場合、siri が所属形であれば、*siri-peker[~のあたり-明るい]「~のあたりが明るい」という一項動詞として考えることができる。一項動詞であれば、名詞句を一つ取っているのは当然のこととなる。つまり、この場合は結合価に揺れがあるわけではない。

表 21 に挙げた 17 語の中には次のような音韻変化を含む語がある。

-r+c- → -tc-

sitcininanina [sir-ci-nina-nina] あたりがぐちゃぐちゃだ

sitcitestesu [sir-ci-testesu] あたりがぐちゃぐちゃだ

-r+r- → -nr-

sinratci [sir-ratci] あたりがおだやかである

sinroyse [sir-royse] あたりがさわがしい

このような変化は規則的である。仮に **sir** が所属形 **siri** であった場合、このような変化は認められないこととなる。つまり、**sir-ci-nina-nina** の **sir** が所属形 **siri** であった場合は、**siricininanina** となり、上にあるような **r** から **t** への変化は起こらない。

上記のような例があることから、17 語の **sir** を全ては所属形とは見なすことはできず、他の要因を考える必要がある。

8.6.1.2. 0 項動詞の前に来る名詞が副詞節のマーカ―として機能している可能性

幌別方言では証拠性を表わす名詞化辞が副詞節のマーカ―として機能することが先行研究で指摘されている。高橋(2015)では次のように述べられている。

一方、幌別方言においては、証拠性を表わす名詞化辞が副詞節のマーカ―として機能する(金田一・知里 1936 : 160)。ただし、金田一・知里(1936:155-165)では補文節と副詞節の区別が明確におこなわれていない。

[高橋 2015]

このような場合は、一見名詞句のように見えるものは副詞的要素なので、結合価の揺れには当たらない。具体的には次のような例がある。高橋(2015)で引かれていた例を一例ここでも挙げる。

(76)Supsupkami a=wenyupi oar atusa siri Iskar ta ek
きらきら彦 4.S=悪い兄 まったく 裸である ~の様子 石狩 ~に 来る
wa i=koan
して 4.O=~とともにある
きらきら彦、私の兄は丸裸で石狩に来て私と一緒に暮らす

[金成・金田一 1963:353]

高橋(2015)で挙げられている形式名詞(名詞化辞)の例は全て(36)の **atusa siri** のような「動詞+所属形」である。しかし、本論文で扱う 0 項動詞の前に来る名詞は、そのような形に限定されない。

動詞+形式名詞概念形 (72)参照。

名詞+形式名詞概念形

(77) a=eramiskari aynu haw sir-wenruy

4.S=～を知らない 人間 声 あたり-さわがしい
知らない人の声であたりが騒がしい。

[Nakagawa& Bugaeva2012 K7908051UP]

普通名詞

(78) ape sir-uskosanu tek... hikusu

火 あたり-パッと消える ので
火がパッと消えたので

[アイヌ民族博物館 2015c:100]

位置名詞

(79)kaskot or sir-uhawepopo kor oka ayne

仮小屋 ～のところ あたり-騒がしい ながら いる 挙句
仮小屋で騒がしい声がしていたあげく

[平石 2003:655]

以上のことから、全ての例について 0 項動詞の前に来る名詞が副詞節のマーカールとみなすことはできない。

8.6.1.3. 0 項動詞の前に来る動詞がトピックである可能性

0 項動詞の前に来る動詞がトピックである可能性を検討する⁴⁶。

佐藤(2008)は、「東京は高い建物が多い。」のような文は、アイヌ語の場合、この文を直訳した Tokiyo anakne poro cise poronno an. 「東京には大きな家がたくさんある。」のような文は不可能とまでは言えないが、決して一般的ではなく、より一般的な表現は Tokiyo ot ta anakne poro cise poronno an. 「東京には大きな家がたくさんある。」のように「に」を省略しない言い方だと述べている。そして、「アイヌ語は動詞が取り得る名詞句の数を厳格に規定する言語であり、自動詞(一項動詞)の an「ある」が Tokiyo「東京」と poro cise「大きな家」の二つの名詞句を取るかのような構造は忌避されるのである」(p. 4)としている。

ここでは、0 項動詞の前に名詞が一つ現われる現象が、佐藤(2008)では不可能とまでは言えないが、決して一般的ではないとされている構造とみなせるかという問題になる。

次の(40)では 0 項動詞 sitcininanina の前に seta ru「犬の足跡」という名詞が現れている。この物語中ではこれまで犬の足跡や犬については一回も話題にのぼっておらず、

⁴⁶ この可能性について検討すべきであることをアンナ・ブガエワ氏からご教示いただいた。

これは新情報であり、旧情報ではない。そのため、これはトピックであるとみなすことは難しい。

(80) ora ne pon nutap or_ ta seta ru sitcininanina

それから その 小さな 野原 ~のところに 犬 足跡 あたりがごちゃごちゃしている

ruwe a=oyamokte

様子 4.S=~を不思議に思う

それから、その小さな野原に犬の足跡があたりにごちゃごちゃしている様子を私は不思議に思った。

[アイヌ民族博物館 2015a:48]

以上のような例があることから、全ての例について 0 項動詞の前に来る名詞がトピックであるとみなすことはできない。

8.6.1.4. sir の接頭している一項動詞が二項動詞としても機能する可能性

sir の接頭している一項動詞が二項動詞としても機能する可能性を検討する。

sir は空間・場所の意味役割として機能することがある。

主語：動作主 目的語：空間・場所

(81) pet or a=osma hikeka

川 ~のところに 4.S=~に入る しても

川に私が入っても

[アイヌ民族博物館 1997:30]

(82) a=kor ekasi pito sinne kamuy sinne sir-osma wa an.

4.S=~をもつ おじいさん 神 ~のように カムイ ~のように あたり~に入る して ある

私のおじいさんは神のようにカムイのように倒れていた。

[久保寺 1977:122]

(81)の目的語は空間・場所であり、位置名詞の or 「~のところに」がそれにあたる。(82)では、目的語に相当するのは動詞に抱合された sir であり、この二つを比較すると、sir は or と同じ位置を埋めており、空間・場所の意味役割として機能していることがわかる。(82)の osma は二項動詞であり、空間目的語動詞であるが、一項動詞に sir が接頭する場合、sir は空間・場所であるので、その動詞は対象空間主語動詞である⁴⁷。

⁴⁷ sir が接頭するのは必ずしも基本形であるとは言えないが、ここでは三章の項の意味役割にあてはめて考察する。

主語：空間・場所の例

- (83) horippa=an wa sir-wenruy yakun
 踊る(複数)=4.S して あたり-騒がしい ならば
 踊ってあたりが騒がしかったら

[久保寺 1977:161]

(83)は空間・場所が主語の例であるが、wenruy は対象が主語となることもある。

主語：対象の例

- (84) hotuypa hawe wenruy
 叫ぶ.複数 声 騒がしい
 叫ぶ声が騒がしい

[田村 1985:44]

上の例では wenruy は空間・場所あるいは対象を主語としている。これと 0 項動詞が一項動詞のように機能している(72)の sirwenruy と比較すると、wenruy の結合価の揺れとみなすことができる(表 24)。(83)の wenruy は主語が空間・場所の一項動詞であり、(72)は対象を主語とし、空間・場所を目的語とする二項動詞であるので、この二項動詞は一項動詞に対象が付加されたものと考えることができる。一方、(84)は主語が対象の一項動詞であるので、二項動詞は空間・場所が付加されたものと考えることができる。

表 24. wenruy の項の文法機能と意味役割

wenruy		主語	目的語	例
一項動詞として機能するとき	騒がしい	空間・場所		sir-wenruy
	騒がしい	対象		hawe wenruy
二項動詞として機能するとき	～に騒がしい	対象	空間・場所	haw sir-wenruy

上記の三例(83)(84)(72)の項構造は次のようになる。

(83)の項構造 (< [sir] >)
 あたり

(84)の項構造 (< hawe[] >)
 声

(72)の項構造 (< haw [sir] >)
 声 あたり

(84)は空間・場所の位置に名詞は出現せず、対象の位置を *hawe* 「声」が埋めている。出現している名詞は一つなので一項動詞として機能している。(83)は対象の位置に名詞は出現せず、空間・場所の位置を *sir* 「あたり」が埋めている。(84)同様に出現している名詞は一つなので一項動詞として機能している。それに対して(72)では、対象の位置を *haw* 「声」、空間の位置を *sir* 「あたり」が埋め、名詞が二つ出現しており、二項動詞になっている。

日本語でも同様に場所名詞句が主語となることがあり、岸本(2001)はその例を挙げている(p. 115)。

岸本(2001)の例

- a. 音楽が部屋中に鳴り響いている。
- b. 部屋中が音楽で鳴り響いている。

上記の岸本(2001)の例は、aもbも名詞句が二つ現われているが、aでは「音楽」が主語となっており、bは「部屋中」という空間・場所が主語になっており、アイヌ語の(83)(84)の例と平行的に考えることができる。ただし、日本語の場合は名詞句が動詞の必須項であるのか付加詞であるのかの判断が難しい。

一方、アイヌ語ではマーカーなしに現われる名詞は動詞の項として扱われる。場所を内項として扱い、本論文で用いる項構造で表わせば、このような結合価の揺れの現象も、どの項が統語上現れているのかの違いとして表すことができる。

また、(74)の *sitcininanina* と関連して *cininanina* をみると、次のような例が確認できる。

主語：対象

(85) *rukocihi, ci-ninanina* *hine siran*
 足跡 動作主-~をこねる(重複) して 様子である
 足跡がごちゃごちゃしている様子である。

[田村 1986:10]

主語：対象 目的語：空間・場所

(86) *nitay corpok cikoykip* *ru* *ci-ninanina* *pakno* *kane siran*
 林 ~の下 獲物 足跡 動作主-~をこねる(重複) ほど して 様子である
ruwe ne
 こと ~である。
 林の下は獲物の足跡がごちゃごちゃしているほどの様子だった。

[萱野 1998b:84]

上記の二例を比較すると、**cininanina** は(85)では **rukocihi**「足跡」という名詞句を一つ取っており、主語が対象の一項動詞として機能しているが、(86)では **nitay corpok**「林の下」と **cikoykip ru**「獲物の足跡」の二つの名詞句をとっており、主語が対象、目的語が空間・場所の二項動詞として機能している。この二つを比較すると、二項動詞は、一項動詞に空間・場所を付加した関係になっている。

このように **sir** が接頭している動詞に一項動詞と二項動詞の揺れがみられる場合がある。ただし、全ての例について同様の結合価の揺れとみなすことはできない。この点について **sirpeker**「あたりが明るい」を取り上げて考察する。**peker**「明るい」は対象空間主語動詞である。前に挙げた(73)を再掲する。

- (73) **cise onnay ka sir-peker**
 家 ~の中 も あたり・明るい
 家の中もあたりが明るい。
 (家の中も明るい)。

[田村 1997:94]

(73)の名詞項は **onnay**、**sir** であり、どちらも空間・場所である。第三章で見たように、二項動詞の文法機能と意味役割の関係は大きく分けて以下の三種類ある。

1. 主語：動作主 目的語：対象
2. 主語：動作主 目的語：空間・場所
3. 主語：対象 目的語：空間・場所

空間・場所の意味役割のものが項として二つ存在するというのは上記のどれにも当てはまらず、(73)の **peker** を二項動詞として機能しているとは見なしがたい。

以上のことから、全ての例について **sir** の接頭している一項動詞が、二項動詞としても機能しているとみなすことはできない。

8.6.1.5. **sir** が副詞的要素になっている可能性

sir が副詞的要素になっている可能性を検討する。

田村(1996)に挙げられている 0 項動詞(田村の用語では完全動詞)のうち、**sir-hanke** のみ次のように一項動詞(田村の用語では自動詞)としての記述もされている。

sir-hanke 【完動/自動】 [**sir-hanke** 地・近い]

- ① [完動]近い、近くである、時間が近づく ②[自動]近い。

[田村 1996 : 652]

それに対し、hankeの方は一項動詞(自動詞)としてのみ記述されており、二項動詞(田村の用語では他動詞)としての記述はない。

hanke【自動】近い、近くなる。

[田村 1996:170]

本論文では、sir-hankeのような構造がもっと広範囲にみられることを指摘する。

sir-X という 0 項動詞が一項動詞としても機能する場合、X に一項動詞と二項動詞という結合価の揺れが認められるわけではなく、sir-X という動詞に結合価の揺れ(0 項と一項)が認められるとみなせる場合がある。

田村(1973)で語源的に sir の所属形とみなせる siri は「漠然とあたりの様子、目に見える有様を表わす」と説明されているように、sir は具体性が低いので項を埋める機能が弱まり、副詞的な要素となったのではないだろうか。

(73)の sirpeker の peker は二項動詞として機能しているとは見なしがたいことを前に述べた。この例についても sir が副詞的に働いていとみなすことは可能である。つまり、sirpeker 「あたりが明るい」という語は peker の主語として、空間・場所である sir が接頭している。しかし、sir の具体性が低いために、項を埋める機能が弱まり、副詞的な要素となり、別の空間・場所である名詞を項としてとれるようになったとみる見方である。

sir-peker	→	[cise onnay] sir-peker
-1 +1		-1 0 +1
あたり・明るい		家の中 あたり・明るい

sir が副詞的な要素という捉え方は全ての例に適用可能である。ただし、sirwenryu などについては sir の接頭している一項動詞が、二項動詞として機能している可能性を排除することはできない。このような動詞に関しては二通りの解釈が可能である。

sir が副詞的な要素であるという捉え方が全ての例に適用可能であるならば、0 項動詞は実はすべて一項動詞であり、これまで 0 項動詞と考えられてきたすべての例は、名詞句(主語)が明示されていないだけと考えることもできそうではある。しかし、sir は二項動詞に接頭した場合に明らかに項を埋める機能を果たしている例も確認されるため、sir がすべての場合に副詞的に機能するとは言いがたい。よって、全ての 0 項動詞が実は一項動詞であるとする見方は難しい。

8.6.2. 0 項動詞の結合価の揺れと項の意味役割

本論文では sir を含む 0 項動詞が名詞句を一つとり、一項動詞のように機能している

例について 5 つの可能性を検討した。このうち、広い意味で結合価の揺れとみなせる現象は、二種類ある。二種類とは、**sir-X** という 0 項動詞があった場合、**sir-X** に 0 項と一項の揺れがあるとみなせる場合と、**X** に一項と二項の揺れがある場合である。前者の場合には、**sir** が項を埋める実質的な機能を果たすか、あるいは副詞的に働くかという点で 0 項と一項の揺れが生じており、動詞要素(**X**)の結合価に揺れがあるわけではない。後者の動詞要素の結合価の揺れに着目し、第三章でみた動詞基本形とその項の意味役割を基準に分析を行うと、8.6.1.4 で詳しく述べたように、次の二種類が確認された。

1. 空間・場所付加
2. 対象付加

8.7. 小括

動詞の結合価に揺れがある場合、一項と二項の揺れである場合は、その項の意味役割からみると、4 種類が確認された(表 25)。これは **sir-X** という 0 項動詞中に現われる一項動詞 **X** についても含んでいる。

表 25. 動詞結合価の揺れ—一項動詞と二項動詞—

	一項動詞	主語	二項動詞	主語	目的語
使役交替	対象空間主語動詞	対象	対象目的語動詞	動作主	対象
対象付加	動作主主語動詞	動作主	対象目的語動詞	動作主	対象
	対象空間主語動詞	空間・場所	空間目的語動詞	対象	空間・場所
空間付加	対象空間主語動詞	対象	空間目的語動詞	対象	空間・場所

二項と三項の同形動詞の場合は、その項の意味役割の対応は沙流方言においては使役交替が確認された。

第九章 所属形的接頭辞 e-/o-による派生

アイヌ語には e-/o- という接頭辞があり、e- は「頭」、o- は「尻」を意味する。また、これとは別に「頭」と「尻」を意味する接頭辞 he-、ho- がある。この両者の大きな違いは he-、ho- が動詞に接頭すると、その動詞の項数を一つ減らす減価接頭辞であるのに対し、e-/o- は動詞に接頭しても結合価を変更しない接頭辞である点にある。

例えば、二項動詞 puni 「～を持ち上げる」に「尻」を意味する接頭辞 ho- が接頭すると、ho-puni という形になり、動詞全体の結合価は一つ減って一項動詞となる。「尻を持ち上げる」、つまり、「起き上がる」という意味になる。この際には接頭した ho- は目的語の位置を占めており、意味的には「尻」は主語の一部を指し示していると考えられる。それに対し、同じ動詞に o- が接頭し、o-puni という形になった場合、その結合価は変化せず二項動詞のままである。

先行研究ではこの e-/o- という接頭辞は「～の頭」「～の尻」のように動詞に接頭してもさらにその所属先が必要となるために、動詞全体の結合価は変化しないとの指摘がある。この所属先が必要となるという点から本論文では「所属形的接頭辞」と呼ぶ。

本章ではこの e- 「～の頭」、o- 「～の尻」という接頭辞に着目し、その所属先の名詞句の文法機能、意味役割は何であるのかを項構造と共に考える⁴⁸。

9.1. e-/o-に関する先行研究

「頭」を意味する接頭辞 e-、「尻」を意味する o- については先行研究の金田一(1960)、田村(1973)、切替(1989)、奥田(1999)、佐藤(2005)などに記述がある。

9.1.1. 金田一(1960)

金田一(1960)⁴⁹では o- について「物体の下部、下のはずれ、人間なら臀部或は尻、(または陰部にも)などを全て o という」(p. 271) とし、e-/o- は対であり、e- は he- であるとしている(pp. 223 - 224, 271)。つまり、e-/o- はそれぞれ「頭」、「尻」を意味し、he- 「頭」、ho- 「尻」という接頭辞と平行になっているとしている。

9.1.2. 田村(1973)

金田一・知里(1936)でも「e=he- 「顔」」(p. 137) という記述があり、田村(1973)では以上の金田一、知里の指摘を踏まえ、e-/o- の接頭した自動詞について以下のように述べ

⁴⁸ 本章は小林(2009)に加筆修正を加えたものである。

⁴⁹ 金田一(1960)「アイヌ語学講義」は1931年刊行『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』に収録された「アイヌ語法摘要」を改訂増補したものであり、他の先行研究に先立つものである。

ている。

e-、o-は、金田一博士、知里博士が指摘されたように、後述の he-、ho-とともにそれぞれ《頭》《尻》を意味し、数多くの動詞の前部要素として現われる。(中略)e-、o-を前部要素として持つこの型の動詞はあいかわらず自動詞であって、I(引用者注:[名詞(主語)+自動詞]の形になっている動詞)のように完全動詞⁵⁰にはならない。意味上からも、所属形名詞を前部要素として持つグループと平行的である。つまり、e-、o-は名詞の所属形と同じ役割を果たしており、このグループはII(4)の型(引用者注:[名詞の所属形(主語)+自動詞]という構造になっている自動詞)に属すると見ることができる。

[田村 1973:111-112]

アイヌ語の名詞には所属形と概念形という区別があり、所属形の場合は所属先を必要とする。田村(1973)では[名詞の所属形(主語)+自動詞]という構造になっている自動詞をII(4)として分類し、kera-an「～の味-ある、おいしい」、kewe-ri「～の骨・体-高い、丈が高い」などを挙げている。そして、これらの動詞と、e-/o-が自動詞に接頭しているものを同じ構造を持つものとしている。e-/o-が自動詞に接頭した例としては e-tontone「～の頭-はげている、頭がはげている」、o-hewke「～の尻-傾いている、(下のほうが)傾いている」などを挙げている。

また、e-/o-の接頭した他動詞について以下のように述べている。

e-、o-は後部の他動詞の目的語にはなっているけれども、できた合成動詞は自動詞にはならず他動詞である。そして意味の関係を見ると、できた合成動詞の目的語は、後部要素たる他動詞の目的語と一致せず、頭、尻の所有者と解釈することが出来る。つまり ekupa は《lit.その頭を・かむ》、ekuta は《lit.その頭を・こぼす》、oasi は《lit.その尻を・たてる》、ocire は《lit.その尻を・枯らす》だと解釈するとすっきりする。

[田村 1973:105]

つまり、他動詞に接頭した場合、e-/o-はそれぞれ目的語の部分(頭、尻)を示しているということになる。

9.1.3. 切替(1989)

切替(1989)では e-を「所属接頭辞」とし、その意味を「～の先端」としている。また、「目的語相当要素となって二項動詞的語幹に接頭している場合」と「主語相当要素となって二項動詞的語幹に接頭している場合」を挙げている(pp. 192-193)。また、o-につい

⁵⁰ (引用者注)田村(1973)ではこの完全動詞の例として me-an「寒さ-ある、寒い」、sir-kunne「様子-暗い、暗い」、sir-pirka「様子-よい、晴れている」などを挙げている。

ては「～の末端；～の肛門」という意味であるとしている。

9.1.4. 奥田(1999)

奥田(1999)は e- については「動詞に接頭し一つの項の意味を「～の頭」「～の上端」などのように変える接頭辞。動詞全体の項の数は変らない」(p. 16)としている。また、o- については「動詞に接頭し一つの項の意味を「～の尻」「～の下端」などのように変える接頭辞。動詞全体の項の数は変らない」(p. 93)としている。

9.1.5. 佐藤(2005)

佐藤(2005)は e-/o- を「所有者付加接頭辞」と呼び、次の例を挙げている。

e-ca 「～の頭・を切る(植物の先端部分を切り取る)」

e-kay 「～の頭・が折れる(刃物の先が折れる)」

o-asin 「～の尻・が出る(抜ける)」

[佐藤 2005:174]

そして、佐藤(1992)の名詞所属形＋自動詞というパターンはあるが、名詞所属形＋他動詞というパターンはアイヌ語にはないという指摘に触れ、所有者付加接辞は「後ろに他動詞が来る例外(eca など)がみられるが、ほとんどの場合、やはり自動詞が来る」と述べている(p. 74)。

9.1.6. 先行研究での記述

先行研究では he-、ho- が「頭」、「尻」という意味であるのに対し、e-/o- は「～の頭」「～の尻」のように名詞の所属形のような意味を持つということが指摘されている。また、田村(1973)ではこの e-/o- の接頭した自動詞は [名詞の所属形(主語)＋自動詞] という構造になっている自動詞と意味上からも平行的に考えられるとしている。他動詞に接頭した場合、出来た動詞の目的語は e-/o- の所有者であるとの指摘もしている。それに対し、切替(1989)では「二項動詞的語幹」に接頭した場合、目的語相当の要素になる場合と、主語相当要素になることが指摘されており、奥田(1999)では e-/o- の所属先は項の一つとし、どの項であるかは限定されていない。また、佐藤(2005)は基本的に自動詞に接頭するものであるとしている。

9.2. 一項動詞

一項動詞に e-/o- が接頭する場合、その所属先は主語となる。例としては次のようなものが確認できる。

(87)e-horak cise onne cise an ruwe ne

～の頭-倒れる 家 古い 家 ある こと ～である

傾いた家、古い家があったのだ。

[久保寺 1977:250]

この(87)の用例の e-horak は horak 「倒れる」という意味の一項動詞に e-が接頭した形になっている。e-の所属先はこの用例では cise 「家」である。

一項動詞に e-/o-が接頭する場合、その所属先の文法機能は主語である。その例としては以下のようなものが確認できる。

o-hewke ⁵¹	～の尻 - 傾く、傾いている
e-kapke ⁵²	～の頭 - ペちゃんこである、上部がペちゃんこである
e-meske ⁵³	～の頭 - もげる、上部が欠けている
e-kay ⁵⁴	～の頭 - 折れる、先端が折れている
o-asin ⁵⁵	～の尻 - 出る、抜ける
e-en ⁵⁶	～の頭 - 尖る、先端が尖っている
o-uhuy ⁵⁷	～の尻 - 燃える、～の末端が焦げている
e-horak	～の頭 - 倒れる、傾いている
o-peratne ⁵⁸	～の尻 - ばらばらである、～の末端がばらばらである

以上の例の接頭先となっている一項動詞はいずれも対象空間主語動詞であり、非対格動詞である。有対一項動詞と無対一項動詞も含まれている。つまり、e-/o-が接頭する一項動詞は以下のどちらかの項構造を持ち、e-/o-の所属先は対象 y である⁵⁹。統語構造と合わせて示す。

有対の対象空間主語動詞の項構造	(<u>x</u> ⟨y []⟩)
	↓ ↓
有対の対象空間主語動詞の統語構造	φ S

⁵¹ 久保寺(1977:258)で確認できる。

⁵² 久保寺(1977:157)で確認できる。

⁵³ 田村(1984:36)で確認できる。

⁵⁴ 久保寺(1977:325)で確認できる。

⁵⁵ 田村(1984:22)で確認できる。

⁵⁶ 久保寺(1977:155)で確認できる。en という形は確認できないが、o-enke が確認できることから、語根は en であると考えられる。

⁵⁷ 久保寺(1977:194)などで確認できる。

⁵⁸ 田村(1988:18)で確認できる。

⁵⁹ 空間・場所が主語となる場合に、e-/o-が接頭する例は現在確認できていない。

e-hewpa ⁶⁰	～の頭 - ～を傾ける(複数)、～を覗く
e-kaye ⁶¹	～の頭 - ～を折る、～の先を折る
e-taritari ⁶²	～の頭 - ～を持ち上げる(重複)、～の先を何度も持ち上げる
o-enke ⁶³	～の尻 - ～を尖らす
e-kupa	～の頭 - ～を噛む、～をくわえる

対象目的語動詞は以下のような項構造及び統語構造を持つ。e-/o-の所属先は対象 y である。

対象目的語動詞の項構造	(x < y [])
	↓ ↓
対象目的語動詞の統語構造	S O

佐藤(1992)は名詞所属形+自動詞というパターンはあるが、名詞所属形+他動詞というパターンはアイヌ語にはないと述べ、佐藤(2005)では e-/o-が他動詞に接頭するのは例外としていた。確かに名詞所属形+他動詞というパターンは基本的にはアイヌ語には見られないので、名詞と同様に所属先を必要とする e-/o-が他動詞(二項動詞)に接頭するのは例外的と言えるが、対象 y が e-/o-の所属先となるという点では一項動詞と共通している。

9.3.2.空間目的語動詞

e-/o-が空間目的語動詞に接頭する場合は切替(1989)で述べられていたように、その所属先は主語であると考えられる例が確認できる。なお、(60)の例は再掲である。

(89)moshirso kurka	a=	<u>o-us</u>	ruwe ne.
大地	～の上	4.S=～の尻-～につく	こと ～である
地上に(木である)私は根を下ろしたのである。			

[久保寺 1977:447]

(90)okikurmi	puyar ka	<u>e-osma</u>
オキクルミ	窓	～の上 ～の頭-～に入る
オキクルミは窓に頭を突き出した。		

[久保寺 1977:161]

⁶⁰ 久保寺(1977:387)で確認できる。

⁶¹ 萱野茂(1998a:16)で確認できる。

⁶² 久保寺(1977:501)で確認できる。

⁶³ 田村(1985:62)で確認できる。

(60)a=sikehe a=sapaha e-pici p ne kusu

4.S=荷物 4.S=頭 ～の頭-～から離れる もの ～である ので

荷物の先が私の頭から離れたものなので

[銀の滴講読会 2010:26]

(89)の o-us は us 「～につく」という二項動詞に o-が接頭した形になっている。この所属先は目的語の「～に」にあたる mosirso kurka「大地の上」ではなく、主語である「私」であると考えられる。同様に(90)でも e-osma は osma 「～に入る」という二項動詞に e-が接頭した形であるが、その所属先は目的語ではなく、主語のオキクルミであると考えられる。(60)epici は pici 「～から離れる」という二項動詞に接頭辞 e-が接頭した形であり、その所属先は目的語ではなく、主語の a=sikehe 「私の荷物」であると考えられる。

主語が所属先となると考えられる例として以下のようなものが確認できる。

e-osma	～の頭 - ～に入る
o-osma ⁶⁴	～の尻 - ～に入る
e-us ⁶⁵	～の頭 - ～につく
o-us	～の尻 - ～につく
e-oma ⁶⁶	～の頭 - ～に入る
e-pici	～の頭 - ～から離れる

第八章では空間目的語動詞には次の a～b の三種類の項構造が確認されることを述べた。

a.有対空間目的語動詞(非対格的)

項構造 (\underline{x} < y [z])

↓ ↓ ↓

統語構造 ϕ S O

b.有対空間目的語動詞(非能格的)

項構造 (x < \underline{y} [z]) x=y

↓ ↓ ↓

統語構造 S ϕ O

⁶⁴ 久保寺(1977:160)で確認できる。

⁶⁵ 久保寺(1977:363)で確認できる。

⁶⁶ 田村(1985:28)で確認できる。

c. 無対空間目的語動詞(対象は必須項ではない。斜格(道具格)になる。)

項構造	(x	<	[z])
		↓		↓	
統語構造		S		O	

このうち、e-/o-が接頭した場合、主語が所属先となると考えられる例の項構造は、a(用例(60)参照)と b(用例(90)参照)である。一項動詞に接頭する際には、その動詞は対象空間主語動詞であり、e-/o-の所属先は主語である対象 y となる。また、対象目的語動詞に接頭する場合はその所属先は目的語である対象 y であることを述べてきたが、空間目的語動詞の場合も同様に、対象と空間・場所の二つが項となる a の構造の場合は対象 y が所属先になるとみなせる。

問題は b の構造の場合である。b では動作主 x と空間・場所 z が項として統語上現れ、対象 y は現れない。では、なぜ e-/o-が接頭し、動作主 x がその所属先となり得るのだろうか。それは x は動作主であると同時に対象でもあり、対象 y と同定される要素であることと関係していると予測される。つまり、b の構造においては動作主 x は対象 y としての性格も持っているためである。逆に非能格自動詞の主語や c の構造の主語、対象目的語動詞の主語は動作主であるが、y と同定されず、対象としての性格を持っていないため、e-/o-の所属先となりえない。

また、空間目的語動詞が名詞句を一つ抱合した例では e-/o-の所属先が空間・場所である例も確認できる。その例が静内方言の(91)⁶⁷である。

(91) taan sintoko kiyehē munin wa o-pe-kus kotom siran
この シントコ 継ぎ目 腐る ~して ~の尻 - 水滴 - ~を通る らしい 様子である
ki na.
する よ
このシントコは継ぎ目が腐って水が漏りそうだよ。

[静内町郷土史研究会 1992 : 232]

(91)の o-pe-kus は空間目的語動詞 kus 「~を通る」に pe 「水滴」が抱合され、さらに o-が接頭した例である。sintoko 「シントコ」が空間・場所である。項構造で言えば、この動詞は a の構造に該当し、空間・場所 z が e-/o-の所属先となっている。

⁶⁷ (91)は静内方言の例である。筆者は用例を確認できていないが、沙流方言でも oykus[o-i-kus] 「漏る」という語が田村(1996)、萱野(2002)に記載されており、田村(1996)では「主語は水ではなく入れ物」(p. 501)とされている。これは「~の尻 - もの - ~を通る」と解釈でき、(91)に挙げた o-pe-kus と同じ構成になっていると考えられる。

9.4.三項動詞

三項動詞に接頭した場合は目的語が所属先となっていると考えられる例が確認できる。以下に挙げる(92)がその例である。

- (92) kikinni nitek puyar or ta ka apa or ka
 ナナカマド 枝 窓 ~のところ ~に ~も 戸 ~のところ も
 a=e-usi wa okay=an kor pirka p ne na
 4.S=~の頭 - ~を~に付ける ~して ある=4.S ~すると 良い もの である よ
 ナナカマドの枝を窓にも戸にもさして置くといいのだよ。

[中川 2003 : 118]

この e-usi という動詞は usi 「~を~に付ける」という意味の三項動詞に e-が接頭した形になっている。e-の所属先は目的語であり、対象の kikinni nitek 「ナナカマドの枝」と考えられ、「ナナカマドの枝の先を戸につける」という意味になっている。

三項動詞は以下のような項構造及び統語構造を持つ。上の例の e-/o-の所属先は対象 y である。

三項動詞の項構造	(x	<	y	[z]	>)
		↓		↓	↓	
三項動詞の統語構造		S		O	O	

9.5. 小括

e-/o-が接頭する動詞の項構造とその所属先となる項の種類を一覧で示すと次のようになる(表 26)。

e-/o-の所属先となる項は基本的には動作主以外であるということが言える。ただし、空間目的語動詞に接頭する際に動作主が所属先となることがあり、例外的にみえるが、この場合、動作主は対象と同定される要素であり、対象としての性格も持っているために、e-/o-の所属先となると考えられる。

表 26.e-/o-が接頭する動詞の項構造とその所属先となる項

		項構造	e-/o-の所属先となる項
一項動詞	対象空間主語動詞 (非対格動詞)	(<u>x</u> <y []>) または (<y []>)	y
二項動詞	対象目的語動詞	(x <y []>)	y
	空間目的語動詞	(x < <u>y</u> [z]>) x=y	x
		(<u>x</u> <y [z]>)	y または z
三項動詞		(x <y [z]>)	y

第十章 結論

本論文では、結合価と項構造の観点からアイヌ語動詞の分析をおこなった。各章の要約を以下に示す。

第二章「アイヌ語動詞の基本的構造と動詞結合価」では、アイヌ語動詞の基本的構造について概観し、結合価による動詞区分と、接頭辞、接尾辞の分類を示した。

第三章「アイヌ語の動詞基本形とその項の意味役割」では、基本形の一項動詞、二項動詞、三項動詞が、それぞれがどのような意味役割を項としてとるのかをみていき、それにより動詞を5つのタイプに分類した。

第四章「有対動詞」では、使役接尾辞と動詞形成接尾辞についての先行研究の記述を踏まえた上で、本論文で有対動詞として扱う範囲を定めた。そして、沙流方言の有対動詞を形態的観点から分類し、鶴川方言、浦河方言のデータも参照しながら、沙流方言において自他同形型があることを指摘した。

第五章「項構造と語彙概念構造」では項構造と語彙概念構造に関する先行研究として影山(1993,1996,1999)を取り上げた上で、本論文で項構造を用いる理由を述べた。

第六章「一項動詞と対象目的語動詞の項構造」では、第三章及び第四章、第五章での言及に基づき、一項動詞と対象目的語動詞の項構造を示した。

第七章「三項動詞と空間目的語動詞の項構造」では、第三章及び第四章、第五章での言及に基づき、三項動詞と空間目的語動詞の項構造を示した。そして、空間目的語動詞は複数の項構造を持ち得ることを述べた。

第八章「動詞結合価の揺れと自他同形動詞」では、結合価に揺れがみられる動詞と自他同形動詞を取り上げた。そして、その揺れや項の意味役割の関係は使役交替、対象付加、空間付加の三種類に分けられることを指摘した。

第九章「所属形的接頭辞 e-/o-による派生」では、e-「～の頭」、o-「～の尻」という接頭辞に着目し、その所属先の名詞句の文法機能、意味役割を明らかにした。そして e-/o-が接頭する動詞の意味的特徴を項構造によって示した。

以上、本論文ではアイヌ語の動詞基本形を結合価という観点を中心に分類し、その構造を項構造を用いて示すことで意味的な特徴を表した。特にこれまでの研究では明確にまとめて扱われていなかった空間目的語動詞をひとまとまりとして取り上げ、非対格動詞的な性質を持ち得ること、その項構造が複数あることを示した。これにより、アイヌ語の動詞基本形の構造が体系的に明らかになったといえる。

本論文の作成にあたって長年ご指導頂いた中川裕先生に深く感謝申し上げます。また、千葉大学人文社会科学研究所の諸先生方やアイヌ語研究に関わっている諸先生方にご助言いただいたことを感謝申し上げます。また、アイヌ語を直接ご教示頂いた吉村冬子氏、遠山サキ氏にも深く感謝いたします。

略号一覧

1: first person, 2: second person, 4: fourth person, O: Objective, S: Subjective

参照文献(参照ウェブサイトを含む)

- アイヌ民族博物館(1997)『上田トシのウエペケレ』アイヌ民族博物館
アイヌ民族博物館(2015a)『上田トシの民話』1. アイヌ民族博物館
アイヌ民族博物館(2015b)『上田トシの民話』2. アイヌ民族博物館
アイヌ民族博物館(2015c)『上田トシの民話』3. アイヌ民族博物館
奥田統己(2011)「第 191 回例会研究発表資料 アイヌ語の使役と逆使役概観—日本語との対照から—」『北海道方言研究会会報』88.北海道方言研究会
奥田統己編(1999)『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集(CD-ROMつき)』札幌学院大学
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版
影山太郎(1999)『形態論と意味』くろしお出版
影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』研究社出版
萱野茂(1998a)『萱野茂のアイヌ神話集成』1.平凡社
萱野茂(1998b)『萱野茂のアイヌ神話集成』4. 平凡社
萱野茂(1998c)『萱野茂のアイヌ神話集成』5. 平凡社
萱野茂(2002)『萱野茂のアイヌ語辞典 (増補版)』三省堂
萱野茂・須藤功(1976)『チセ・ア・カラ』未来社
金成まつ・金田一京助(1963)『アイヌ叙事詩ユーカラ集』3. 三省堂
岸本秀樹(2001)「壁塗り構文」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.100-126.
切替英雄(1988)「名詞項のとり方に関して動揺を示すいくつかのアイヌ語の動詞」『ウエネウサラ』2. 15-41.
切替英雄(1989)「『アイヌ神謡集』辞典」『北大言語学研究報告』2.
金田一京助(1931)『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』2. 東洋文庫

- 金田一京助(1960)「アイヌ語学講義」『アイヌ語研究 金田一京助選集』1. 三省堂. (金田一京助全集』5, 三省堂, 1993年所収)
- 金田一京助・知里真志保(1936)『アイヌ語法概説』岩波書店. (『知里真志保著作集』4, 平凡社, 1974年所収)
- 銀の滴講読会編(2010)『遠島タネランケ氏の伝承 アイヌ語虻田方言資料』銀の滴講読会
- 久保寺逸彦(1977)『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店
- 国立国語研究所 (2014)『使役交替言語地図』(<http://watp.ninjal.ac.jp>)
- 国立大学法人千葉大学(2015a)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』1. 千葉大学
- 国立大学法人千葉大学(2015b)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』2. 千葉大学
- 国立大学法人千葉大学(2015c)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次(北海道沙流郡平取町)調査研究報告書』3. 千葉大学
- 小林美紀(2007)『アイヌ語動詞における派生法と意味の相関』2006年度千葉大学文学研究科修士論文
- 小林美紀(2009)「アイヌ語の接頭辞 e-と o-に関する考察」『ユーラシア諸言語の動詞論(5) 人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』189. 千葉大学人文社会科学研究科. 1-17.
- 小林美紀(2014)「アイヌ語鶴川方言の有対動詞」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』16:199-215
- コムリー、バーナード(松本克己・山本秀樹訳)(1992)『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房
- 佐藤知己(1992)「『抱合』からみた北方の諸言語」宮岡伯人編『北の言語』三省堂. 191-201.
- 佐藤知己(2005)「アイヌ語地名研究と言語学」『アイヌ語地名研究』8. 153-180.
- 佐藤知己(2008)『アイヌ語文法の基礎』大学書林
- 静内町郷土史研究会編(1992)『静内地方の伝承』2. 静内町郷土史研究会.
- 静内町郷土史研究会編(1994)『静内地方の伝承』4. 静内町郷土史研究会.
- 神保小虎・金澤庄三郎(1989)『アイヌ語會話字典』(北海道出版企画センター, 1973年再刊)
- 須賀一好(2000)「日本語動詞の自他対応における意味と形態の相関」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』ひつじ書房. 111-131.
- 高橋靖以(2015)「アイヌ語のアスペクトと証拠性」平成26年度国立国語研究所共同研究「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」アイヌ語班第2回配布資料.
- 田村すゞ子(1973)「アイヌ語沙流方言の合成動詞の構造」『アジア・アフリカ文法研究』2. (ゆまに書房編集部編『アイヌ語考』4, ゆまに書房, 2001年所収)
- 田村すゞ子(1975)「アイヌ語沙流方言の動詞接尾辞」『アジア・アフリカ文法研究』4. (ゆまに書房編集部編『アイヌ語考』5, ゆまに書房, 2001年所収)
- 田村すゞ子(1988)「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』1. 6-94. 三

省堂

- 田村すゞ子(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
- 田村すゞ子編(1984)『アイヌ語音声資料』1. 早稲田語学教育研究所
- 田村すゞ子編(1985)『アイヌ語音声資料』2. 早稲田語学教育研究所
- 田村すゞ子編(1986)『アイヌ語音声資料』3. 早稲田語学教育研究所
- 田村すゞ子編(1989)『アイヌ語音声資料』6. 早稲田語学教育研究所
- 田村すゞ子編(1997)『アイヌ語音声資料』10. 早稲田語学教育研究所
- 田村すゞ子編(1998)『アイヌ語音声資料』11. 早稲田語学教育研究所
- 田村すゞ子編(2001)『アイヌ語沙流方言の音声資料1－近藤鏡次郎の録音テープに遺されたワテケさんの神謡』(「環太平洋の言語」成果報告書 A2-008)大阪学院大学情報学部
- 千葉大学人文社会科学部(2015)『アイヌ語鶴川方言日本語 - アイヌ語辞典』
<http://cas-chiba.net/Ainu-archives/index.html>(千葉大学人文社会科学部地域研究センターHP)
- 知里真志保(1937)『アイヌ民譚集』郷土研究社。(『知里真志保著作集』1, 平凡社, 1973年所収)
- 知里真志保(1942)「アイヌ語法研究－樺太方言を中心として」『樺太庁博物館報告』4(4).
(『知里真志保著作集』3, 平凡社, 1973年所収)
- 外崎淑子(2005)『日本語述語の統語構造と語形成』ひつじ書房
- 中川裕(1984)「アイヌ語の名詞と場所表現」『東京大学言語学論集 '84』149-160.
- 中川裕(1993)「アイヌ語の Arity Calculation」『国文学解釈と鑑賞』58(1). (ゆまに書房編集部編『アイヌ語考』5, ゆまに書房, 2001年所収)
- 中川裕(1995)『アイヌ語千歳方言辞典』草風館
- 中川裕(2001a)「トゥムンチ ペンチャイ, オコッコ ペンチャイーアイヌ語千歳方言叙事詩テキスト」三浦佑之(編)『叙事詩の学際的研究』千葉大学.91-146
- 中川裕(2001b)「自動性・他動性とアイヌ語の動詞」『ユーラシア諸言語の動詞論』1.千葉大学社会文化科学研究科.1-18
- 中川裕(2003)「道具目的語動詞の深層格と概念構造」中川裕編『ユーラシア諸言語の動詞論』2. 1-9.
- 中川裕・中本ムツ子(2007)『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』白水社.
- 服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店
- 早津恵美子(1989)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて一意味的な特徴を中心に」『言語研究』95. 231-256.
- 平石清隆(2003)「沙流地方のウウェペケレ:上田としの伝承」アイヌ文化振興・研究推進機構編(2004)『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』アイヌ文化振興・研究推進機構. 555-742.
- ブガエワ、アンナ(2014a)「アイヌ語使役交替動詞対データ」『使役交替言語地図』国立国語

- 研究所. (<http://watp.ninjal.ac.jp>)
- ブガエワ、アンナ(2014b)「アイヌ語使役構文に関する再考察」『北方言語研究』 4. 127-147.
- 福田すゞ子(1956)「アイヌ語動詞の構造」『言語研究』 30. (ゆまに書房編集部編『アイヌ語考』 4, ゆまに書房, 2001年所収)
- 北海道ウタリ協会浦河支部(1985)『続浦河地方のアイヌ語』北海道教育庁日高教育局
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編(1996)『平成7年度アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委員会
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編(1999)『平成10年度アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道文化財保護協会
- 本田優子(2001)「川上まつ子アイヌ語文例集」『アイヌ民族博物館研究報告』 7.9-76.
- 柳下み咲(1989)『アイヌ語動詞の意味記述』千葉大学文学部卒業論文
- Fillmore, Charles(1968) "The Case for Case" E. Bach and R. Harms (ed.): *Universals in Linguistic Theory*. Holt, Rinehart, and Winston. 1-88.
- Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. in Bernard Comrie and Maria Polinsky (ed.) *Causatives and Transitivity*. John Benjamins Publishing Company. 87-120.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. MIT press.
- Kulikov, Leonid and Nikolaos Lavidas (2014) Introduction (Special Issue: Typology of Labile Verbs: Focus on Diachrony). *Linguistics* 52(4). 871-877.
- Nakagawa, Hiroshi and Anna Bugaeva (2012) A web-accessible corpus of folktales of the Saru dialect of Ainu by Mrs. Kimi Kimura (1900-1988). ELDP, SOAS, University of London. <http://lah.soas.ac.uk/projects/ainu/>(音声のみ)